

灰と幻想のグリムガル 紅き眼の二刀使い

kia

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここがどこかも知らず、何の為に戦うのか明確な理由も無い。

それでも戦わなくては生きられない。

たとえ、何かの命を奪っても。

誰かの命が散ってしまっても。

今日も僕は仲間の為に剣を振るう。

※『灰と幻想のグリムガル 紅き眼の歌姫』からタイトルを変更しました。

目次

第十二話	第十一話	第十話	第九話	第八話	第七話	第六話	第五話	第四話	第三話	第二話	第一話
襲撃	炎雷	結束	過去	会話	契約	送火	悲劇	生活	初陣	職業	幕開
269	244	223	191	168	141	117	88	67	45	24	1

第十三話	第十四話	第十五話	第十六話	第十七話
狩場	不和	遭遇	分断	乱戦
293	313	334	356	381

第一話 幕開

初めてそれを目にした時、感じたものは強い違和感だった。

陽が沈み、空を見上げる。

するとそこには憎らしいほどに輝く月がいつも街全体を照らしていた。

それだけならば、別段不思議もないのだろうが——問題はその光。

空に浮かぶその月は赤く光を発しているのである。

少なくとも赤い月なんてここに来るまで見たことなど無かった筈。

何も覚えていないのに、何故だかその事だけは覚えていた。

「ユキト、左から来るぞ！」

聞こえてきた声に我に返ると両手で握った二刀を強く握り締め、前傾姿勢から一気に駆けだした。

上段から大ぶりで剣を振り下ろそうとしている敵はこちらの動きについてこれていない。

やれると確信すると速度を落とさず、懐に飛び込んだ。

「ウオオオオ!!」

頭上の敵から雄たけびが上がる。

初陣の頃の自分なら竦み上がっていただろうその雄たけびも、今となつては死の直前に放つた屈辱の悲鳴にしか聞こえない。

剣撃が振るわれる前に一閃、横薙ぎに振るつた剣が肉に深く食い込んだ。

肉を斬る感触が手に伝わってくる。

確かな手ごたえを感じ取りながら力を込めて一気に振り抜くと腹が大きく裂かれ大量の血が噴き出した。

その一撃は間違いなく致命傷。

証拠に敵はズドンと大きな音を立てて倒れ込んだ。

「よし、次!」

足を止めない。

共に闘う仲間と連携を取りながら、周囲の敵を駆逐していく。

そこは戦場。

デッドヘッド監視砦と呼ばれる場所で周りにはオークと呼ばれる敵が溢れている。今、自分達はこの死地で命を懸けた戦闘に身を置いていた。

怒声の響く砦の中を駆け抜ける。

その周りには敵味方問わず死体が溢れ、それを物ともせず未だ群がる敵がこちらに向かつて突撃してくる。

目は血走り、息は荒く、明らかにこちらを殺してやるとばかりに怒気を漲らせていた。

「上等だぜええええ!!」

「あまり突つ込みすぎるなよ!!」

ボロボロになりながらも戦意は衰えず、仲間の一人が突つ込んでいく。

同時に響く轟音。

仲間が続くように走る僕は響いてくる音の元凶を確かめる為に横目でその中心を見た。

そこには圧倒的な力を持って猛威を振るう二人の怪物がいた。

「ハアアアア!!」

二人の扱う獲物が激突し、その度に凄まじい音と共に衝撃が巻き起こる。

それは一種の結界のように突風を発生させ、他の者達を寄せ付けない。

不用意に近づけば、それだけで命を奪われてしまう。

別次元の戦いを繰り広げている二人は驚く事に美しい女性だった。

身につけている軽装を靡かせ、相手の首を取らんと殺意の刃をぶつけ合う。

扱う獲物も戦い方もまるで違う二人だったが、共通している部分もある。

眼だ。

その眼は離れているにも閃わらず、紅く煌めいている。

まるで最初に見た、あの赤い月のように。

「ユキト！」

「分かつてる！」

余計な考えを振り捨て、戦闘に集中する。

自分のその眼もまた紅く光を発していた。

◇

此処にたどり着いて何日経ったのだろうか。

ユキトの覚えている一番古い記憶はここ『グリムガル』と呼ばれる世界に存在するこの街、『オルタナ』にたどり着いたところだったりする。

最初にそんな声を聞いた気がする。

「……………」

ゆつくりと瞼を開けると、周囲は何も見えない真つ暗闇。

いや、僅かだが明かりが見えるがそれは本当に僅かなものであり、周囲が見渡せる程ではない。

せめて何か様子が分かるものでもないかと、周囲に手を這わすと何かゴツゴツした感触が伝わってきた。

細かい砂と小石のようなもの。

息苦しさと横の岩壁。

ここは洞窟のような場所らしい。

そのまま周囲を探っていると、何か動くような気配がした。

そして——

「もしかして誰かいる?」

恐る恐るといった感じで声が聞こえてくる。

声色からして同年代くらいの男だろう。

「うん、いるけど」

「こつちにもいます」

「ああ」

「何人いるんだ？」

「ここ何処なんだよ？」

自分が返事をしたのを皮切りに次々に声上がる。

どうやら複数の人がこの場所に居たらしい。

正直どうしようかと思つたけど、一人じゃなかつたのが幸いだつた。

しかし問題が解決した訳ではない。

むしろ問題はここからだつた。

何故なら僕はユキトという自分の名前以外何も覚えていない事に気がついたからだ。

何故ここに居るのか？

前はどこに居たのか？

自分は一体誰なのか？

思い出そうとするが欠片も浮かんでくるものがない。

それは僕だけではなかつた。

他の皆も同じで他に何も覚えていなかったのである。

「どうすんだよ、これ？」

「ここに居ても仕方ない」

男の一人が立ち上がる気配と共にゆっくり歩き出す音が聞こえた。

どうやら壁を伝って明かりが続いている方向へ向かうつもりようだ。

確かにこんな場所で座り込んでいても何も分からない。

最初に歩き出した男の後を追う為に立ち上がると他の者たちもついてくる気配がした。
た。

皆で一緒に壁伝いに外へと出る。

外には見たこともない街と不気味に光る赤い月が見えた。

もちろん見覚えなど全くない、というか違和感しかない。

不気味な寒気すら走る。

「あれって街だよな？ 見覚えある奴いるか？」

「いや、僕は知らない」

「俺もだな」

自分達のいた場所を確認しようと振り返る。

そこには高い塔のような建物がそそり立っていた。

勿論それにも見覚えなどない。

しかしどうやら僕達は小さな丘の上に建っている塔の中に居たらしい事は分かった。目の間に広がる全く見覚えのない街と赤く光る月にそそり立つ塔。

そこがどこかも分からず途方に暮れていると突然ツインテールの女が前に飛び出してきた。

「どーもーようこそ、『グリムガル』へ。案内役を務めるひよむーですよ!!」

「は?」

「なんだお前?」

先頭に立っていたギャングのような男が鋭い視線で威圧する。

ひよむーと名乗った女性はビビったのか、すぐに塔の陰に顔を引つ込めてしまった。

「怖いですねえ。あの、話を進めたいのですがあ、いいですかあ?」

「ムカつく話し方をする奴だな。さっさとしろよ」

丸刈りの男がイラついたように怒りを込めた視線で睨みつけると、ひよむーは怯えたように身をすくめる。

「怒らないで下さいよお。とりあえずお仕事させてもらいますねえ。皆さん、私に付いてきてください」

何の説明もせず歩き出すひよむーの後をギャング風の男を先頭にして歩き出す。

ひよむーが何者なのか分からないまま付いて行く事は少々迂闊とも思えた。

だけど生憎当てもない状況だ。

少しでも現状を知る為には付いて行く他なかった。

丘から下るように麓に向かって歩みを進めていくと、街の入口に辿りつく。

「ここが『オルタナ』の街ですよ。さ、このままついて来てくださいねえ」

ひよむーの後について歩き、石造りの家が立ち並ぶ区域を抜けた先にある建物の前に立った。

「ようやく到着しました、ここがオルタナ辺境軍義勇兵団レッドムーンの事務所ですよー!!」

案内されるままレッドムーンの事務所の中に入るとひよむーは「じゃ、ブリちゃん、後にはよろしくー!」と出て行ってしまった。

残されたユキト達はカウンターからこちらを見ているブリちゃんとやらの方へ視線を向ける。

何かこのブリちゃんって人はどうも変な感じがする。

間違いなく男なのだが、やたら化粧が濃く、仕草もどことなく女性的なものを意識している。

もしかすると、この人は所謂――

「ふーん、こちらにいらっしやい子猫ちゃん達。私はブリトニー、当オルタナ辺境軍義

勇兵団レッドムーンの事務所の所長兼ホストよ。呼ぶときは所長かブリちゃんです！」

気味の悪いウインクに僕は若干、いやかなりドン引きしてしまった。

要するにこのブリトニーなる人物はオカマという奴なのだろう。

ほぼ全員が同じ感想を抱いたらしい。

だげどギャングのような男だけは怯まずブリトニーの傍に寄って行く。

「所長、ここにオルタナと呼ばれる街なのは分かった。しかしその辺境軍だの義勇兵というのは何のことだ？　そもそも俺達は何故ここに居る？」

「威勢がいいわねえ。嫌いじゃないわよ。貴方みたいな子。名前は何？」

「レンジだ。俺はあんたみたいなオカマは好きじゃないんだよ」

「そう」

ブリトニーが不気味な薄い笑みを浮かべ何かを振り上げる仕草をしたようにみえた。

その瞬間、レンジの前にナイフが突きつけられていた。

「二つ教えてあげる。私をオカマ呼ばわりして長生きした奴はいないわ。アンタならこの意味がわかるんじゃない、レンジ？」

「そうだな。長生きしたい訳じゃないが、脅されて従うのは性に合わないな」

驚くことにレンジはナイフを素手で掴み、一步も引く事無くブリトニーと睨みあつて

いる。

当然、手からは血が滴り落ちていく訳だがそれを一切気にしていない。

ブリトニーは初めからまともとは思えなかったがこのレンジも結構な度胸をしているらしい。

「ふふ、ま、それは今度ゆつくりとね。それよりも仕事の話をしましょうか」

ナイフに着いた血を拭い、ブリトニーは笑みを湛えながら何事もなかったように語り出した。

ブリトニーの話聞いたユキト達が突きつけられた選択肢は二つ。

義勇兵見習いになるか、否かだ。

義勇兵というのは端的に言ってしまうえば、モンスターたちと戦いオルタナの街を守る者たちの事。

ここ『オルタナ』はアラバキア王国に属する街で現在この国では敵対種族と戦争状態にある。

防衛拠点である『オルタナ』は辺境軍と呼ばれる軍隊が守っているらしい。

だが彼らは侵攻してくるモンスターと戦う最前線を支えるので精一杯。

だから彼らが街を守っている間に、周辺に存在する敵対種族やモンスター達を討伐するというのが義勇兵の仕事らしい。

「で、どうする？ 別に義勇兵にならなくてもいいけど？」

ブリトニーが意地の悪い笑みを浮かべて僕たちを見ている。

「具体的に何からすればいいんだ？」

「あら、がっかりさせないでね、レンジ。ここから自分を生かすのは、才覚と独自の判断、己の技量のみよ」

「なるほど。つまり何をすべきか自分で情報を収集し、判断しろと。それが義勇兵の流儀って訳だ」

「その通り」

ブリトニーはカウンターのの上に革袋と硬貨のような物を人数分置いた。

三日月のような模様が浮かび上がった硬貨のような物が見習い義勇兵の身分証であり、革袋の方にお金が入っているらしい。

「銀貨二十枚。つまり二十シルバーでアタシから団章をかうと見習い卒業。一人前の義勇兵として認められるわ。ま、自分で調べろって言ったけど、まずは一人前の義勇兵になる事を目標にしてみたらどうかしら」

「なるほどな」

レンジは躊躇いなく革袋を掴むと丸刈りの男が続く。

そしてユキトもまたすぐさま革袋を手に取った。

無論、義勇兵にならないという選択もできた。

ただし、そうするとすべて自分の力のみでこれから生きてゆかねばならない。

それは義勇兵も同じことなのだが、義勇兵見習いになれば銀貨十枚、つまり十シルバーお金がもらえる特典が付いている。

記憶も知識も無い。

頼れる人もいない。

さらにお金もない。

となれば選択の余地はなかった。

その証拠に躊躇う者はいいても、義勇兵見習いにならなかつた奴は一人もいなかった。

すべての説明と言えるのかどうかは分からないけどやる事が明確になった後に待っていたのは憂鬱なチーム別けだった。

今までがどうだったかは覚えてないが、とても社交的とは呼べない性格である事は自分で分かる。

多分、余るなあとか思っていたら案の定。

レンジは丸刈りの男ロンとアダチ、チビちゃん（本名不詳）、サツサと言った自分が選んだ人間だけ連れてさっさと街の中へ消えてしまった。

「……………どうする、ユキト？」

隣に立っていた眠そうな目をした同い年くらい少年ハルヒロが声をかけてきた。

「えっと」

どうするも何も、どうしようも無い。

所長もレンジに対してすべては自分達でなんとかしろと言っていた。

情報を集める事も、これからの指針を立てる事も、すべて自分でやるのが義勇兵の流儀であると。

何でもかんでもお膳立てしてもらえろと思うなという事だ。

とりあえず、レッドムーンの前に残ったハルヒロ以外の人を見渡す。

ハルヒロを除きそこに居るのは、むすつとこちらを見ている天パのランタ、ニコニコしているおさげの子ユメ、恥ずかしそうに俯いているシホルの三人だけ。

先程まで一緒だった年上と思われる青年マナトは「少し待ってて」と別の方向へ出て行った。

近くに立っていた大きな体を持つモグゾーはクズオカと名乗る義勇兵に連れて行かれてしまった。

駄目だ。

自分が言えた義理ではないが、リーダー的に頼れる人は誰もいない。

「……とにかく情報かな。団章を買う為にお金も稼がないといけないし」

自分達はおくまでも見習い。

正式な義勇兵と認められるには団章を買う必要がある。

所長もまず正式な義勇兵になる事を目標にしてみろと言っていた。

別に義勇兵にこだわりがある訳ではないが、今は他に目標もない。

それに正式な義勇兵になれば、情報も集めやすいし今よりは現状も把握しやすくなる

筈だ。

そんなユキトの提案に座り込んでいたランタが口を開いた。

「あてはあんのかよ？」

「そんなのある訳ないよ」

「何だよ、駄目駄目だなあ、ユキトは」

「じゃ、ランタは何かあてはあるの？」

「無い！」

きつぱりと言いつ切るランタに皆が呆れたように視線を向ける。

何でそんな自信満々なんだろうか？

そこで不安そうに俯いていたシホルが顔を覆ってしゃくり上げ泣きだしてしまった。

「ど、どうしたの？」

「ど、どめんなさい。急に不安になって」

それもそうだ。

こんな状況で不安にならない方がおかしい。

特にシホルは大人しそうな性格をしているようだし、なおの事だろう。

「えと、大丈夫だよ、僕達が何か聞いてくるからさ。ね、ハルヒロ」

「えっ、あ、うん」

二人揃って碌な言葉も出てこないとは、情けない。

でもこれが精一杯なのだ。

「……あの、ありがとう」

シホルは涙を拭くときぎこちないながらも笑ってくれた。

「ホントにいいん？」

「うん、ユメ達はここで待ってて」

「よし、じゃお前らに任せたからな！」

「ランタは来ないの？」

「言いだしつぺはお前だろ。物事つてのはそういうもんだ。お前は情報を探してくる

係、俺はここで待ってる係だ」

「清々しいまでに他人任せだな」

「爽やかだろ」

ハルヒロは「すげーむかつく」とぼやいていたがランタにこれ以上何を言っても無駄のようだ。

ユキトはハルヒロと今だ何かを言っているランタを置いて一緒に歩き出すが、初めに言っていた通り当てなど全くない。

「えと、義勇兵の人を見つけて話を聞けばいいかな?」

「教えてくれればいいけど。でもどこにいるのか解らないし」

人通りに多い所にいるとは思うが、道を歩いていてもこういう時に限ってそれらしい人は見つからない。

「こういう時ってさ。酒場とかに行けばいいんじゃない。定番でしょ」

「ああ。そうだよなって、定番って何の定番なの、ユキト?」

「えっ」

ハルヒロに言われて思わず固まってしまった。

「そういえばそうだ。」

「何の定番なんだろう?」

何も覚えていない筈なのに、たまにこうして何か自然と口にする事があるのが不思議だった。

「何なんだっけ?」

「まあとにかくそれらしい方へ行ってみようか」

「うん」

歩いていて見つけた美味しそうな肉の串焼きを売っている露天でオルタナで使われている硬貨の話を聞き、両替と金の預かりも行っているヨロズ預かり商会の事を教えてもらった。

とりあえず串焼きにかぶり付く。

「旨い」

串焼きがとにかく美味しい。

ハルヒロと一緒にそのヨロズ預かり商会へ行く道を歩いていると、ユキトの耳に何か聞こえてきた。

「え、何？」

綺麗な声だ。

前を歩くハルヒロに何も言わず、思わずつられるようにそちらの方へ歩き出すと何かの店の前に辿りついた。

店の前に立ってかけられた看板を見ると酒の絵が描かれている。

そこそがユキトが探していた酒場であった。

「聞こえてくるのは……歌かな？」

綺麗な歌だった。

心に響いてくるかのような、引きつけられる感じがする。

「……でも何か嫌な感じが」

ユキトは歌は気になるが、何故か中に入る勇気が湧かずゆつくりと入口から覗き込む。

覗きこんだ店の中は様々な客で溢れている。

それこそ屈強な男から踊り子のような軽装の女性まで多種多様だ。

しかしその全員が何もしゃべる事無く黙って、店の奥に釘付けになっている。

「アレって」

奥では一人の女性が歌っていた。

銀色の長髪に透けるような白い肌、軽装ではあるが腰には長い剣を携えている。

絶世の美女という言葉が実に似合う女性だった。

女性慣れして無いユキトでさえそう思うのだ。

その美女がこれだけの美しい声を歌っていれば皆が聞き惚れるのも当然である。

しかしユキトが感じたのは全く別のものだった。

感じ取ったのは——怖気。

「な、何だよ、あの人」

確かに綺麗だ。

十人見れば、十人とも振り返るのは間違いない。

しかし、彼女はどこか普通ではない。

根拠もなければ、証拠も無い。

だけどある種の確信がある。

——彼女に不用意に関われば死ぬ。

離れるべきだ。

本能に従うようにユキトが入り口から離れようとした時、丁度彼女が歌い終え入り口の方へその紅い瞳を向ける。

目が合った気がした。

まるで血の様に紅い眼。

思い起こすのは空に浮かぶ赤い月。

不気味な違和感しか感じないそれを思い起こしたその瞬間、ユキトは逃げように走り出した。

何も考えず一心不乱にただ走る。

どこを走ったのか覚えていないが、いつの間にかハルヒロと歩いていた場所へと戻ってきていた。

「ハア、ハア、何なんだアレは」

自分でも分からない恐怖で手が震える。

とにかく落ちつけ。

何でも無い。

自分には関係ないのだから——

「何やってんだ、ユキト」

「うわああああー！」

「うわあー！」

声を掛けられ振り返るとハルヒロが優男と一緒に立っていた。

同じ事務所にいたマナトだ。

柔らかい雰囲気で自分達より年上に見えるその姿はとても頼りになるように見える。

レンジ達とは別の方へ出て行った筈だけど、何でここにいるのだろうか？

「大丈夫、凄い汗だけど」

「うん、マナトこそ。何で？」

「事務所に戻る所だったんだけど、途中でハルヒロに会ってさ。ユキトもいるって聞いたから探してたんだ」

「そうだよ、いきなり居なくなるからびっくりしたよ」

「はい、めん」

マナトが差し出してくれた手を掴むとそのまま立ち上がった。

「じゃ、戻ろうか。色々分かったし」

「ホント？ ハルヒロの方は？」

「うん。話は聞けた」

「じゃあ、僕だけか。ランタに何か言われそう」

「絶対言うよな」

「アハハ」

「笑い事じゃないよ」

マナトやハルヒロと話をしている内に身に巢食っていた恐怖は消えていた。

それでも振り返れば再びあの恐怖が襲ってくるのではという、別の恐怖は頭の隅から

消える事は無かった。

だから、ユキトは必死にハルヒロ達の会話に耳を傾け続けた。

でもユキトはまだ知らない。

この先にある戦いも、別れも、苦難も、そしてあの恐怖を再び味わう事もまだ何も知

らぬまま。

ただ分かっているのは一つだけ。

この日からユキト達の義勇兵見習いの日々が始まる事だけだった。

第二話 職業

ユキトは体中の痛みに耐えながら、ゆっくりオルタナの街を歩いていた。

「痛ッ、あくもう、師匠は手加減し無きすぎだよ」

特に痛む腹を抑えると思わずため息が出る。

ユキトはたった今、ギルドで過した地獄のような七日間を終えた所。

仲間達との待ち合わせ場所へ向かっていた。

ギルドとはここオルタナの街に存在する同業者組合の事で、この地では職業に就くには必ずこのギルドに加入しなければならぬというルールが存在する。

一見不自由にも感じられるが、ギルドに加入しなければその職業の技術を習得することはできない。

ギルドが存在するのは鍛冶や大工、調理師と言った聞き覚えのある馴染み深いものから、戦士や盗賊、聖騎士、神官、魔法使いなどといった戦う為の職業まで様々。

ユキトは義勇兵としての道を歩く為、ギルドに所属する為の手続きを終え七日間に及

ぶ初心者研修のようなものを終えたばかりなのだ。

「さて、みんなはもう集まっているかな」

ハルヒロ達もそれぞれ選んだギルドでユキトと同じように基礎を徹底的に叩き込まれた筈だ。

みんなも苦勞したのかな、なんて考えていると前方に怪しい人影が見える。

というか良く見れば知り合いだった。

黒い三角帽子にローブを着こんでいるが、その後ろ姿と髪型は忘れない。

ゆつくり道の端を歩いている姿は一見不審者にしか見えない。

いや、グリムガルじゃ普通の事なのか、とにかくまずは声をかける為に早足で駆け寄った。

「シホル、さん」

流石にいきなり呼び捨ては無理だった。

前にハルヒロはユメを呼び捨てにしてたけど、ユキトにはまだ難易度が高いようだ。

「あ……ユキト、くん」

最初は怯えたような様子だったが、ユキトの顔を見ると安堵したように胸に手を置いた。

改めて見ると大きいよな、胸、ってどこ見てるんだ僕は！

男だから性欲は勿論あるけど、流石にあからさま過ぎた。

「ひ、久しぶりって程じゃないけど。元氣、だった？」

「う、うん」

「ギルドの方はどうだった？」

「大変だった」

「僕の方もきつかったよ」

会話が全く弾まない。

元々積極的に女の子に話掛けるような人間でもないし、シホルも気まずそうだ。

「と、とにかく行くかうか」

黙って頷くシホルと共に待ち合わせ場所に向けて歩き出す。

気まずい。

けど何を話せばいいのか分からない。

結局碌に会話も無いままそんな事を考えている内に辿りついた待ち合わせ場所には
すでに何人が集まっていた。

「ハルヒロ！」

「ユキト！」

ユキトはマントを羽織ったハルヒロとハイタッチを交すとパンという良い音と共に

笑いあう。

たった七日離れていただけなのに、すごい久しぶりに会った気分だった。それだけギルドでの訓練がきつかったという事なのか。

師匠が鬼だったので仕方ない。

「シホル、ユキ君と一緒にやったんかあ」

「うん」

ユキト達の後ろでは背中に弓を背負ったユメがシホルに抱きついていてる。

ユキ君って僕の事なんだろうか？

ユメの呼び方に少しびびくりしたけど、それよりも気になっていた他の

ギルドの事を聞いてみた。

「盗賊ギルドはどうだった？」

「余裕、と言いたいところだけ凄く大変だった。先生は凄い美人だったんだけど、めちゃくちゃおつかなくてさ。そっちの聖騎士ギルドはどうだったの？」

「……ああ、それか」

そうだった。

まずはそれから説明しないといけなかったんだ。

ユキトが気が重い事実を話そうとした時、丁度残りの二人も待ち合わせ場所に現れ

た。

「よう！」

「盛り上がってるね」

「マナトに、ランタか」

「おい、ユキト！　なんか俺の時だけ、あからさまにテンションおかしかっただろ！
もつと喜べよ!!」

「そんな事無いよ。というかランタ、僕は君には言いたい事が——」
しかしそこでマナトがパンパンと手を叩き、僕の言葉は遮られてしまった。

「とにかくこれで全員揃ったよね。俺が神官、ハルヒロが盗賊、ユキトが聖騎士、ユメさんが狩人、シホルさんが魔法使い。そしてランタくんが戦士かな」

「あ、いや、だから——」

「マナト、お前そのランタくんってやめろよ、まだるっこしいだろ」

「じゃランタで」

「それはそれでむかつくな」

ランタがぶつぶつ文句を言っている間にユメやシホルも呼び捨てで構わないという事になり、ユキトもできる限り呼び捨てでいく事にした。

みんなが呼び捨てなのにさん付けは失礼かもしれないと思ったからだ。

ハルヒロと近づいてきたマナトがハイタッチをかわし、ユキトもまた片手を上げると小気味よい音が響く。

「マナト、お疲れ。実はさ——」

「あれ、なんでユキトが鎖帷子を着てるの？」

そこに気がつくとは流石マナトだ。

ユキトは現在、腰に二本のショートソードと体には鎖帷子を纏っている。

察しの通り、これは聖騎士のものではなく戦士の初期装備なのだ。

「どういう事？」

「うん、それが……」

「よおし、俺からお前らに重大発表がある！

ランタの声に遮られ、またもや話の腰を折られてしまった。

「何、重大発表って」

「実は俺……戦士にはならなかった！ 何ていうか俺の才能は全く別次元にある気がして戦士ギルドに入りませんでしたーっ!!」

「えっ？」

ユキトと話していたマナト以外全員が固まってしまった。

それはそうだ。

義勇兵がパーティを組む上で必須とされる職業がある。

それが神官と戦士の二つだ。

マナトが調べてくれた情報では傷ついた味方を癒せる神官。

そして敵を薙ぎ払い、時にパーティの盾となる戦士。

この二つはパーティの要であり、どんなパーティであろうとも最低一人は必要であると言われている。

だからこそマナトは神官を選び、誰かが戦士になる必要があるという時に、カツコ良さそうという理由でランタが立候補したのである。

あくまでもランタが自主的に選んだのであつて誰かが強制した訳ではない事を先に言っておきたい。

「お前、なんで勝手にギルド変えてんだよ」

「フィーリングだよ、フィーリング！」

「ハア、でランタはどのギルドに入ったんだ？」

呆れ果てた表情で聞くハルヒロの疑問にランタは首に掛けていた髑髏の首飾りを差し出し鎧の胸の部分を指差した。

「これを見ろ！ 死を司る暗黒神スカルヘルに忠誠を誓う暗黒騎士になったんだよ！」

暗黒騎士とは一度入ると二度と抜ける事のできない掟がある事で有名な職業だ。

ユメの「何ができるん？」という質問に嬉々として「悪霊が呼び出せるんだよ」説明するランタ。

そんな二人を尻目にマナトがある程度納得しながらもユキトに質問してきた。

「それで、なんでユキトが戦士ギルドに入ったの？」

「……ああ、それがさ」

ユキトは七日前の事を思い出しながら、話をする事にした。

◇

マナトが集めてきた情報を基に全員がそれぞれのギルドに入る事になった。

数ある職業の中でユキトが選んだのは『聖騎士』

聖騎士は剣や盾を持ち、味方を癒す事もできる職業。

まあ自分を癒す事はできないらしいが、前に出て戦士と共に闘う事も、神官のようにパーティの支援も出来る。

この職業を選んだのはパーティ全体の底上げにもなるし、重要な職業である戦士や神官の代わりを務める事もできて一石二鳥だと思っただからだ。

教えてもらった場所を頭の中で確認しながらオルタナの街を歩いていると、見覚えのある天パが見えた。

「あれ、ランタがなんでこっちにいるんだろ？」

頭の中におぼろげながらも地図を思い浮かべランタの選んだ戦士ギルドの位置を確認する。

「こっちからでは遠回りだよね」

妙な感じを受けたユキトは足早にランタに近寄って声をかけた。

「ランタ」

「うわあ！　って何だユキトかよ」

「悪かったね。それより何でここにいるの？　戦士ギルドはこっちじゃないよ」

ランタはニヤリとどこか嫌らしい笑みを浮かべた。

凄まじく嫌な予感がする。

「丁度いいな。良く聞け、ユキト！　俺は戦士はやめて暗黒騎士になる!!」

「は？　ハア!？」

戦士をやめて暗黒騎士になる!？」

ランタはいきなり何を言い出しているのだろうか。

「良く考えたらさ、俺には戦士とか違う気がすんだよな。それに暗黒騎士ってカッコいいだろ！」

「それだけの理由でギルドを変えるつもりなの？」

「おう」

頭が痛くなってきた。

ランタもパーティには戦士と神官は必須だと聞いていた筈なのに。

「あのさ、ランタ。それはまず——」

「じゃ、そういう事だから、後は任せたぞ！」

「えっ、ちよつと待って、ランタ!!」

ランタはこちらが止める間もなく言いたい事だけ言っただけ言っただけでそのまま走り去ってしまった。

おそらく暗黒騎士のギルドに向かったのだろう。

「マジで……どうするんだよ、これ」

ギルドに入る前から別の事で不安一杯になってしまった。

正直な話、戦士不在のパーティというのはかなり不味い筈だ。

戦士不在なんて事になれば、仲間の皆が困ってしまうだろう。

「ハア、仕方ないか。まだギルドに行く前で良かったって事なのかな」

不幸中の幸い、ユキトはまだギルドに加入した訳ではない。

つまり——まだ職業を選ぶ事が出来るのだ。

「……行こう、戦士ギルドに」

とりあえず七日後にランタに一言文句を言おうと決めて、足取り重く戦士ギルドの方へと歩き出した。

◇

そうして戦士ギルドに加入したまでは良かったが、想像以上に訓練は過酷だった。

特にユキトの師匠となった人はスパルタなんて言葉も生ぬるい程、厳しい人だったのだ。

思い出しただけでも鳥肌が立つ。

師匠は全身を覆うローブと仮面をつけていた為、スクードという名前（これも偽名らしい）以外は顔はおろか性別すらも分からない。

しかしその技量は紛れも無く本物。

それはもう何度となく叩きのめされたのだから間違いない。

剣の構え方から、敵の捌き方まで徹底的に叩き込まれ、気絶した事だつて一度や二度じゃ無かった。

そんな訓練の中、ユキトにとって少し変わった出来事があったのが六日目だ。

その日は朝からスクードと剣を交えていた。

要するに今まで習った事がキチンと身になっているかどうか試す試験のようなもの。

壁に立てかけられた剣や中身が無い空箱が散乱する部屋の中央。

ユキトはようやくやく使い慣れて来た剣の柄を握りしめ、向かい合うスクードの隙を窺う。

「どうした来ないのか？」

「……そんな事言われても」

下段に構える長剣とスクードはまるで一体になっているかのように、全く隙が見当たらない。

それも当たり前だ。

六日前に剣を握り始めたユキトと歴戦の勇士であるスクードでは比べる事も馬鹿らしいくらい差があるのだから。

「来ないなら、こちらから行くぞ」

「ちよっ——」

待つてという言葉が発せられる前に振り抜かれた一撃。

速い!?

ユキトは空気の音を聞き、咄嗟に剣を前面に突き出す。

振るった剣がスクードの横薙ぎの斬撃を受け止める事に成功した。

「くう！ 重い!？」

キイインという甲高い金属音と共に火花が散る。

スクードの一撃を受け止める事はどうにかできた。

しかし凄まじいまでの衝撃が腕を駆け抜け、しびれが走る。

凄まじい重さと衝撃。

あの細身のどこからこんな力が湧いてくるのか。

これに本気の手加減が加われば、ユキトの剣など簡単に叩き折ってしまうだろう。

考えるだけで冷や汗が流れる。

「誰がまともに受け止めろと言った！ 何時も通りに流せ！」

これは一番初めに言われた事だった。

ユキトはお世辞にも体格に恵まれているとは言えない。

少なくとも同期のレンジやモグゾーと比べても明らかに劣る。

つまり力勝負に持ち込まれた場合、押し負けてしまう可能性が高い。

戦士の役割はいかに味方を敵から守るかであり、敵からの攻撃を受けて動けなくなっ

ては意味が無いのである。

「は、は、はー！」

腕に走ったしびれを堪え、交差する剣を弾き飛ばすと今度はこちらからスクードの方へ踏み込んだ。

「ハア!!」

自分なりに裂帛の気合を込め遠慮なくスクード目掛けて剣を袈裟懸けに叩きつける。前に当たって怪我でもしたらなんて考えていたら、「舐めてるのか貴様は」と静かに、そして滅茶苦茶キレられボロボロにされた。

曰くユキト如きの攻撃で傷つく事はないので訓練の時は「常に本気で来い」と朦朧とする意識の中、言われてしまった。

その証拠か、スクードは体を軽く捻るだけでユキトの剣撃を容易く回避する。

「甘いぞ」

「分かっていますよー」

ユキトは続けて斬り上げるように剣を振るう。

一撃、二撃。しかしそれもローブを掠める事すら出来ず、空を切るのみだ。

ヒラリ、ヒラリとローブが舞い、剣閃を避け続けまったくこちらに動きを捉えさせない。
い。

まるで柳のよう。

だがユキトはそれでも手を止めない。

ユキトが他の戦士達と比べて優れている所を探すとすれば手数の方多さと器用さくらい。
い。

受けに回ればその時点で不利になる。

「手数が多いが当たらなければ意味が無い。もっと相手を良く見ろ」

「はいー」

スクードの繰り出してきた一撃をどうにか受け流すと、腕に大きな衝撃が伝わってくるが先程のものと比べれば大した事は無い。

これが本気の一撃だったら、受け流すどころか見る事すらできないんだろう。ユキトは剣を振るいながらも動きを見極め、仕掛けるタイミングを見計らう。狙うはスクードが剣を振るう瞬間。

「アッー」

スクードが上段から剣を振り下ろした所にユキトは横薙ぎに剣を叩きつけた。完璧なタイミング。最低でも剣は弾き飛ばした筈だと確信する。

しかし――

「えっ?」

スクードはユキトの狙いを始めから読んでいたのか横薙ぎの剣閃を受ける前に斬撃の方向を変え、逆にユキトの剣を弾き飛ばした。

正直、何をされたのか解らなかつた。

気がつけば持っていた剣が宙を舞っていたのだから。

「動きを止めるな」

次の瞬間、腹に凄まじい衝撃と激痛が襲いかかる。

スクードが右足で蹴りを繰り出してきたのだ。

「ぐあああ!!」

剣を弾かれたショックで防御する暇も無く蹴りをもろに食らってしまった。

受身も取れず、部屋の隅まで蹴り飛ばされてしまう。

部屋の隅に積み上げられていた長箱にぶつかると崩れる箱と近くに置いてあった練

習用の剣が倒れる音で部屋の中に轟音が響き渡った。

「大丈夫か?」

「……何、とか」

途切れ途切れに返事をしながら、痛みを耐える。

崩れた箱にぶつけた背中もそうだが、蹴られた腹はかなり痛い。

経った六日程度訓練を積んだ程度でどうにかなるものじゃないとは分かっているけ

ど、やっぱり悔しい。

痛みを堪え箱を除けながら、崩れた箱の山から這い出るとスクードが手を差し出して

きた。

「今のは悪くなかった。だが、まだまだだ」

「す、すい、ません」

なんか珍しくほめてくれた気がしたけど、気のせいだったみたいだ。

「少し休憩だ。まずはこれを片づける」

「はい」

崩れ落ちた空つぽの長箱を積み上げ、散乱したロングソードやバスタードソードを片づけていると、ふと長剣を携えたあの紅い眼をした女性の事を思い出した。

関わりたいとは思われないが知らずにいると、自分でも気がつかないまま地雷を踏んでしまう可能性もある。

丁度良い機会かも知れないと思いきってスクードに聞いてみる事にした。

「あの、師匠。少し聞いてもいいですか？」

「何だ？」

「……銀髪で白い軽装を身につけた、長い剣を持つ紅い眼をした女性の事を知ってますか？」

そこで明らかに空気が変わる。

もしかしてやばい事を聞いたのだろうか？

「……会ったのか」

「いや、この前酒場で見かけて、少し気になったので」

「そうか。ならば今後一切関わらない事だ。余計な事に巻き込まれたく無ければな」
「……えつと危険、なんですか？」

スクードは手に持った剣をすべて元々あつた位置に戻すと、珍しく言葉を選ぶように話し始める。

「……そうだな、例えばギルドの裏側を覗き見ようとする事と同じようなものか」

「ギルドの裏側？」

「それぞれのギルドには掟がある事は知っているな」

「もちろん」

それぞれのギルドには守るべき掟が存在する。

例えばここ戦士ギルドの掟は『一つ、汝の肉体とありとあらゆる物を武器とし汝の敵と戦え。二つ、我先に敵に背を向けて逃げだし名を汚すことなかれ』という二つがある。

「掟を破った場合どうなるかも知っているな」

「……はい」

掟を破った者はギルドから追放され二度とそのギルドに入会する事は出来ずさらにギルドによつては追つ手をかけられ、命を狙われる事すらある。

「では、最悪、破った者を始末せざる得ない場合など誰がそれをやると思う？」

「え？」

「同じギルドに所属し、共に戦ってきた仲間を追い詰める役を誰がやるか知っているかと聞いているんだ」

「……いえ。でも掟を破っても、命まで狙われるのは暗黒騎士くらいですよね？」

「本当にそう思うか？ ギルドに所属する者は皆が手を取り合つて、仲良く敵対種族と戦うと本気で思っているのか？」

「それは……」

このグリムガルに来て何日も経っていないから、正直そんな事を聞かれても答えようがない。

だが何の揉め事も無く戦っているというのは何故か想像できなかつた。

「とにかくそんな役目は普通誰もやりたがらないという事だ」

誰もやりたがらない役目。

しかし掟がある以上、もしもの場合誰かがやる必要がある。

そこでユキトの脳裏に嫌な想像が浮かんだ。

「まさか……それを専門に請け負う人が居るとか……」

「さあ、あくまでも噂だよ。でもそれが裏側を見ようとするという事だ。本当だとしてもそんな事ギルド側もやってる本人も知られたくないだろう。脛に傷を持つ者なら当然だ。そしてそれでも知ろうとする奴にはそれ相応の結末が待っている」

スクードはユキトに背中を向けると部屋の出口に向けて歩き出した。

「あの女に関する事はそれと同じだ。もう一度言うが、余計な事に首を突っ込むな。明日には仲間の下へ戻るのだろうか？ お前は早く仲間と共に一人前の義勇兵になる事だけ考えていればいい」

結局、そのままスクードは部屋から出ていきそれ以上話す事が出来なかった。

そして後は特におかしなことは無く、師匠から餞別として鎖帷子とシヨートソードを二本貰い、ギルドで過した日々は終わりを告げたのだ。

◇

「という訳だよ。本当は相談したかったんだけど、皆もうそれぞれギルドに入ってたし。ごめん、僕が独断で決めちゃって」

ギルドの裏側という部分はぼかし、ランタの件だけを告げた。

正直、何故それを話さなかったのかは分からない。

もしかすると実感が薄いのかも知れない。

「いや、むしろ良く戦士ギルドに入ってくれたよ」

「うん、正直、助かったよ、ユキト」

マナトもハルヒロも心底ホッとしたように肩を叩いてくれた。

個人的にはもう一人くらい戦士が居てくれた方が助かる。

しかしそれは贅沢というもの。

師匠に言われた通り、僕が皆を守らないといけないのだから頑張らないといけないのだ。
だ。

「じゃ、とりあえず行こうか」

マナトの声に合わせ、皆がオルタナの門から外へと向かう。

義勇兵見習い一日目。ユキト達はようやくやく一步を踏み出そうとしていた。

第三話 初陣

オルタナの北門。

その内側から外を覗き込むと広がっているのは原野や生い茂る森。吹き抜ける風や広がる緑を見ていと穏やかな気分になってくる。

「風が気持ちええなあ」

「うん、落ちつく」

シホルとユメの会話で和みつつ、ユキトは北門の方を見上げると大きな山の姿が見えた。

あれは天竜山脈と呼ばれる大山脈だ。

見た事はないが天竜山脈がある南側には牧場や畑、村落といったものが存在しているらしい。

機会があれば、いずれそちらの方にも足を運ぶ事になるかもしれない。

「さて皆、準備はいいか？」

満場一致でリーダーとなったマナトが全員を見渡した。

ユキトは腰に差した二本のショートソードの柄を軽く握りしめ、マナトに頷き返した。

「よし、じゃあ行こう」

マナトの掛け声に合わせて、全員が北門から一步を踏み出す。

だが決意を胸に門を潜ったユキト達はすぐに足を止めてしまった。

何故なら北門を潜ったすぐ先に見覚えのある人物が座り込んでいたからだ。

「モグゾー？」

間違いない、モグゾーだ。

モグゾーはユキトと同じく手には皮手袋、体に鎖帷子、大きなバスタードソードを背負って一人暗い表情で草むらに座り込んでいた。

確か彼も戦士ギルドに所属し、クズオカのパーティに加わっていた筈。

「あれえ、モグゾー君や。確かクズヤマに連れてかれてしまったんや無かったけなあ」

「クズオカだよ、ユメ。モグゾー、こんな所でどうしたの？」

「あ、ユキト君」

「一人なの？」

歩み寄ったユキトにモグゾーが暗い表情のまま頷いた。

何か事情があるのだろうか？

詳しく話を聞こうとすると横から割り込んできたランタが指を鳴らした。

いや、音は鳴らなかったので、指を鳴らそうとしたが正しい。

「分かった、お前クズオカに捨てられたんだろ？ 使えないからいらねーわって言われたりして」

「ランター！」

ハルヒロが咎めるように声を上げるがランタは涼しい顔。

ある意味流石である。

勿論、悪い意味で。

「ハア、ランタは無視して何があったの、モグゾー？」

「……お金、とられちゃった。いろいろ教えてやったから全部よこせて」

「はっ」

「……ひどく」

シホルが悲しそうに呟く。

同感だ。

訓練所では自分の訓練で精一杯だった為にモグゾーがどうしているかまで気が回らなかった。

いや、気にかけていたとしても師匠の地獄の訓練の所為で殆ど動けなかったので結局は同じ事だったかもしれないが。

しかしモグゾーには悪いけど、これは僕達にとつては渡りに船である。

正直な話、戦士がユキトだけでは不安があつた。

もちろん全力で頑張るつもりではあるが、盾役は多い方が良い。

隣に立つマナトやハルヒロも同じ考えなのか、こちらを見て頷いてくる。

モグゾーを引き入れるという事だ。

「モグゾー、もしも行く場所が無いなら、僕達のパーティに入らないか？」

「え、でも戦士はユキト君がいるんだし」

「正直、僕だけじゃ不安なんだ。盾役も多い方がいいし。ね、マナト」

「うん、モグゾー君さえ良かったら、パーティに入ってくれないかな？」

「僕が入ってもいいの？」

「頼むよ」

暗い表情が緩み、頷くモグゾー。

何だかんだと不安だったんだと思う。

まあ、お金も無いいきなり放り出されたら、モグゾーでなくとも不安になるだろう。

そこで話を傍で聞いていたランタが何だか嫌な笑みを浮かべモグゾーの首に腕をま

わすと「死ぬ気で俺の盾になって守れよ」とか言い出した。

あれはランタなりの歓迎なのか。

ハルヒロは咎めるようにランタを諫めている。

だけど本質的には言っている事は間違っていない。

前線で盾役を務める戦士は最も危険な立場、それこそ命懸けなのだから。

「ぼ、僕頑張るよ。でも……お金がない」

「必要な分は俺が貸すよ」

「うん、僕も」

「言つとくが俺は絶対貸さないからな。金は借りても、返さねえし貸さねえ主義だ！」

「ホント、最低だよな、お前つてさ」

若干引き気味のハルヒロとランタの口論を聞きながら、ユメとシホルの方を見ると二

人とも頷いてくれた。

「私はいいと思う」

「ユメもいいよ」

「ありがとう、二人とも。皆、モグゾー君も加えてここに居る7人で頑張ろう！」

マナトの声に座っていたモグゾーが立ち上がると、皆が正面を向く。

視線の先では生い茂る森が待っていた。

この先にはモンスターなどの危険も持ち構えている。全員が警戒しながら、ゆっくりと森の中へと足を踏み入れていった。

◇

入った森の中は思ったよりも明るい。

正直、もっと暗くジメジメしたイメージを持っていた。

それは勝手な想像だったようで、視界も開けている。

「えつとな、鹿とか、狐とかもやけど、春やから熊とかもたまあーに出るって」

狩人であるユメの説明を聞きながら、モグゾーと二人先頭に立ってゆっくり歩く。

熊が出るとは。

ちよつと緊張してくる。

「あと穴鼠っていうてな、猫くらいのおおきくて凶暴な奴もおるって」

「ふくん。ユメは見た事あるの？」

「お師匠と出た基本実習の時にはちらちら見かけたけどなあ」

どこか可愛さを感じる仕草できよろきよると周囲を見渡すユメ。

しかし穴鼠どころか動物一匹見当たらない。

凶暴な生き物なら遭遇しないに越した事はない訳で。

いや、獲物を狩りにきているんだから、この考え方はおかしいのか。

でも最初の内は危険な事はできるだけ避けるべき。

腕を組み、悩むユキトを尻目にマナトが先にある水辺の方を手に持ったショートスタツフを前に突き出す。

「オルタナの近くにも、泥ゴブリンとかグールとかいるらしいから、最初の内はそいつらを狙おう。水場の辺りを探してみようか」

「そうだね」

ゴブリンとグール、どこかで聞いた事のある名前だ。

でもそれが何なのか全く思い出せない。

何となく人型の生き物を思い浮かべているとモグゾーの足が止まった。

「モグゾー?」

「い、いた」

ユキトは息を飲み、木の陰に身を隠しながらモグゾーの指差した先を見た。

そこには今まで見た事のない生き物が四つん這いになって水を飲んでる。

子供くらいの小さな背丈に痩せた体躯。

泥をかぶったように汚れシワシワの肌。

あれが泥ゴブリンに違いない。

いつの間にか隣に来ていたユメに目配せすると、頷いて何か手を動かしてきた。

多分、何かのサインなんだろうけど全く分からない。

とりあえずユメには曖昧な笑みで誤魔化しておき、音をたてないように深呼吸しながら他のメンバーに眼を向ける。

マナトやハルヒロ、シホル、モグゾー、ランタ、全員が同じように木の陰から機会をうかがっているのが分かる。

そういえばこういう時の為の合図とか決めてなかった。

凄く間抜けだ。

いや、そんな事も気づかなかつたくらい緊張していたって事だろう。

その時、ハルヒロが手を上げた。

多分、合図。

ユキトはショートソードの柄を握る。

緊張のせいか掌が汗で濡れていた。

「……………どれだけ緊張してるんだよ」

汗を拭き取り、改めて柄を握り、何時でも飛び出せるように構えを取った。

そしてハルヒロの腕が振り下ろされる。

すると我先にと飛び出した奴がいた。

「うおらああああ!!」

ランタだ。

叫びながら泥ゴブリンに向かって斬りかかっている。

ユキトは思わず頭を抱えなくなった。

せっかく泥ゴブリンはこっちに気がついて無かったのに、叫んだら奇襲の意味がない。

案の定、泥ゴブリンはランタに気がつき逃げようとしていた。

「えいー！」

隣に居たユメが弓を射る。

だが狙いが甘いのか泥ゴブリンの足元に突き刺さった。

それでも泥ゴブリンにとっては驚異だったのか、明らかに動きを鈍らせる。

「ユメ、ナイス！」

飛び出したハルヒコ。

それに続くようにユキトもまた飛び出した

抜くのはあくまでも一刀のみ。

二刀なんて使いこなせないからだ。

師匠に教えてもらおうかとも思ったけど「お前、金あるのか？」と聞かれ、断念した。

ショートソードを構えて前を見るとハルヒコ達が苦戦している姿が見えた。

苦戦というよりは、どこかハルヒロ達が戸惑っているようにも見える。一体どうしたんだろうか？

「ハルヒロ、ランター！」

ユキトは泥ゴブリンに剣を袈裟懸けに振り抜く。

意外にも機敏に動いているようだけど、師匠の動きに比べれば明らかに遅い。

ユキトの振るった剣がゴブリンを捉え、肩に食い込むと肉を抉る感触が手に伝わってきた。

「ッ!？」

気持ち悪い。

伝わってくるその感触に一瞬動きを止めようとしてしまう。

でも此処で躊躇ってはいけない。

「くっ」

意を決し手に力を込めて剣を振り抜く。

斬撃が斜めに傷を作り、泥ゴブリンの血が飛び散る共に肉を裂いた。

「ブギヤアア!!」

悲鳴のような声と共に泥ゴブリンが後ずさる。

しかしユキトは追撃する事が出来なかつた。

自分でも思った以上に、何かを斬るという行為に戸惑ってしまったからだ。

今までもずっと師匠か動かない案山子相手にしか剣を向けてこなかった。

生きているものを斬るというのは、こんなに気持ち悪い事なのか。

しかしそんな戸惑った間にも泥ゴブリンはどうか逃げようとこちらの隙を窺っている。

「モグゾー、正面！ 皆も泥ゴブリンを逃がさないように囲むんだ！」

マナトの指示に従い、全員が泥ゴブリンを取り囲んだ。

これで泥ゴブリンも逃げられない。

今度こそ仕留めるとショートソードの柄を強く握る。

だがその瞬間、泥ゴブリンが思いもよらない声を上げた。

「アアアアアアアアアアアア!!!」

死ぬものか。

逆にお前達を殺してやると。

泥ゴブリンの叫びに全員が怯んでしまった。

それでもとユキトは自身を奮い立たせる。

こんな所で躊躇っていたら、この先もつと危険な奴が出て来た時、皆を守る事などできはしない。

ユキトと同じ事を考えていたのか、マナトが皆を奮い立たせるべく声を出した。

「皆、これは命のやり取りなんだ！ 俺達も泥ゴブリンも真剣なんだ！ 簡単な訳ない、誰だって死にたくないだろ!!」

その言葉を皮切りにユキトは真っ先に飛び出した。

ショートソードの切っ先で喉を狙う。

しかし泥ゴブリンが動いた事で額に当たり、大きく傷を作った。

「俺もー」

素早く懐に入ったハルヒロのダガーが泥ゴブリンの胸を斬る。

「ぬもおお!!」

モグゾーのバスタードソードの一撃が脳天に直撃する。

ユキトの一撃とはまるで違う凄まじい威力だ。

頭が半分近く潰れてしまった。

そして――

「止めは俺だアア!! 憎悪斬!!」

ランタのロングソードが喉に突き刺さり、血を撒き散らした。

しかしそれでも生きているのか、突き刺さった剣を除けようと必死にもがいている。

思わず顔を背けたくなるような光景。

「……ひう」

「死にたないんやなあ」

シホルは泣きそうになりながら後ずさり、ユメは「なむなむ」と手を合わせている。

その内、泥ゴブリンの動きは止まり、手足が弛緩したように地面にずり落ちた。

おそらく死んだのだ。

「うはははは！ やった、見てくださいましたか、スカルヘル様!!」

ランタが馬鹿笑いしながら、倒した泥ゴブリンに押し掛かり、爪を剥がし始めた。

曰く暗黒騎士が新たなスキルなどを取得するには悪徳と呼ばれるものを積む必要があるとの事。

あるとの事。

その為には暗黒騎士の手で命を奪い、その肉体の一部をギルドにある祭壇にささげる

事が必須。

悪趣味だと思うが、それがギルドのルールであるならば仕方ない。

何であれ、ユキトは暗黒騎士にはなれないみたいだが。

「とりあえず何とかなつたよな?」

「うん。初勝利、皆のお陰だ」

皆が弛緩し、勝利の余韻を味わう。

だが、その瞬間、茂みがガサガサと音を立て何か飛び出してきた。

「えっ?」

飛び出した泥ゴブリンがユメに向かって突撃する。

咄嗟に割って入ったユキトはショートソードを盾に泥ゴブリンの爪を受け止めた。

「どうやらもう一匹潜んでいたらしい。」

「ぐっ!?!」

「ユキ君!?!」

「ユキト!?!」

勢いよく出て来ただけあって、結構な重さが剣越しに伝わってくる。

「このオオ!!」

柄を両手で握り力任せに押し返そうとするが向こうも必死らしく、中々上手くないかな
い。

援護しようにも組み合っている所為か、皆も手が出しにくい。

つまりここは自分の力だけで切り抜けるしかないという事だ。

しかしそこで思いもよらぬ援護を受けた。

「マリク・エム・パルク!」

横から飛んできた光弾。

シホルのマジックミサイルという魔法だ。

杖の先から発射された光弾が泥ゴブリンの側頭部に直撃する。その衝撃で相手の力が明らかに緩んだ。

「今だー！」

泥ゴブリンを弾き飛ばし、突きを放つ。

今度こそ狙いは喉だ。

体勢を崩していた泥ゴブリンは避ける事も出来ず、ショートソードの切っ先が喉に突き刺さった。

しかし刺さり甘いのか即死には至らない。

泥ゴブリンは刃を掴みどけようともがいている。

そこでユキトは咄嗟に左手でもう片方のショートソードを抜くと、思いつき泥ゴブリンの右腕目掛けて振り上げた。

「これでー！」

「ギイイー！」

泥ゴブリンの右腕が斬り裂かれ、宙を舞う。

さらに喉に突き刺していたショートソードを抜くと泥ゴブリンの頭部に叩きつける。

さらにもう一撃。

左のショートソードを横薙ぎに払い泥ゴブリンの喉をもう一度大きく抉った。

「ユキ君、伏せて！」

声に従い、その場に伏せると飛んできた矢が泥ゴブリンに突き刺さる。

ユメは狩人なのに弓矢は苦手だと言っていたのに、どうやって当てたんだろう？

不思議に思いながら顔を上げると、すぐ傍でユメが弓を構えていた。

「どうやらユキトのすぐ後ろに控えていたらしく、至近距離だったからこそ当たったらしい。」

「まだ動いてる！」

泥ゴブリンは逃げようとしているのは、言うようにして動いていた。

「……息の根を止めてやらないと、苦しいだけだ」

マナトの振り下ろしたショートスタツフの一撃が泥ゴブリンの頭部に直撃。

嫌な鈍い音と共に泥ゴブリン動きが止まった。

「おいマナト！ 止めは俺が刺すつての！ じゃないと悪徳がたまらないつて言っただろうが!!」

「あ、ごめん、つい」

マナトは目をつぶって六芒を示す仕草をするとランタの方に謝っている。

ハルヒロやモグゾー、シホルにも怪我は無いようで、全員無事だったようだ。

ユキトは伏せたまま、安堵の息を吐き出すと目の前にユメが手が差し伸べてきた。

「ありがとうな、ユキ君！」

ユメは見惚れるほど満面の笑みを浮かべていた。

どうやら怪我は無かったみたいだし、頑張つてよかった。

「怪我がないならよかった。シホル、援護の魔法ありがとう」

「ううん、無事で良かった」

ユメの手を取り立ち上がると、マナトが笑みを浮かべた。

「全員無事、そして泥ゴブリンを2体倒した。今度こそ初勝利だ！」

「しゃあああ!!」

「うん！」

「で、できた！」

「やったなあ！」

「……良かったあ」

「はは」

ハルヒロやマナトとハイタッチしながら、喜びに浸る。

どうにか役目を果たさせたようだ。

ユキトは改めて安堵しながらも両手に持った二本の剣を見つめる。

今日の戦闘で改めて分かった。

ユキトにはモグゾーのような力は無い。

泥ゴブリンの突進を止めようとしただけで、厳しかった。

普通の盾役に徹しようとしていたら、駄目だ。

強力な力を持った敵が現れた時点で容易く潰されてしまう。

ならばユキトなりの戦い方を見つけなければならぬ。

反面収穫もあった。

今日の二刀を使つた戦い方は力で劣る僕にとつての武器になるかもしれない。

真剣に考えてみようかと決めて、剣を鞘へと収めた。

◇

それはまさに地獄と呼ぶに相応しい光景だった。

広がる原野の地面には血を流したモンスター達が無数に倒れ伏している。

そのモンスターはオークと呼ばれる、現在人間達と戦争を繰り広げている仇敵だった。

倒れ伏すオーク達は頭部を斬り飛ばされた者。

胴体を真つ二つに裂かれた者。

中には明らかに身につけている装備が違う手錬れらしき者すら無残に斬り殺されていた。

その地獄ともいえる場所に一人中心に立っている人物がいた。腰まである銀髪に白い軽装を纏った女性。

手に握る長剣はシンプルながらも綺麗な装飾が施され、すらりと伸びる刀身は見るからに目を引くほど美しい。

間違いなく名剣の類。

明らかに場違いな場所に立つ女性を生き残りであるオークが襲いかかる。

「オオオオ!!」

仲間達の仇でも討とうとしているのか、叫びを上げ手に持った斧を思いっきり振り下ろした。

戦斧は凄まじい暴風を生む。

並みの者では受けきれない程の威力を持った一撃だ。

しかし――

それは容易く阻まれる。

女性が掲げた剣によつて斧は空中で止められていた。

見るものが見れば驚愕するのは間違いない。

何故なら女性は明らかに細身であり、オークの一撃を受けられるとはとても思えないからだ。

しかし対峙していたオークに驚きは全くなかった。
それは当然。

この場の地獄を作った張本人は目の前にいる細身の女性なのだから。

「オオオオオオオ!!」

オークは再び斧を振り上げ叩きつけた。

戦斧の猛威は嵐となつて女性に襲いかかる。

すでにオークにとっては死地。

この女を倒さねば、生き延びる事はできないのだ。

しかしそれでも彼女には一切傷がつけられない。

すべて手に持った剣によつて軽く捌いている。

「……もういいだろう。お前では無理だ」

女性から発せられた戦場に似つかわしくない透き通る声がオークの耳に届く。

「いい加減に——死ね」

女性が軽く振るつた一撃は振り下ろされた戦斧諸共片腕を叩き切る。

まるで閃光のように線が走つたようにしか見えなかった。

反応も出来ない一撃にオークはただ後ずさるしかない。

だが逃げられる筈もなく次の一撃でオークの首は体から斬り飛ばされ、首から噴水の

ように血があふれ出た。

「……雑魚しかいなかったか」

女性は剣を振り、血を払うと近づいてきた人物に目を向けた。

「珍しいな、お前が私の下に来るとは」

「好きで来た訳じゃない」

女性の前に現れたのは仮面を付けた人物スクードであった。

「相変わらずその格好か。暗黒騎士の導師みたいだな」

「連中と一緒にしないでもらいたい。私がこんな格好をしているのは、できるだけ目立たず姿を晒さないようにしたいだけだ」

「その格好の方が目立つと思うが。まあいい、オーク共が建設しようとしていた秘密拠点は駆逐しておいたぞ」

「見ればわかる」

スクードは周りに転がるオークの死体を一瞥すると、改めて女性に向き直る。

「報酬はいつも通りらしいから、受け取っておけ。ああ、それからリバーサイド鉄骨要塞への侵攻計画が立ち上がっている。もしも正式に計画が動き出せばお前にも何か役目が振られる事になる、しばらくは動くなよ」

「分かった、分かった」

女性は剣を鞘に納めスクードを置いて歩き出すと微かに聞こえる程度に歌を口ずさむ。

それは無残な惨状と成り果てたこの場所でレクイエムのように静かに流れ続けていた。

第四話 生活

日々、糧を得て毎日を生きたという事は酷く大変な事である。それはここゴブリムガルに来てから毎日痛感している事だった。

「ランタ、そつちに行つた！」

「わあつてるつーの!!」

逃げたゴブリンの先に回り込み剣を叩きつけるランタ。

しかしゴブリンは上手く剣を避けるとその背後へ体を潜り込ませた。

「このやろ——うわあ!?!」

ランタの顔の真横をユメの放つた矢が通り抜ける。

「また外れた!」

「ユメ、お前え、ぐえ!!」

今度はシホルの杖から発せられたマジックミサイルがランタの後頭部に直撃する。

「シホル、どこ見てんだ!!」

シホルは眼を閉じていた。

あれではまともにも当たる訳はない。

「ユキト、ハルヒロ、頼む！」

わめくランタを無視し控えていたユキトとハルヒロが木の陰から飛び出すとゴブリンの前に立ちふさがった。

もちろん矢面に立つのは戦士であるユキトだ。

ショートソードを抜き、ゴ布林目掛けて斬り込む。

狙うは首だ。

「ハー！」

ゴブリンの剣を横に体を逸らして避け、振り抜いた一閃。

狙い通り刃がゴブリンの首を捉え一撃を与える。

だがゴ布林は死なず、血を流しながらも生きていた。

それは想定済み。

注意を引きつけられれば十分なのだから。

ユキトの一撃に後ずさるゴブリンの背後から忍び寄ったハルヒロのダガーが急所に刺さり、僅かに痙攣して倒れ込んだ。

「よし、後一匹！」

「久しぶりの獲物、逃がすかよ！」

ユキト達は今日も今日とてゴ布林狙いで狩りに赴いている。

基本的には単独のゴ布林（多くて二体）を狙い、囲んで仕留めるといった戦法を用いていた。

これは僕たちの経験や実力不足をマナトが考慮し考えた安全策である。

まあ、今の僕たちの実力からして当然の判断だった。

今までと違う点があるとすれば場所だ。

最初の狩場である森から移動し、廃墟と化した街に移動していた。

ダムローと呼ばれたこの街はかつてアラバキア王国第二の都市として栄えていたらしい。

それこそ今住んでいるオルタナよりもだ。

しかし不死の王と呼ばれる者が各種族をまとめ作り上げた諸王連合と呼ばれる勢力によつて滅ぼされてしまった。

紆余曲折あり諸王連合は不死の帝国と名を変え辺境に席卷していた。

だが、不死の帝国皇帝だった不死の王が何故か崩御。

その後、分裂した不死の帝国の隙を突きアラバキア王国がオルタナを建築。

今なお他種族と戦争を続けているというのが現在における人間達の状況である。

このダムローも今はゴブリン達の勢力下にあるらしく、森よりは狩場として良いのはというマナトの提案に乗り、場所を変えたという訳だ。

「おらあー！」

追い詰めたもう一匹のゴブリンにランタがロングソードを突き出すと、刃が胸に突き刺さる。

突き刺さった箇所から血が流れ「グエ」というゴブリンの苦しげな声にランタの動きが一瞬止まった。

「くそー！」

戦闘終了後の悪趣味なアレを見る限り全くそんな風には見えない。

だが意外とランタも命を絶つ事にどこか躊躇いがあるらしい。

ユキトはフォローするつもりで側面に回り込みショートソードを振るう。

動きを止めたランタに伸ばそうとしていた手が切られ、怯んだところに構えていたモグゾーの一太刀が見舞われる。

「フモオ!!」

突風を巻き起こし、叩きつけられた一撃はユキトやランタと比べても明らかに重い。

その証拠に上段から振り下ろされたバスタードソードがゴブリンの頭を押しつぶし、血が飛び散った。

ゴブリンは頭をつぶされ成す術なく崩れ落ちる。

ユキトは剣を納めながらひしやげたゴブリンを見た。

「……やつぱり地力が違うな」

モグゾーは動きこそ鈍いがその攻撃力はパーテイの中でも抜きん出ている。

あの巨体から繰り出される斬撃と比類するものを今のパーテイメンバーから出せるものはいない。

正直、羨ましいほどだ。

ユキトではどんな風に鍛えてもモグゾーのようにできるまで、何年掛かるかわからない。

「いや、いや。落ち込んでもしょうがないでしょ」

自分はモグゾーではないし、多分才能にもそれほど恵まれていない。

というか無い。

ならば無いものねだりをしてもし方がないし、何も変わらない以上できることをするだけ。

目下の目標は二刀をキツチリ使いこなせるようになる事。

といっても使いこなすどころか、基礎すら満足に知らない訳で。

今、できることは二刀を使って素振りする事。

そしてスキルを覚えてもらう為にお金を貯める事くらいだ。

「おいユメ！ お前俺に当てようとしただろ！ シホルも魔法撃つとき目を閉じんじゃねえ!!」

「ご、ごめんなさい」

「何で当たらんのかなあ」

「下手くそだからだろ、このちっばい!」

「ちっばいって言うな!」

ユメとランタがいつものように喧嘩を始めてしまった。

見るからに不毛な言い争いだけど、何かこれを聞いているといつも通りだなあと気が抜けてしまう。

もしかしてかなり毒されてるのだろうか？

それにしてもこの二人はよくも毎回毎回喧嘩ができるなあと思わず感心してしまう。喧嘩するほど仲が良いという奴なのだろうか。

どこで聞いたかは忘れたけどそんな言葉があつた気がする。

「この貧乳、貧乳!」

「貧乳って言わんといて! まだちっばいの方がまだかわいいんやから!」

「ハッ! この貧乳、貧乳、貧乳がアア!」

「むっかああああ!!」

それをいえばシホルにもたまに、いや何時もセクハラしてるし。

そのシホルも結構黒いこと言ってるから、単純に仲が良いという訳ではないのかも。

ユキトがそんな馬鹿な事を考えている隙にハルヒロがゴブリンが身につけていた首飾りや他の荷物をはぎ取った。

あれでも最低一シルバーにはなる筈だ。

「はいはい、そこまで。二人とも怪我見せて」

マナトが怪我をしたメンバーに癒しの魔法である「キユア」を唱え、傷を治していく。

「ユキトも」

「いや、僕は大丈夫だから」

「駄目だよ。万が一って事もあるからね」

「……うん。分かった」

マナトはやや心配性というか、完璧主義的な所があると思う。

それも皆を心配しての事だし文句はない。

しかしそれが何故か少しだけ気になった。

「でも久しぶりに収穫があつたね」

「ホント、最近は酷かつたもんなあ」

ハルヒロの言う通り、ここ最近の成果は酷いものだった。

最初に森で泥ゴブリンを仕留める事ができたのは運が良かっただけ。

それ以降は収穫無しなんてのも決して珍しくない状態だ。

ダムローでも狩りを始めたばかりで不安もあったが、眠っていたゴブリンを発見しなるとか仕留める事ができた。

この調子でいけば、今日の収穫は期待できるかもしれない。

「よし、この調子で街の様子を確認しながら、慎重に行こう」

「おう」

「うん」

「わかった」

いつも通りモグゾーと共にパーティの前に出る。

ダムローは廃墟というだけあって、崩れた壁やら天井やらで死角が非常に多い。

思わぬ方向からの襲撃に対応できるように神経を使いながら、破壊された街の中を散策していった。



あの後ダムローの銜を色々と散策したが、ゴブリンを一体仕留める事ができただけで他に大した成果は上がらなかった。

今日の稼ぎは一シルバーと五十カパー。

全く稼ぎがない時もあつたので、マシではあるのだがそれでもやっぱり多くはない。ここグリムガルの貨幣はゴールド、シルバー、カパーの三種類ある。

一ゴールドで百シルバー。

一シルバーで百カパーの価値がある。

一日過ぎすのに必要最低限のお金は十カパーくらい。

日々暮らすだけに必要最低限のお金は十カパーくらい。自分たちは義勇兵見習い。身に着ける防具や使用する武器の研ぎ。

さらには着ている服や下着に至るまでキッチリしなくてはならない。

まあ下着や服は多少ボロでも切迫した問題にはならないが（身だしなみや衛生面で問題があるといえはあるが）、武器や防具は別だ。

武器はきちんと手入れしなくては使い物にならなくなるし、防具も綻びがあればそこが致命傷になりかねない。

つまりきちんとしようとするればそれだけお金がかかるといふ訳だ。

「ハア、高いよな」

「そうだね」

ハルヒロと一緒に武器屋を覗いてみても、とても手が出ない。

中古でさえいい物を手に入れようとすれば五十シルバーくらいは軽く必要だった。

団章の二十シルバーすら払えてないのにこんなもの買える訳がない。

「でもあの剣はいいなあ」

奥に飾られている剣はシンプルでありながらもキツチリとした作りであり、長さも丁度よいくらいだ。

あれが二本あれば———そう思つて値段を見るとあまりの値段に気絶しそうになった。

「二十ゴールド!? 買える訳ないよ、あんなの……」

「高え、防具はどうする?」

「僕は今のところはいいかな。ハルヒロは?」

「俺もいいかな」

盗賊であるハルヒロはもちろんだが、ユキトも戦士の割には軽装である。

これは単純に防御力よりも動きやすさを重要視した結果だ。

重い防具で身を固めても、動けなくなつては意味がない。

結局、ハルヒロと二人何も買わないまま店を後にする。

鍛冶屋で剣やダガーの研いでもらい、残ったお金はヨロズ預かり商會に預ける事に決めた。

「中々お金貯まらないよな」

「結構節約してるけどね」

泊まる場所も他の宿に比べて安くて古い義勇兵宿舎を使っている。

食費や買い物も最低限度必要なもの以外は控えているにも関わらず中々お金が貯まらない。

こんな調子で団章を買うまでどのくらいかかるのだろう。

先行き不安だ。

そんな感じで足取り重く、義勇兵宿舎まで歩いていけると前にマナトとシホルが歩いているのが見えた。

「やっぱりシホルってさ」

「うん、見たまんまでしょ」

こうして見ていると良く分かるが、シホルはマナトに気があるみたいだ。

明らかに他のメンバーとは態度が違う。

「邪魔するのも悪いし、ついでに他の店でも見ていく？ 服とか下着とか」

「そうだな」

人の恋路の邪魔をするつもりはない。

ま、ランタがいたら構わず突っ込んで行ったのかもしれないけど、ユキトやハルヒロはそこまで空気が読めないつもりはない。

シホルへ内心声援を送りながら、ハルヒロと一緒に市場の方へ足を向けた。

◇

泊まる場所にしてもそうだが、常にお金が必要な事といえば食事である。

この点、義勇兵見習いであるユキト達の選択肢は基本的に二つ。

自分達で作るか、もしくは格安の屋台でそれぞれで済ますかだ。

どちらかといえば自炊の方が安く上がる為、交代で食事を作ることも多い。

「えっと、こんな感じでいいかな」

指示通りに作ったスープに塩を加えてかき混ぜ、味見の為に小皿にスープを少量入れてモグゾーに手渡す。

それを口に含んだモグゾーは嬉しそうに笑みを浮かべて頷いた。

「うん、良い感じだよ。ユキト君、次はこっちを切ってくれる？」

「分かった」

この調理場で意外な活躍をしているのがモグゾーだ。

モグゾーの料理は他の人が作るよりもずっと美味しい。

本人も性に合っているみたいで結構楽しそうだ。

ユキトはあまり上手くないのだが、料理を作る事自体は楽しかった。

「料理は難しいね」

「ユキト君は器用だし、すぐに上手くなるよ」

「だと良いけど」

モグゾーの作っていた野菜炒めとユキトの作った質素なスープが出来上がると全員を呼んで食事の時間だ。

「味はどうかかな？ 野菜炒めは僕でスープはユキト君が作ったんだ」

「おいしい」

「両方おいしいよ。モグゾーくんもユキくんも料理うまいなあ」

シホルとユメの感想に安堵しながら、スープを口に含んだ。

少し味が薄い気がするけど、あまり塩が使えないから仕方がない。

こう見えて調味料の値段も馬鹿にできないくらい値が張る。

だから塩なども節約しなくてはならないのだ。

「うん、美味しいよユキト」

「もつと味濃くてもいいけどな」

「文句言うなよ、ランチ。塩だって高いんだから」

「文句は言っていないっての。好みの話だ、好みの！」

どうやらマナト達にもそれなりに満足してもらえたようだ。

皆でワイワイ言いながら食事を終えたユキトは人のいない広場のような場所で最近始めた日課を行っていた。

ここはオルタナを散策していた時に見つけた場所だ。

家が立つ住居区や店のある市場からも離れており、高台のようになっている。

昼間は多少人もいるようだが、夜になれば人は全くいない。

見晴らしもいいし邪魔も入らないユキトのお気に入りの場所である。

「ハア!!」

すっかり手に馴染んだショートソードをギルドで習った通りに振るう。

軌跡を描いた剣と共に空気が切る音が辺りに響く。

そしてもう一刀。

左手で抜いた剣を同じように振るうと今度は上手くできず些か軌道がぶれてしまった。

「ハア、ハア、やっぱり左手で振ると上手くいかないな」

ユキトは元々右利き。

最近では意識して左も使うようにしているが、やはり使い慣れていない手で剣を振る

うのは難しいものがある。

この前、泥ゴブリンの腕を落とせたのは殆ど偶然みたいなものだ。

「やっぱりそう簡単にはいかないか。訓練しかないね」

せめて左でも同じように剣を振るえるようになれば、戦い方に幅もできる。

「ま、最初に比べれば大分慣れてきたし、後はお金かな」

武器や防具もそうだが、新しいスキルを覚えるにはギルドでお金を払い、教えてもらわなければならぬ。

今は変な癖をつけないように素振りだけに止めているけど、できれば早めに二刀の使い方を覚えたい。

基礎さえ身につければ、後は自分なりに訓練することもできる。

「あんまりやりすぎると明日に影響が出るし、そろそろ戻ろう」

ショートソードを腰に戻し、あくびを堪えながらできるだけ人の居る場所を意識して歩く。

人通りのないところを歩いて変な奴に絡まれても面倒だからだ。

そう思っただけ警戒していても、やっぱり怖いものは怖いわけ。

内心ビクビクしながら歩いていると、知っている人物が前から歩いてきた。

全身を覆うローブを纏い、仮面を付け顔を隠した人物。

ユキトの師匠であるスクードだった。

「師匠？」

「ん？ ユキトか。何をやっているんだ、こんな場所まで？」

「えっと、眠れなかったので散歩を少し。師匠はどうしたんですか？」

正直に訓練していたと答えても良かったが、勝手な事をするなど怒られそうだったので適当に誤魔化す事にした。

もうボコボコにされたくない。

「ああ、近くの酒場で人と待ち合わせをしていてな。できれば会いたくないが……緊急だから仕方ないとはいえ何でまたあの女に逢わねばならないのか」

すべて聞き取る事はできないが、珍しくぶつぶつと文句を言っているようだ。機嫌も悪い様だし、あまり深入りしない方がいいかもしれない。

「あの師匠？」

「ああ、いや何でも無い。とにかくお前もフラフラしてないで早く戻れ。厄介事に巻き込まれないうちにな」

「はい。では失礼します」

怒られなかった事に安堵しながら、ユキトは一礼してその場を離れようと歩き出すとスクードの方から呼びとめられた。

「ユキト」

「はい？」

「……いや、狩りに出る時は十分に気をつけておけ。何が起こるか分からないのが戦いだ」

「え、あ、はい」

迷った末にそれだけ言うのと今度こそスクードは足早に闇へと消えていった。

一体何が言いたかったのか？

首をかしげながらユキトは今度こそ義勇兵宿舎へ戻る為に歩き出した。

「もうみんな寝てるかな」

宿舎に戻るとタオルを持って風呂場に向かう。

とりあえず体も動かしたし、汗を流しておきたい。

でもユメとシホルの二人は男性陣とは少し時間をずらしているようなので、もしかすると鉢合わせする可能性もある。

覗きの烙印を押されるなど御免なのでその辺はキッチンと確認するつもりだ。

「あれ、何やってるんだ？」

風呂に向かおうとしたユキトの前にマナト、ハルヒロ、ランタ、モグゾーの4人が庭に勢ぞろいしていた。

しかもモグゾーが壁に手を突き、ランタが感激したように肩を叩いている。とてつもなく嫌な予感がする。

けど、放っておくのも不味いような気がしたので、意を決して声を掛ける事にした。

「皆、何やってんの？」

「うおおおおつて、何だユキトかよ！ 脅かすな!!」

声をかけた事でランタだけでなく全員が驚いたようにユキトの方へ振り向く。

「……何やってるの？」

いや、何となく察してるし、あんまり聞きたくないけど。

だが、その時、壁の向こうからモンスターも逃げ出すであろう、怒気の籠った声が聞

こえてきた。

「なんでランタの声がするん!？」

「う、やべ。俺じゃねえよ！ ユキトだ、ユキト!!」

「ハア!？」

声の主はユメだ。

怒気の籠った声、ユメがいる場所、そしてランタ達の不可解な行動。

これだけで皆が何をしようとしていたのか分かる。

所謂覗きという奴だ。

ああ、やっぱり無視しとけばよかった。

見ればマナトやハルヒロはさっさと逃げ出していた。

というか早過ぎる!?

巻き添えになるつもりはないとユキトもさっさと逃げ出した。

「何で僕が!」

「こうなったら一蓮托生って奴だろ!」

「ランタ、君って奴は!!」

「ふもー!」

後ろでモグゾーの転んだ音と同時に「きもい! すけべ!! 変態!! もう永遠に帰っ

てくるなあああ!!」というユメの叫びが聞こえてくる。

「……僕は無実だ」

聞こえる訳はないと分かっているながら、ポツリと呟くと先に逃げたマナト達に追い付く為、走り続けた。

だが同じ宿舎に住んでいる訳だし逃げられる筈も無い。

結局、開き直ったランタを除く全員がユメとシホルに誠心誠意平謝りする事になってしまった。

「なんで僕まで」

だが、まあ何だかんだいいながらもユキトはこの生活を気に入っていたのだろう。お金がなく貧乏で、日々生きていくだけで精一杯で。

それでも大切だと思える仲間達がいた。

いつも通りにランタがくだらない事を言つて。

シホルが泣きそうになるとユメと喧嘩になつて。

ハルヒロが突つ込んで。

モグゾーが困つた顔して。

マナトが皆を落ちつかせて。

この六人と一緒にこれからもやつていくんだと、疑つてすらいなかつた。

楽しかつたのだ。

だから——これが簡単に崩れさるものだなんて、考えもしなかつた。



何かが付着する。

それは赤くそして生温かい。

これは何なのか頭が理解する前に、目の前に転がったものを見る。

赤く染まった体と抉られた傷跡。

自然と息が上がり、体に震えが走る。

そしてゆっくりと顔を上げ、これを生みだした元凶に視線を向けた。

そこにいたのは絶望。

今の自分達では決して勝てない相手。

人間よりも大柄で、鼻が潰れ、耳がとがり、大きな口と牙が見える。

人間達にとっての仇敵であり、天敵。

三体のオークが殺意を漲らせてそこに佇んでいた。

第五話 悲劇

運命の日と言つても過言ではないこの日。

ユキト達は変わらぬダムローの街に通つていた。

通い始めてすでに十日以上が経っている。

これだけ通えばダムローの構造は殆ど把握しているし、ゴブリン相手にも苦にならぬ程度に戦闘にも慣れ始めていた。

「皆、ゴブリン3匹」

「おっしや！ 新しいスキルを見せてやるぜ！」

「二人で突つ走るなよ、ランタ」

「お前はいつも一言余計なんだよ。ハルヒロ!!」

ロングソードを抜き、新たに覚えたスキル「憤慨突」を放つ。

これは名の通り敵の間合いの外から踏み込んで突きを放つ技らしい。

だが、ランタは間合いの見極めが甘く、ゴブリンに余裕で回避されてしまう。

「なあああ、避けてんじゃねえ!!」

案の定、今回も思いつきり外していた。

「いや、普通に避けるだろ」

だが、それを見越していたのかハルヒロがゴブリンの後へと回り込む。

そして背面突きをよどみない動きで叩き込む。

背中にダガーが深々と突き刺さると、ゴブリンは痙攣して倒れた。

「止めだああ!!」

容赦のないランタの追撃がゴブリンの喉元に突き刺さり僅かに痙攣した後、動かなくなつた。

「よっしやアアア!! 悪徳ゲエエツト!!」

倒したゴブリンの体から一部をはぎ取り高々と空に向けて持ち上げる、ランタ。

何度見ても悪趣味。

やっぱり暗黒騎士は合わないとつくづく思う。

だが、今注目すべきはランタでは無くハルヒロだ。

素早く敵の背後に回り込み、一撃を持って仕留める。

まだ甘さがあったのか確実に倒す事は出来なかつた。

だが、もっと経験を積み、技が練れば確実に敵を仕留める事ができるようになる筈

だ。

正直、ランタやモグゾーよりもハルヒロの方が凄い。

素早く敵に忍び寄る動き。

的確に状況を把握する視野の広さ。

十分に優れた資質を持っていると思う。

だがハルヒロに言っても信じないだろう。

彼は自己評価が低く、どこか卑屈さすら感じさせる時があるからだ。

「そんな事ないのにな。……僕も負けてられない」

ユキトも腰から両手でショートソードを抜き、ゴブリンに斬りかかる。

「ツー！」

振り下ろされた敵の一撃を右の剣で弾き、無防備になったゴブリンの腹を左の剣で斬り裂いた。

腹を斬られ敵の動きが鈍る。

追撃の手を緩めず返す刀でゴブリンを袈裟懸けに叩き斬った。

斜めに裂かれ出血するゴブリンは二歩、三歩と後ろに後ずさりしていき。

「今だ、モグゾー！」

「どうもー!!」

そこを見逃さず踏み込んだモグゾーのスキル『憤怒の一撃』が炸裂した。

このスキルは戦士にとっての基礎中の基礎、ユキトですら使える技だ。

なんでか技を出す時モグゾーは「どうもー」という掛け声を出す事から仲間達は「どうも斬」と呼んでいた。

モグゾーの「どうも斬」の威力はユキトのものとは桁違いの威力がある。

あの巨体から繰り出される一撃をゴブリンが防ぐ事はできない。

振りぬかれたバスタードソードの刃は斜めにゴブリンの胸まで深く食い込み、致命傷を与えた。

「よっしやアア!! もう一つ悪徳ゲットオオオ!!」

ランタは嬉々として倒れ込んで動けないゴブリンに猛然と襲い掛かる。

その姿に女性陣は二人は白い目を向けている。

明らかに好感度がダダ下がりである。

「暗黒騎士は野蛮やなあ」

「こらあ、そこ！ 野蛮じゃねーよ！ 高尚に残虐と言えー！」

「……何も変わらないし」

「シホル、聞こえてるからな！」

新しいスキルを使う他のメンバーも負けてはおらず、苦も無く残りのゴブリンを倒すことができた。

「お疲れ、皆。怪我した人はいない？」

「楽勝！ 新しいスキルのおかげだな！」

「思いつきり外してただろ、お前」

「いちいちうるさいんだよ、ハルヒロ！」

いつも通りの会話を聞きながらユキトは頬を緩める。

今回、パーティーメンバーそれぞれがギルドで新しいスキルを習得してきた。

その中でユキトは少し悩んだが、二刀の基礎を教えてもらった。

これは同じく戦士のモグゾーが居る事が関係している。

二人で同じスキルを学び、単純にパーティの突破力を上げるという選択もできた。

だが話し合いの結果、それぞれの特性を生かし別のスキルを習得する事で戦術の幅を広げようという事になった。

それはモグゾーとは別の方面で戦う術を身につけたかったユキトにとっても願ったりだった。

「ハア、思った以上に実戦で二本の剣を振るうのは大変だな。でも大分上手く振れるようになった」

どうやら毎晩の素振りも無駄では無かったらしい。

まだぎこちなさはあるが、剣を振り初めた頃よりはずいぶんマシに見える。

確かな手応えを感じるが、油断は禁物。

ゴ布林自体決して馬鹿な連中ではない。

彼らは知恵を持ち、不利な戦いはせず、集団で行動することを好む。

数を頼りに攻撃を仕掛けてきたら厄介だ。

それでも今までの戦いの中、武器を使う者はいても、技を使ってくる奴はいなかった。

油断さえしなければ、ゴブリンの攻撃は捌くことができる。

剣についた血を振り払い、鞘に納めるとマナトが神妙な顔つきで周りを見ている事に

気が付いた。

「マナト、どうしたの？」

「うん。少しゴ布林達の様子がおかしい気がしてね」

「そういえば……」

確かに少し気になってはいた。

これまで遭遇したゴ布林達はどこか余裕が感じられず、隙あらば逃げようとしていた。

まるで何かに怯えているかのように。

「……どうする？ 今日はまだ引き上げたほうが……」

「何言ってるんだ、これからだろうが」

話を聞いていたのか全員が注目する中、マナトは少しだけ迷ったように周りを見渡すと、首を横に振った。

「いや、ランタの言う通りもう少しだけやろう。皆の調子もいいみたいだし」

「そこなくっちゃな！」

「でも無茶は駄目だ。危ないと判断したら、退くよ」

「わかってるっての！」

誰も他に反対意見を言わなかったので、そのまま探索続行する事になった。

「でも気になるんだよな」

殆ど根拠もない勘のようなものだが、少し気になった。

それから何かがあった訳でもなく、狩り自体に変化はない。

今まで通りに少数のゴブリンを狙い仕留めにいく。

しかし成果は上がらず。

何故ならゴブリン自体が見つからないか、発見してもすぐに逃げられてしまうからだ。
だ。

「たく、全然居ねえじゃねえかよ」

「もしかして暗黒騎士の呪いだったりしてなあ」

「……そうかも」

「何言ってるんだ、お前ら!! 本当に呪うぞ、ゾディアックン呼ぶぞ、コラア!!」
暗黒騎士は自分に憑りついた悪霊を呼び出し、使役する事が出来る。

悪徳を積み重ねることで暗黒騎士自身のスキルだけでなく悪霊もパワーアップする。

詳細は知らないが、ランタに憑りついている悪霊、それがゾディアックンである。
ちなみにゾディアックンとはランタが自分の悪霊に名付けた愛称だ。

うん、微妙、というか愛称のが長いつてどうなのよ、ランタ。

「昼間だから呼べないじゃん」

この悪霊という奴が使えるのか使えないのか非常に微妙だ。

曰く気が向いたら敵が近くにいと教えてくれるのだ、敵の耳元で何かを囁いて妨害してくれるのだ、そんなものばかり。

しかも昼間は呼び出せないというおまけ付き。

夜にはオルタナに帰ってるからあまり意味がない。

「バアカ! 悪徳が十一超えたから日暮れ時とか、朝日が昇る前とかなら召喚できる
よくなったんだよ!」

「夕方とは日の出前とか、普通にオルタナに戻ってるだろ。やっぱり微妙だよな、悪

「靈」

「でもゾディアックくんは飼い主のランタと違ってちよびつとかわいいからなあ」

「飼い主じゃねえつの！」

一度見せてもらったけどアレはかわいいなんてもんじゃないような気がする。

いつも通りの馬鹿話をしている内に昼時になり、楽しい昼食の時間になった。

各々がバックから干し肉やパンを取り出し、食事の準備を始める。

食事時になるとユメは食材を少しだけ削って地面に置き、「白神のエルリヒちゃん、いつつもありがとう」と言って手を合わせる。

これはユメが食事をする時に行っているもので、狩人のギルドの掟で毎回行うように決められているらしい。

「それってさ、狩人ギルドの掟でやるように決められてるんだよね？」

「そうやなあ。白神のエルリヒはすごい大きい狼だな。それで大きな黒髪のライギルっていうこれも大きな狼がおってエルリヒちゃんとはものすごい仲が悪いねん。狩人はエルリヒちゃんが守ってくれてるから、狩りとか毎日つつがなくてできるんやっ
て」

良く分からないけど、つまりは信仰しているという事か。

つまり神官にとってのルミアリス。

暗黒騎士にとつてのスカルヘルみたいなものだろう。

「えつと、大丈夫なの？　ちゃん付けとか」

「怒られた事ないしなあ。でも心配してくれてありがとうな、ユキくん」

「え、いや、ははは」

別に何となく気になつただけで、心配した訳ではない。

何か凄く悪いことをした気分になつてきた。

それから楽しい昼食時間が続く。

ランタの悪態に珍しくシホルがムキになつて怒つたり。

ユメとの言い合い、ハルヒロが突つ込む。

そんな掛け合いを聞きながら皆で楽しく話しているとポツリとマナトが呟いた。

「……いいパーティになつたな」

「え？」

「ゴブリン三匹程度なら簡単に捌けるようになったし、皆、怪我もしないようになった。ユメは弓よりも剣鉈が得意だよね。力も意外にあるし、勇気もあるからいざつて時はユメが助けてくれるかもって思ってる」

「えつと、まあ怖いとかはあんま思わんかも。弓が下手くそなのは、勘弁して欲しいなあ」

ユメの持つている劍鉈を見る。

劍鉈はハルヒ口のダガーよりは長く、ユキトのショートソードよりは短い。

さっきの戦いでもユメはあの劍鉈を使い、上手くゴブリンに手傷を与えていた。

彼女はもしかすると弓よりもそっちに才能があるのかもしれない。

「モグゾーは頼りになる。決めるときは決めるし、劍の扱い方も上手い。それにランタも凄いい、特に常に攻めていく姿勢とかさ。失敗も恐れなからスキルとか誰よりも早く使えるようになるよ」

「そ、そうかな」

「ま、まーな」

「シホル——シホルは周りが良く見えているよね。新しく覚えた影魔法は標的を足止めしたりする魔法が多いって聞いた事がある。いざという時、仲間の助けになりたいと思つて覚えたんでしょ」

シホルは恥ずかしそうに俯きながらもコクリと頷いた。

魔法は炎熱、氷結、電磁、影の四系統存在している。

今回シホルが覚えたのは影魔法という奴だ。

流石、マナトはよく見てる。

それに最初に声を掛けた時につつかえたとところを見ると、マナトはシホ

ルの気持ちにも気づいてるみたいだ。

「ハルヒロは何だかんだで冷静だし、視野も広い。もしかすると俺よりもリーダーに向いてるかも」

「え、俺が？ 冗談だろ、マナト」

「俺は本気だよ。そしてユキトはモグゾーとは違う強みがあるよね。どんな状況にも対応できるオールラウンダーっていうか。二刀の使い方が今より上手くなればきつと凄い剣士になると思う」

「僕のはただの器用貧乏みないな感じだと思うけどね」

でもそんな風に思っていたなんて知らなかった。

やっぱりマナトは全員をよく見てる。

「そういうマナトも凄いよ。指揮も的確で、回復から盾役までこなせる。オールラウンダーはマナトじゃない？」

「そうだな。やっぱりマナトがリーダーだよな」

「うん。マ、マナトくんは凄いよ!!」

顔を赤くしながら必死に訴えるシホルにやや苦笑しながらもマナトは笑顔を浮かべた。

「ありがとう。でも俺の力なんて大したことないさ。皆が、仲間がいるから、こうして

頑張れてるだけだよ」

何というかやっぱり美形がそういう事言うのは反則だと思ふ。

いつも以上に格好良く見える。

シホルなんて顔を真っ赤にしてるし。

「さて、食事も終わつたし、そろそろ行くかうか」

食事を終え、全員が準備を整えたと再び探索を開始する。

事前で作成した街の地図（手作り）を頼りに警戒しながら歩いていると、ハルヒロが手を上げて立ち止まるように合図した。

「……いる」

一人偵察する為にハルヒロが先に進む。

此処にいる誰より素早く、慎重に歩を進めていく姿は流石盗賊だ。

「いた。二匹いるけどアレはやばいって。一匹はすげえでかい。俺達くらいあるかも」

ハルヒロが慌てたように戻ってくると、口早に状況を説明する。

「ホブゴブリンだ。ゴブリンの亜種で普通のより体格がいい。でも頭は良くないから奴隷みたいに使われてるって聞いた事がある」

「へえ、奴隷連れてるって事は、連れてるそいつは結構身分高いんじゃないか？ きつとい

いもん持つてるよな」

「確かに普通の奴より、いい鎧付けてた。ホブの方も鎖帷子とか兜も持つてた」

「おー」

モグゾーがどこか羨ましそうに唸る。

前に出る戦士は敵とぶつかる事が多く、防具は非常に重要なものだ。

良い物は値が張るし、中古でさえ今の稼ぎでは厳しいものがある。

もしもホブゴブリンが使っているものが手に入れば、モグゾーはさらに戦いやすくなる。

「どうする?」

「二匹やしなあ」

「……私が最初に魔法を当てれば後、たぶん、楽になるんじゃないかと」

マナトはしばらく考え込んだ後、全員の顔を見渡し頷くと「やろう」と声を掛けた。

作戦は単純、ハルヒロ、ユメ、シホルが先行し距離を取って攻撃。

敵が気が付いたと同時に残りのメンバーが前に出る。

モグゾーがホブゴブ、鎧ゴブをユキトが引き受け、魔法で援護するシホルを除いた全員で側面から攻撃を加えていくという作戦だ。

作戦が決まったところで全員が円陣を組んで、手を重ねるとマナトの掛け声と共に手

を跳ね上げる。

「フアイト！」

「いっぱーっ!!」

前から思ってたけど、これなんなんだろうか？

なんか懐かしい気もするけど。

ハルヒロがユメとシホルを連れてゴブリンたちのいる場所へ移動する。

その後を武器を構えたユキトたちがついていく。

「オーム・レル・エクト・ヴェル・ダージュー！」

シホルの杖からエレメンタル文字を描くと影のエレメンタルが射出され、同時にユメが矢を放つ。

魔法使いはこのエレメンタルを操り、呪文とエレメンタル文字を描く事で魔法を使うことができる。

ユメの矢が鎧ゴブの頭上を通過し、気を取られた処にシホルの魔法が直撃する。

「ゴブ!？」

鎧ゴブ達はこちらに気が付いたように武器を持って、向かってくる。

「出るぞー！」

「モグゾー！」

「うん！」

最初に僕とモグゾーが飛び出すと、事前の打ち合わせ通りにそれぞれの敵へ走っていく。

ユキトの狙いは鎧ゴブ。

しかし鎧ゴブはこちらを無視し、別の場所へ矢を放った。

「ぐっ」

「ハルヒロ!？」

振り返るとハルヒロの肩に深々と矢が刺さっている。

シホルやユメを庇ったのか。

しかし僕も仲間の方を気にしている余裕はなかった。

鎧ゴブが剣に持ち替え、すぐさま斬りかかってきたからだ。

「くっ」

二刀を交差させ、鎧ゴブの一撃を受け止めると腕にしびれと共に剣の重さと衝撃が伝わってくる。

ハルヒロに気を取られ、捌く暇もなく真正面から受け止めてしまった。

怪我はマナトが治療してくれる筈。

なのに敵から注意を反らしてしまった。

ユキトの持ち味はあくまでも手数。

モグゾーのような打ち合いはできないというのに。

「なんて迂闊なんだ、僕は！」

自分の迂闊さに苛立ちながら、刃を押し込んでくる鎧ゴブに負けられないようにこちらも目一杯力を込めた。

鏑迫り合い。

金属同士の擦れる嫌な音が耳に届く。

そんな膠着状態を崩したのは、我らが暗黒騎士だった。

「オラアア!!」

ロングソードで鎧ゴブに斬りかかるが、鎧の部分で防がれてしまう。

「ランター！」

仕切り直した。

集中しながら二刀を強く握り、鎧ゴブに向かって突撃する。

狙うは手に持っている剣。

鎧ゴブの鎧が固い事はランタの攻撃を見て分かっている。

モグゾーのように力で叩き潰すことができない以上、鎧の隙間でも狙えればいいんだろう。

しかしユキトには相手の剣を避けながら狙う技術も度胸もない。でも武器を弾き飛ばせば、仕留める余地はいくらでも生まれる。

「ランタ、下がって!!」

「おう」

怪我をしたランタを下がらせ突っ込んできた僕に剣を向ける鎧ゴブ。

その剣に右のショートソードを思いつき叩きつける。

キイインという甲高い音と共に剣を弾く。

予想通りに剣を弾いた瞬間、懐ががら空きになった。

そこを目がけて左の一撃を叩き込む。

「グイイー!」

「……やっぱり固い」

腹の部分に傷がつくが致命傷には至らない。

それでも隙は作れた。

続けて剣を振るおうと前に出ようとしたその時、予期せぬ一矢がこちらに向けて放たれた。

「なっ!?!」

咄嗟に無理やり体を捻り、無我夢中で地面を転がるようにして伏せる。

飛んできた矢が今までユキトが居た場所を射抜いた。
危なかった。

位置からして頭を射抜かれていてもおかしくなかった。

「どこから？」

見れば壁の陰から弓を構えている鎧ゴブの姿が見えた。

隠れていた？

いや、違う。

鎧ゴブは何かの荷物のような物を抱えていた。

さらに後方から別のゴブリンの姿が見える。

「運が無いにも程があるー」

僕は思わず毒づいてしまった。

あのゴ布林達の格好から見てこの場に現れたのは偶然に過ぎないのだろう。

つまり獲物を見定めて奇襲を仕掛けたつもりが、いつのまにか遭遇戦という奴になっていたのだ。

追撃してきた鎧ゴブの剣から地面を転がって逃れながらモグゾーの方を見るとあちらも苦戦していた。

モグゾー渾身の「どうも斬」ですらホブゴブには通用せずただ揺らぐだけで致命打に

はなっていない。

それどころか棍棒で滅多撃ちにされている。

ハルヒロが援護につくが、焼け石に水だ。

マナトの方は怪我をしたユメやランタの治療で手がふさがっている。

こちららも鎧ゴブからの攻撃から逃れるだけで精一杯。

これで他のゴブリン達が増援に来れば、手がつけれなくなる。

「限界だよね、これは」

マナトもそう思ったのだろう。治療を終えると同時に全員に向けて声を上げた。

「みんな、逃げろ！ 逃げるんだ！」

ホブゴブに組みついていたハルヒロを助ける為にマナトがショートスタッフで強打を放つ。

頭を何度か殴打され怯んだ隙に立ち上がったハルヒロと共に転進する。

それを見た僕も転がりながら振りかぶられた鎧ゴブの剣を力任せに弾き、腹を蹴り飛ばした。

「ユキト!？」

「大丈夫！」

すぐ様立ち上がると、飛んでくる矢に気を付けながら先に走るマナト達の背中を追

う。

走りながら背後を振り返ると鎧ゴブが転びながらも何かを投げようとしている姿が見えた。

狙われているのは無防備なマナトの背中。

「させない!」

咄嗟に射線上に割って入ると鎧ゴブが投げたナイフのような物を剣で受け止めた。

「ぐっ!」

しかし完全に勢いを止める事は出来ず、弾かれたナイフはユキトの肩を掠めて飛んで行った。

「ユキト!」

「振り返るな!!」

痛みもあり、血も出ているがこんな物は怪我の内には入らない。

そう思い込む。

後はただひたすらに敵から逃げるようにして仲間の後を追っていく。

危険な場所から少しでも遠くに行こうと走り続け、ダムローの入り口付近まで戻ってくる事が出来た。

この辺りならばゴブリンもそう出てこない筈だ。

「ハア、ハア、ハア」

全員が息を切らし、膝をついて倒れ込んだ。

「ちくしょう、何だよあいつら！ それに次から次に駆けつけてくるとか反則だろうが!!」

ランタが悔しそうに地面を殴った。

気持ちは分かる。

新しいスキルを覚え戦闘でも苦戦しなくなり、マナトから長所を上げてもらった所為か、皆がやる気になっていた。

にも関わらずいきなり冷水を頭からぶっかけられたような気分だった。

要するにこの場にいた全員が調子に乗っていたのだ。

それでも運が良かったのかもしれない。

今の戦いは一歩間違えば確実に誰か死人が出ていた筈だ。

「痛ッ!?!」

ナイフが掠めた肩がジンジンと痛む。

思ったよりは深い傷だったのかもしれない。

「ユキト、今治すから」

マナトが『キュア』を使おうとするが、手から光が発せられる事はない。

「……ごめん、魔法使えないみたいだ。少し休めば使えるようになると思う」
おそらく戦闘で魔法を使い過ぎたのだ。

でもこれくらいなら我慢できなくはない。

「いいよ、これくらいは我慢できる」

「使えるようになったらすぐに治すから。皆、今日は——」

そのマナトの言葉は続かなかった。

聞こえたのは風切り音。

そして何かが激突したような鈍い音。

飛び散った生温かい血が僕の顔に付着する。

一体、何が起こった？

ゆっくりと横を見る。

地面に転がったマナト。

突き刺さる戦斧。

そこでようやく理解する。

——横から飛んできた大きな斧がマナトの肩に直撃したのだと。

大量に出血し赤く染まった体と大きく抉られた傷跡。

これはもう素人目で見ても、もう——
自然と息が上がり、体に震えが走る。

そしてゆっくりと顔を上げ、これを生みだした元凶に視線を向けた。
そこにいたのは絶望。

今のユキト達では決して勝てない相手。

人間よりも大柄で、鼻が潰れ、耳がとがり、大きな口と牙が見える。
人間達にとつての仇敵であり、天敵。

三体のオークが殺意を漲らせてそこに佇んでいた。

左右に付くオークは盛り上がる筋肉と屈強な腕に戦斧を持ち、そして巨大な鉈のような武器を腰に掛けている。

この二体だけでも明らかな強敵。

今の自分達には微塵も勝ち目はないだろう。

しかしさらなる絶望として存在しているのが、一番奥に佇むオークだった。

肌は他と違い緑ではなく、浅黒い。

体も他と比べてスマートで顔に傷を持ち、手に持つ柄の両端から伸びる長い黒刃が不

気味に光っている。

未熟なユキト達ですら分かる。

アレは化け物だ。

戦つて方に一つの勝ち目もない。

挑めばあつさり一蹴されてしまふだろう。

全員が呆然と立ち竦むだけで現状を理解できていない。

そんなユキト達を正気に戻したのは、相手から聞こえてきた声だった。

「……ゼインクスダナ。タタカウカチモナイ。アイツラモ、ソコニコロガツテルゴ
ミトオナジヨウニシテヤレ」

黒いオークは口元を歪める。

それは明らかに侮蔑が籠つた笑いだった。

オークが人語を話した事も驚いたが、そんな事よりもアイツの態度と告げた内容に頭
が沸騰しかける。

アイツは笑つたのか？

それにゴミだと？

マナトの事を言つたのか？

倒れ伏す仲間を侮辱された事で冷静さを失いかけるが、後ろに居たハルヒロの声で正

気に戻った。

「皆、逃げる！ モグゾー、マナトを担いで！」

「う、うん」

そうだ。

悔しいけど今はとても敵わない。

逃げるしかないのだ。

しかしそれをさせまいと一体のオークが大鉈を構えて突撃してくる。

ユキトは逃げる仲間達を追わせまいとオークの前に立った。

「ユキト!?!」

「逃げて、早く!!」

「くそ！」

突進してくるオークはまさに暴風そのもの。

受け流すつもりだったが、無理だ。

あんなもの今の僕には受け流せない。

受ければ死ぬ。

振りかぶられた大鉈を横つ跳びで逃れるがオークの攻撃はそれだけでは終わらな

かった。

「左足を軸にして右足で蹴りを放ってきたのだ。

当然、避ける事などできない。

咄嗟に剣を盾にする。

しかし次の瞬間凄まじい衝撃と共にユキトは吹き飛ばされてしまった。

「ぐああああ!!」

受身を取る暇もなく崩れかけた壁に激突し、激しい痛みが全身に襲いかかる。

「グハッ！ ゲホ、ゲホ、ハア、ハア」

苦しくて息ができない。

凄まじい痛みを堪えようと思わず蹲ってしまう。

剣で受けたからこの程度で済んだ。

もしも直撃だったら、即死していてもおかしくない。

近づいてくる足音に、今にも意識を失いそうになりながら顔を上げる。

掠れる目を開くといつの間にかオーク達が近くに來ていた。

「……クズメ。サキニシンダゴミノヨウニシネ」

まただ。

またアイツの侮蔑した声が聞こえる。

見上げれば再び口元を歪めていた。

ちくしょう。

悔しい。

悔しさのあまり涙が出る。

反論したくても、声がでない。

訂正させたくても、力がでない。

このまま僕は死ぬのか。

何もできないまま、仲間を侮辱されたまま、無力なまま。

振りかぶられる大鉈。

せめてもの意地。

死ぬまで目を逸らさない。

刃が振り下ろされそうになったその時、この場には似つかわしくない綺麗な声が聞こ

えてきた。

「その辺にしておいたらどうだ？　弱いものいじめなどつまらんだろう」

「え？」

未だに引かない痛みとは別に何故か悪寒が走った。

いつからそこにいたのか長剣を携えた軽装の女性が立っている。
忘れる筈は無い。

あの時、感じた恐怖の事を。

長い銀色の髪と不気味なほどに輝く紅い瞳を持った死神がそこにいた。

第六話 送火

その人物は明らかに場違いだった。

オークによって死の際に立ちながら、ユキトは声を掛けてきた銀髪の女性を見る。名剣と思われる長剣を腰に差し、戦場に立つにしてはあまりに軽装。

いや、軽装というか鎧の類は一切身につけていない。

白い服と装飾品の類だけが目立っている。

「な、何で……」

忘れはしない。

ここグリムガルに辿りついた時に見た彼女を姿を。

あの時の怖気と恐怖は心の奥に刻みつけられている。

異種族との戦いでもさほど恐怖を覚えなかったのは、彼女から覚えた感覚があったからかもしれない。

あの時は理解できなかった怖気の正体。

化け物と相對した今なら少しだけ分かる気がする。

アレはおそらく彼女から発せられる死の気配を無意識に感じ取ったものだ。その恐怖に比べれば異種族との戦いなど大したものではない。

出来ればもう会いたくない類の女性だったのだが、こんなところに現れるとは。

「ナンダオマエハ？」

「答える必要はない。『標的』を追っていたら、こんなところで大物に出くわしたな」
劍を鞘から抜き放つと見惚れるほど綺麗な刀身が外部に晒され、彼女は構えを取る。自然体にも見えるその姿には一切の隙も無い。

それを見たオークも只者ではないと感じたのか自分の獲物を手に取った。

柄の両端から伸びる黒刃。

ツインブレードとでもいえば良いのか。

オークもまたその武器を目の前で一回転させ、構えを取った。

「くぐぐ」

女性の長い銀髪がふわりと舞う。

彼女が前に踏み出ると一気に距離を詰め、黒いオークに向けて白刃を振り下ろした。その光景に痛みで気絶しそうになりながら、驚愕してしまった。

目測でおおよそ五十メートル以上。

それを一足飛びに距離を詰めるなんて。

「ハア！」

距離を詰めた女性の一太刀。

凄まじいまでの速度が乗った一撃は黒いオークを両断しようとする。

その剣速は尋常ではない程に速い。

正直、掠れた目では消えたようにしか見えない。

あの一撃は並みの者なら、防御する間もなく切り捨てられてしまう。

まさに怪物——

しかし相手もまた化け物だった。

「フーン！」

オークは黒い刀身を持つツインブレードを振り回し女性の剣を器用に受け流すと、そのまま斬り返したのである。

怪力から繰り出された上段からの一撃。

その斬撃を女性が剣を掲げて受け止める。

甲高い金属音が鳴り響き、巻き起こった衝撃波がユキトに襲いかかった。

「ぐう」

痛みに耐えつつ、視線を上げる。

二人の剣舞は終わる事なく続いていた。

オークが繰り出した上段からの一撃を弾き、見事な体捌きで下から斬り上げられた刃を回避した女性は横薙ぎに剣を払う。

しかしオークはブレードを背後で回転させ、正面に持つてくると火花を散らしながら剣撃を受け止めた。

一合、二合と凄まじい速度と威力を持って斬り合う二匹の怪物。

次元が違う。

あの黒いオークはまだ理解できる。

体全体から湧き出る修羅場を潜り抜けて来たからこそ発せられる威圧感。

そして常人では使いこなす事も難しいであろう武器の異様さ。

奴は初めて見た瞬間から化け物であるという事は分かっていた。

しかしそんな化け物相手に一步も引く事無く、互角に斬り合うあの女性はそれ以上の

怪物に間違いない。

一体あの細身のどこからあれだけの力と速度を生み出せるのか？

「流石に賞金首は違うようだな、『傷持ち』。久々に手応えのある相手だ」

「キサマ……ソウカ、ソノアカイメハ、シユクフクサレシモノ、イヤ、ノロワレシモノカ」

「お前こそ、その肌の色、異端だろう」

「キサマニカンケイナイコトダ!!」

オークはクルリとツインブレードを頭上で回転させ、柄の両端から伸びる刃を使い女性に対して猛攻を仕掛ける。

上下、左右。

縦横無尽の刃の嵐が細身の女性を切り裂かんと淀みなく叩きつけられた。

しかし女性は長い髪を靡かせながら、舞うようにして刃を避けると即座に反撃に移る。

二人の戦いは実に対照的だ。

岩をも砕くような強烈な一撃を放つ豪快な戦いぶり。

オークの剣はまさに剛剣だ。

あれを受け止められる者が何人いるか。

さらには特殊な武装を操る器用さすらも持っている。

あんな特殊な武器、下手をすれば自分を傷つけてしまいそうなものだ。

もしかすると奴が通常のオークに比べ細身なのはあの武器を操る為かもしれない。

対する銀髪の女性は舞うような動きで敵を翻弄しながら、凄まじい速度と技術を持って振るう柔剣。

一見、軽そうに見えるその一太刀も受ければ確実に致命傷となる重さと威力を持つているのだから、相対する敵からすれば厄介極まりないだろう。

「オオオ!!」

オークの口から発せられる怒声と共に振り下ろされる剛剣。

異常ともいえる速度で振り上げられる女性の柔剣。

黒刃と白刃が激突する度に火花が散り、轟音が響き渡る。

お互いに上段から振り下ろされた一撃が交錯、はじけ合うように距離を取るとオークは持っていた黒刃を下げた。

「どういふつもりだ?」

女性が訝しげに問う。

オークとは戦いを好む血の多い種族である。

それがこんな中途半端な形で矛を取めるなど、通常では考えられない。

「ココマデダ。コレイジヨウカツテハデキナイ」

黒いオークは手を上げ、他のオークを下がらせると改めて女性に向き直る。

「オレノナハ『ヴァラス』、ツギコソオマエハオレガコロス。ノロワレシモノ」

「逃がすとても」

踏み込もうとした女性だったがその前にヴァラスは大きく後ろへ跳躍する。

それに合わせて先に下がったオーク達が周りに生えている木々を切り倒し、追撃出来ぬように道を塞いだ。

「……………追うこともできなくはないが、しばらく派手に動くなと釘を刺されているからな」

女性は剣を振り、鞘に納めると僕の方へ近づいてくる。

「……………義勇兵、いや見習いか。おい、生きてるなら返事をしろ」

「う、うう」

返事をしたくとも、声が出ない上にそろそろ限界だ。

意識が徐々に遠のいていくのが分かる。

「……………い……………面倒……………仕方な……………」

こちらに伸びてくる手と視界を覆う銀色の髪。

その光景を最後に僕の意識は暗闇の中へ消えていった。

◇

ゆつくりと意識が覚醒し、目が覚めると見覚えのない天井が見えた。

「ハハハ……」

体を起こそうとすると、ベットの上で寝かされていた事に気がついた。混乱しながらも記憶を探ろうとすると、唐突にすべてが思い起こされた。

血まみれで地に伏すマナト。

圧倒的な力を持った敵。

救ってくれた銀髪の死神。

「ここはどこだ!? 皆は、マナトは無事なのか!？」

怪我は治療されたのかベットから飛び起きると酷い倦怠感に襲われる。

これはおそらく血が足りない為だろう。

回復魔法は傷の治癒は出来るが、失われた血までは戻らない。

「傷が塞がってる?」

傷が癒されているという事は、神官か誰かが治療してくれたのか？

ふらつきながらも、傍に置いてあつた装備を掴み、ドアの方へ近づくとガチャリと音を立て扉が開いた。

「目が覚めたのかね」

入ってきたのは一見すると巖のような印象を受ける大男。

戦士と言われても不思議はない体格をしている。

しかし着ている服から察すると神官に違いない。

「あの、貴方は？ それにここはどこですか？ 何で僕はここに？」

「落ちつきなさい。私の名はホーネン。ここはルミアリス神殿だ。君は……神殿の外側で倒れていた。怪我をしていたので、こちらで治療をさせてもらったよ」

「……そうですか、ありがとうございます。あの治療費とかは……」

「それは後だ。それよりこちらに来なさい」

「急いでるんです！ 仲間が——待ってますから」

「その仲間の下へ行こうと言っているのだ」

「え？」

ホーネンは暗い表情のまま歩き出すとユキトもその後についていく。

仲間の下へ行くとは一体どういう事なのか？

最初は理解できなかつたが徐々に落ちついてくるとようやく状況が呑み込めてきた。多分あの女性が僕をここまで運んでくれた。

そして仲間たちも重傷のマナトを助けようとルミアリス神殿まで連れて来たに違いない。

マナトを除きパーティの中で治療が行える者は誰もいないのだから、当然の判断だ。神殿の奥へと進んでいくと見慣れた仲間達の背中が見えてきた。

「皆、無事で——」

駆け寄ろうとした僕の足はそこで止まる。

全員が涙を流しているのが見えたからだ。

泣いていた。

シホルは床にへたり込み、他の皆も例外なく涙を流している。

あのランタささえもだ。

すすり泣く声が部屋全体に静かに響く。

一体何があつたのか？

いや、察している。

分かつている。

けど、認めたくなかつた。

隣に立つホーネンは暗い表情のまま顔を背けていた。

僕は躊躇いながらも、重く、鉛のようにとっても重くなつた足で一步踏み出す。

そこで——見えた。

見えてしまった。

白い顔でベットに横たわる、仲間の姿が。

「……マナト」

ゆっくりと近づき、マナトの様子を見た。

服が肩から大きく破れ、生々しい傷跡が残っている。

オークの戦斧が直撃した痕だ。

「……間に合わなかったんだ。ここに辿りつく前にマナトはもう……」

ハルヒ口の淡々とした声が部屋に響く。

ああ、何だよこれは——

現実感がない。

でも、これは夢ではない。

マナトはもう、死んでしまったのだ。

それを認めた瞬間、僕の両目から涙が零れた。

「彼の目も覚めた事だ。もういいだろう。このまま丁重に葬る事にする。不死の王の

呪いにより、適切に埋葬されぬ者は彼の王の従者と成果てる。五日、早くて三日でゾンビとなった例もあるのだからな」

「それは……マナトを燃やすって事ですよね？」

ハルヒロの問いにホーネンは頷いた。

「然様、オルタナの外に焼場がある。そこで亡骸を炎で浄化し、丘の上の墓場に葬る」

「それも当然、お金が必要なんですよね？」

「持ち合わせがないなら、わしが払うが？」

そんな事は必要ない。

それがこの場にいる仲間全員の総意だった。

マナトは、僕達の大切な仲間だ。

だから、別れも自分達で。

それが今僕達がマナトに出来る最後の事なのだから。

◇

遺体の焼却を終えた僕達はホーネンに連れられ埋葬する場所に辿りつく。

すでに準備を終えていたのか、地面に穴が掘られていた。

布で包んだ骨を埋め、手で抱えられる程度の石を置く。

そこに名と赤い着色をした三日月の紋章を掘った。

赤い三日月の紋章は義勇兵の墓に刻まれるものらしく、ここだけでなくそこら中の墓に掘られていた。

ここには多くの義勇兵が眠っている。

この光景は、マナトの死は、誰かが命を散らすのは特別な事ではないと否が応にも実感させられた。

ホーネンはすでに去り、墓地にいるのは僕達だけ。

皆、誰も何も言わずに何時間もただマナトの墓の前に佇んでいる。

シホルは憔悴しきっており地面に手をついて座り込み、ユメはただ空を見上げている。

モグゾーは放心し、ランタもずっと黙ったままだ。

そんな重苦しい雰囲気の中、ユキトの隣に立つハルヒロが淡々と口を開いた。

「……何だよ、これ。おかしいだろ、ふぎけんな、ふぎけんなよ」

ユキトは何も言わず、拳を握りしめる。

本当にマナトは死んだ。

何もできなかつた。

悔しさと悲しみ、色々な感情が渦巻く中、座り込んでいたランタが立ち

上がると「俺、行くわ」と呟いて歩き出した。

「どこ行くん？」

「何処でもいいだろうが。ここに居てもしょうがないだろ。もうどうにもならないんだからな」

「この阿呆！」

ランタはユメの非難にも答えず、そのままどこかへ歩いていく。

今アイツを放っておく訳にはいかない。

ユキトはハルヒロ、モグゾーと三人でランタを追い掛けた。

シホルはユメに任せておけば大丈夫だと思う。

シホルは——彼女は、マナトが好きだったのだ。

今、ユキト達が何を言っても届く事はない。

言うべき言葉も思いつかない。

オルタナに戻ったランタが向かった場所はシエリーの酒場だった。

ここは義勇兵達のたまり場であり、マナトも情報収集の為に何度も足を運んだと聞いている。

四人で賑わう酒場に足を踏み入れると、そのまま隅にあった席へと座った。

まだ本格的に客は入っていないにも関わらず、すでに多くの人が酒を飲んでいる。

「ビール、四つ」

ランタが淀みなくやって来た給仕に注文する。

「俺、ビールとか飲みたくないけど」

「うん。こんな時にお酒なんて」

「バーカ、こんな時だからだろ。マナト、ここで酒飲んだりしてたんだろ。でもアイツはもう……だから代わりって訳じゃないけどよ……」

ランタは目元をこすりながら鼻を嗅る。

やっぱり何だかんだ言いながらもランタもマナトの事を思っているのだ。

こんな時だというのに何でか少し嬉しくなった。

給仕に金を払い運ばれて来たビールを手にとつて乾杯する。

「……苦い、本当に苦いな」

「うん」

その勢いのままビールを飲みんでいると皆、アルコールが回ったのか明らかに顔が赤くなつてきた。

「くそ、やってられつかよ！ 最悪だ！ 元々やりたくてやってたんじゃねーんだよ

！ やめだ、やめ！ 全部やめてやる！」

ランタが自棄になつたようにジョッキを苛立たしげにテーブルに叩きつける。

「やめてどうすんだよ」

「知るかよ。いいだろ、別に。やらなきゃいけない決まりでもあんのかよ！ たとえ決まりがあつたとしても、俺は従わねーからな！」

「そう言う事じゃないだろ！ やるしかないから、皆で頑張つてきたんじゃないか！」
二人は酒の所為もあつてか、かなりヒートアップしている。

モグゾーが二人を止めようとしているが、止まらない。

そんな中でユキトは二人の口論を聞きながら、ランタの先程の言葉を思い出していた。

やめる。

全部やめてどうなるのだろう。

それで自分は納得できるのだろうか？

脳裏に思い出される黒いオークの姿。

嘲笑い、侮蔑した笑み。

アイツを放つておくのか？

マナトを、仲間をやられて、侮辱されたまま——

そんな事はあり得ないだろう。

「だいたい、お前がやられまくつてマナトに魔法を使わせ過ぎたんじゃねーのかよ、ハ

ルヒロ！ 大した戦力にもなつて無いくせに、足引つ張つてんじゃねーよ！ お前のせいで——」

「……黙れ」

こちらを振り向いたランタを思いつきり睨みつけてやったらすぐに唾を飲んで黙り込んだ。

ランタだけでなく、ハルヒロもモグゾーも固まっている。

自分でもここまで冷たい声が出るなんて驚いた。

でも酒の勢いとはいえ今の言葉だけは看過できない。

「黙れよ、ランタ。たとえ酒の所為でも言つて良い事と悪い事がある」

「う、わ、分かつたから、マジで、今後気をつけますんで、睨まないでください。……」

マジ、こええつてこいつ」

僕は残つたビールを口に含むと、ジョッキを静かにテーブルに置いた。

「ランタがやめるっていうのは勝手だ、好きにすればいいよ。君の言い通り強制はできないから。でも僕はやめない。少なくともあのオーク達を倒すまでは絶対に」

オーク達の事を出すとハルヒロ達も黙り込んだ。

仮にここで全員が義勇兵をやめる道を選ぶというならそれでいい。

でも自分だけはやめるつもりはなかった。

たとえ他のパーティに加わってでも義勇兵を続ける。

「でもさ、続けるにしてもこの先どうすればいいのかっていうのはあるよ」

「うん。俺も……やめるつもりはない。けど、モグゾーの言う通り、なんだよな。今はあんまり考えられないっていうのもあるけどさ。それにランタ、やめるってどうすんだよ？ 暗黒騎士だから他の職業にはつけないだろ」

「あ、そう、だよな。俺、暗黒騎士だから、ずっとこのままだし。くそ、何で、俺は暗黒騎士なんか……」

先程とはうって変わってテーブルを静寂が支配する。

皆がため息をついているとそこで見覚えのある奴が手を振って近づいてきた。

「あれ、お前ら！ ひっさしぶりじゃん！」

「元氣！」とチャラそうな顔で近づいてきたのはキツカワだった。

キツカワは最初にグリムガルに来た時に一緒だった十三人の内の一人だ。

何というか立派な鎧を身につけ、柄頭に飾りのついた剣を携えている。

ずいぶん景気が良さそうだ。

今は先輩義勇兵のチームであるトキムネって人のパーティに所属しているようで、結構上手くやっているらしい。

キツカワは馴れ馴れしくハルヒロとモグゾーの間に割り込むと「ビール、ビール、ビー

ルね！」と注文し始めた。

ここで飲むつもりなのか？

正直、今このテンションにはついていけそうにない。

僕はキツカワの話を聞き流す事に決めてビールを煽る。

最初は構わず軽口を叩いていたキツカワだったが、ハルヒロからマナトの事を聞くと、流石に自重して少し声のトーンが落ちる。

「そつかあ、マナトつちがね。できる男って感じだったからさ。神官だったけ、パァーテイの要か。死亡率も低くないって聞くし、狙われやすいしね」

「そうなの？」

「そうりやそうでしょ。敵だつて神官が治癒者ヒイラーだつて知ってる訳だし。まずアイツを殺れて事になるでしょ。そうなると俺つちみたいな戦士は前に出て神官守るって流れになる訳だし」

「……僕は助けてもらつてばかりで、守って上げられなかった」

モグゾーが悔しそうにしながら俯く。

それはモグゾーだけじゃない、僕だつて同じだ。

もつと僕らがしつかりしていれば――

「ま、そう暗くならずには。前向きに行くしかないでしょ、前向きにさ」

「前向きって言ってもよ、神官いなきやどうにもならないだろ」
そう、今パーティには神官が居ない。

先程もキツカワ自身が言っていたが傷が癒せる神官はパーティの要。

神官がいなければ、碌に狩りに出る事もできないのだ。

「探せばよくない？ 俺さ、顔広いから知ってるよ、見習い義勇兵のお前らでもスカウトできそうな神官の事」

「え、本当に？」

「誰だよそれ！」

地獄に仏だ。

どういう意味かは正確に思い出せないけど、こんな時に使う言葉だった気がする。

正直、ウザいとか思ってたけど、ごめん、キツカワ。

「その前にさ。お前ら名前なんだっけ？ どうしても思い出せないくてさ、教えてくれッシエンド？」

舌打ちを堪えた自分を褒めてやりたくなった。

確かに影は薄いし、話した事もほとんどないけど。

なんで名前も覚えてない相手のテーブルでそんな馴れ馴れしく、酒飲もうと思っただよ？

ユキトはすべての文句を飲む込むつもりで残っていたビールをすべて飲み干した。

◇

シエリーの酒場を後にし、紹介された神官との顔合わせを終えた四人は足取り重く、義勇兵宿舎へ帰ろうと歩いていった。

皆、すでに酒が抜けているのか口数は少ない。

そんな沈黙に耐えかねてユキトはポツリと呟いた。

「……シホルやユメは大丈夫かな」

結局、あの後二人がどうしたのかは分からない。

しかも二人に黙って神官の事まで決めてしまつて。

「大丈夫だろ、多分。もう流石に戻つてゐるって」

「そうだよね」

再び沈黙し、足音だけが辺りに響いている。

この辺りは裏路地になっており、治安もあまりよくない。

掃除も行き届いておらず、ゴミも所々に散乱している。

普段はこの道は通らないのだが、今日は疲れた。

早く帰りたいと義勇兵宿舎への近道を選んだのだが――

「こつちやつぱり雰囲気良くないね」

「ビビんなよ、モグゾー。さっさと帰ろうぜ」

「どうしたの、ハルヒロ？」

隣を歩いていていたハルヒロが立ち止まり、キョロキョロと周りを見ている。

「いや、なんか変な音がしないか？」

「えっ」

全員で耳を澄ませてみると、何か甲高い音が聞こえてきた。

これはつい最近聞いた覚えがある音だった。

「……金属音だよね」

「うん」

何度も金属がぶつかる音が響いてくる。

これってまさか——

気がつけば路地を歩いているのはユキト、ハルヒロ、ランタ、モグゾーの四人だけしかない。

引き返すべきだろうか？

なんか凄まじく嫌な予感がする。

「どうする？　引き返す？」

「ビ、ビビってんじゃねーよ、お前ら！ 引き返したら遠回りになるだろうが！」
明らかな虚勢だけど、こんな時までランタはブレないみたいだ。

「じゃあ、ランタ先頭でお願い」

「ふざけんなよ、ユキト！ お前が前に出るよ、戦士だろうが！ ハルヒロ、逃げんな
！」

「喧嘩しないで」

誰が先頭で行くかで揉み合う僕らは傍から見たら馬鹿にしか見えないだろう。

そんな馬鹿な事をしている間にも、金属音は大きくなり、そしてキイインという一
際大きな音と共に何かが吹っ飛ばされてきた。

壁に叩きつけられたそれは、地面に崩れ落ちるとピクリとも動かなくなる。

手には剣を持ち、荷物が詰め込まれたバック、そして身につけた装飾品とマント。

——倒れているのはおそらく義勇兵だ。

倒れ込んだ義勇兵？ から赤い血が流れ、地面に染みを作っていく。

「な、何が？」

コツ、コツと僕達とは違う足音がゆつくりと近づいてくる。

本能的に逃げなきやと思うのだが、足が動かない。

皆、同じで全員がその場に案山子のように佇んでいる。

そして現れたのは見覚えのある人物だった。

「ん？ 誰かと思えば、お前か。つくづく縁があるようだな、二刀使いの見習い義勇兵」

手に持った長剣から血を垂らしながら、銀髪の死神がニヤリと笑みを浮かべていた。

第七話

契約

女性に連れて来られた酒場。

訪れた時の第一印象は「思ったよりも綺麗な店」という実に失礼極まりないものだった。

明かりをわざと多くしていないのか、少しだけ暗い。

だが中は思った以上に清潔で、内装もどこかお洒落な雰囲気が出ている。

この暗がりもそれに一役買っているのだろう。

シエリーの酒場とは真逆、所謂大人が通う酒場といったところか。

でも、こんな裏路地にある店なんて汚く怪しげなものか、いかがわしいものだって思ってしまったも仕方ないと思う。

当然、小汚い義勇兵見習いであるユキト達にはあまりに場違い。

全員が委縮しまくっていた。

正直な所、この店は僕たちのような義勇兵見習いが来るには敷居が高すぎる。

はつきり言ってしまうえば、滅茶苦茶浮いているのだ。

救いがあるとするれば今いる場所が店の一番奥側にある席であるという事くらいだろう。

この店の奥側は他の客から見えないように仕切りがしてあり、広い個室のようになっている。

あくまでも仕切りなので完全な密室という訳ではないが、今の僕たちの姿を見られる心配が少ないのはありがたい。

「……何で裏路地にこんな店があるんだ？」

「………知るかよ」

そんな酒場『ルナミス』の雰囲気当てられながら、ユキト達は目の前のソファアールワインを飲む人物を恐る恐る観察する。

目の前にいるのは裏路地で遭遇した銀髪の女性。

何で名前も知らないこの人とこんな場所にいるかと言えば、強制的に連れてこられたとしか言いようがないと思う。

グラスを片手にワインを煽るその姿は実に絵になっている。

しかも薄着で足組んだりしてるから、非常に、その色っぽいというか、すごくスタイルが良い。

ランタなんて食い入るよう見つめている。

こんな状況でなければ、もっと嬉しいのかもしれないけど、今はとてもそんな気分にはなれない。

《見られた以上は仕方ないな。着いて来い》

あの血のように紅い目は逃げたら殺すと語っていた。

しかも血に濡れた剣を肩にかけ、怖い笑みを浮かべられた日にはついていくという選択肢しかないだろう。

うん、仕方ない。

あの状況では誰だっけについて行く。

ハルヒロの方を見るとビクつきながらも頷いてくる。

幸いというか、話しかける動機がある。

丁度助けてもらったお礼を言おうと思っていたのだ。

密かに深呼吸をしながら、慎重に話しかけた。

「あ、あの、ダムローで助けてくれてありがとうございます！」

「ん、ああ。別に礼は必要ない。アレはたまたまだ。それよりも先程の件だが」

「うっ」

「や、やっぱりアレって見ちゃいけない類のものですよね？」

女性は答えず、ただ笑みを浮かべながらワインを傾ける。それはそうだ。

人気のない場所で誰かを斬るなんてまともな事案ではない。

さつきはいきなり殺される事はないと思っていたが、これは下手すればすぐにも殺される可能性が高い。

できるとは思えないが、逃げる算段くらいは立てておく必要がある。

「そう警戒するな。事情くらいは話してやる。いきなり剣を抜いたりはしないさ。——余計な事をしなければな」

女性は逃げ道を探っていたユキトを見透かしたように釘を刺してくる。

目ざといというか、気づく辺りは流石と言うべきか。

「それにしても今回の件といい『傷持ち』の事といい、お前達は運がないな」

「『傷持ち』？」

「お前達が遭遇した黒いオークの事だ」

「あの黒いオークを知っているんですか？」

「……そうか、お前達は見習いだつたな。では知らなくてもおかしくないか。奴は『傷持ち』と呼ばれる賞金首だ」

現在、人間と鎬を削り敵対している異種族の中には特別な立場だったり、通常の個体

よりも遙かに高い技量を持つ個体も存在する。

そういった連中には未熟な者たちは注意しろと警告すると共に、優れた義勇兵には優先して倒すように賞金が掛けられる。

あの黒いオークもそういう危険な個体だったらしい。

そう考えるとあの場に彼女が現れなければ全員殺されてもおかしくなかった。

嫌な想像が脳裏を過り、頭を軽く振る。

「アイツはその中でもヤバい部類に入る。並みの義勇兵ではあつさりと返り討ちだろ
うな」

アイツが相手ごわい相手である事は彼女との激しい戦闘を思い出せばわかる。

明らかに尋常な腕ではなかった。

正直、あんな奴に勝てる姿なんて全く思い浮かばない。

それでも、諦めるつもりはなかった。

どれだけ時間がかかっても必ずやり遂げる。

そんなユキトを見ていた女性はどこか楽しげに笑みを浮かべた。

「悔しいか？ 仲間がやられ、何もできなかつた事が？」

その指摘に僕だけでなく女性の雰囲気にも気圧されていたハルヒロやランタ、モグゾーも反応する。

「……当たり前です」

「ほう。ではどうする?」

「決まってるんだろ! 俺らの手でぶっ倒すんだよ!」

立ち上がり吠える、ランタ。

初めてランタと心の底から通じ合えた気がする。

しかし女性が「うるさい、でかい声を出すな」と言いながら睨んでくるとランタは「すいません!」と土下座する。

それさえなければカッコいいと思うのだが。

「威勢は良いが、アレは強いぞ。今のお前たちでは歯牙にもかかけられない。迂闊に挑んだ所で無駄死にするだけだ、それでも?」

「はい。今は無理でもいつか必ず」

その場にいた全員が頷くのをみると先ほどまでの雰囲気から一変、真剣な顔で女性が問いかけてきた。

「何故、そこまでする? 確かに殺されたのはお前たちの仲間だ。悔しさも理解はできる。しかしそれはお前達が命を掛けてでもやるべきことか?」

「それは……でも」

「今回の事を教訓として自分達の身の丈に合った敵だけと戦い、リスクを避け、それな

りの義勇兵として生きる道もある。それに死んだ仲間には自分の為にお前たちに危険なことなどして欲しくはないんじゃないのか？」

確かにマナトなら自分の事は気にするとか言いそうだ。

みんなが無事ならそれでいいと。

ここですべて忘れ、できるだけリスクを避けていけば、確かに安全に生きていくことはできるかもしれない。

けどどやっぱり納得なんてできないし、けじめをつける意味でも必要だと思う。

それにこの先で奴らに遭遇した時のような危機に陥らないと何故言い切れるだろうか。

もしも遭遇した時は？

また仲間が死ぬ可能性があるというのにただ逃げる事しかないのか？

そんな事はもう嫌だった。

今の自分たちには危機に遭遇しても乗り越える事ができる意思と力が必要なのだ。だからこそ逃げる選択だけはしたくない。

「……正直、俺達は実感がありませんでした。命のやり取りだつて分かっていた筈なのに、心のどこかで誰かが死ぬなんて思ってもいなかった。でも、マナトだけはそれに気が付いていた」

ハルヒロの告白は聞いていてつらいものがある。

でも寸分違わずその通りだ。

ユキトも、モグゾーも、ランタも、ユメも、シホルも、どこか真剣さが足りなかった。甘かったのだ。

でもリーダーだったマナトだけはそれを危惧していた。

でなければ戦闘で負ったかすり傷をあそこまで真剣な表情で癒そうとはしない。

「俺達全員、アイツに甘えていた。マナトは何でもできたから。でもその甘えが負担になって、アイツを……失う結果に繋がってしまった」

「……ままじや僕たちはマナトに顔向けできない。僕らの為に頑張ってたマナトを笑ったあの黒いオークを許したら、仲間なんて呼べないんだ」

「ああ。やっぱり借りは返さないと！ ここまでやられて黙ってられるかっての！」

「うん。今度こそ僕は仲間を守る。いつかあのオーク達より強くなる。もう誰も死なせない」

一度酒場で弱音を吐いてすつきりしたからか、全員がやる気になっていた。

その言葉を聞いた女性は再び笑みを浮かべる。

「そうか、どうやらお前達は少しはマシな連中だったようだな」

「え？」

一瞬だけ、本当に一瞬だけだけどその笑みは先ほどまでとは違い酷く優しげなものに見えた。

気のせいだったのだろうか。

「いや、丁度良いと思っただけだ。すでに察している通りあの現場を見られた以上、お前達にはそれなりの対応というのを取らなくてはならない」

やっぱりそうなるか。

「俺らあそこで見た事は誰にも言いませんから！」

「そんな口約束、誰が信じる？ そんな言葉だけで信じる奴はただの間抜けだ」

「ぐっ」

「だが条件付きでお前達を助けてもいい」

「え、条件？」

「ああ。私の仕事を手伝ってもらおう。詳細は後で話してやるが、私の仕事を手伝うなら、お前らが見た事に関しては見逃してやる」

「で、でも人殺しとかできないと思えますけど」

「そつちは当てにしないでいいし、やらせる気もない。というか殺していない。アレは捕縛しただけだ。もう一つ言っておくがさっきのアレも一応ギルド関係の『仕事』だ」

「えっ、殺してなかった？ ていうかギルドの仕事!？」

「ああ、手伝うなら後で話してやる。まあ先にギルドのお偉方に話を通す必要があるが」

その言葉を聞いてハルヒロが安心したようにホッと胸を撫で下ろした。

しかし先ほどの件がギルド関係の仕事というのは――

そこでユキトは前にスクードから教えてもらったギルドの裏側に関する話を思い出した。

あの時教えてもらった事はあまり信じていなかったのだが、この人がやっているのはそれに関する事なのかもしれない。

「後はそうだな。ただ手伝うだけじゃ不服だろうから、お前たちを鍛えてやってもいい」

「鍛える?？」

「ああ。戦い方を教えてやると言っているんだ。ギルドじゃ教えてくれない事を教えてやる」

僕はハルヒロ達の方を見る。

皆が覚悟を決めたように頷いた。

身を守る為にも選ぶ選択肢は一つしかない。

今回のことで身に染みた。

どんなに警戒し、リスクから逃れようとしたところで厄介事に巻き込まれるときは、巻き込まれるのだ。

「詳しい話は後日だ。ギルドの方へ話を通す必要がある」

「あの、こつちからも一つ聞いていいですか？ 何故、俺達にそんな話を持ちかけるんですか？ 俺達は義勇兵の中でも底辺ですし、協力者が欲しいならもつと良い人材はいくらでもいると思いますけど」

「お前達は信頼できると判断しただけだ。たとえどれだけ腕が立とうが信用できないような奴に用はない。それに仮に裏切ったとしても、お前達なら始末も簡単だからな」
確かに彼女の実力なら僕達がどれだけ抗おうとしても、あっさり始末してしまうだろう。

悔しい話ではあるがそれが現実である。

「助かる為に嘘ついてるかもしれないですけど」

「私もそれなりに人間を見てきた。腐った奴はそもそもそんな質問はしてこないんだよ」

「どうやら先ほどの問答でそれなりに認めてくれたらしい。」

「あの、僕達には後二人、いや後三人仲間がいるんですけど……」

「今はそいつらには黙っておけ。余計な事に巻き込みたくはないだろう?」
「そうですね」

「……二人は巻き込みたくないよな」

「うん」

「まあ、な」

危険な事に巻き込まれる可能性が高い以上、二人には言わない方がいい気がする。
特にシホルはマナトの件で憔悴しきっている。

余計な事で彼女に負担は掛けたくない。

「で、結論は出たのか?」

「は、はい。よろしくお願ひします」

「一応交渉成立だな。名前を聞かせてもらおうか」

そう言えば自己紹介もしていなかったし、僕達も彼女の名前を知らない。

「ハルヒロです」

「ランタつす」

「モグゾー、です」

「ユキトです」

「私の名前はアナスタシアだ。さて……一応保険くらいは掛けておくか」

「保険？」

対面に座っていたアナスタシアがテーブルの上にあつたナイフを手にして立ち上がる。

そしてユキト達が座っている方へゆつくりと近づいてきた。

「そう固くなるな。すぐ終わる、まずはユキトお前からだな、口を開けろ」

アナスタシアは素早く指先を傷つけ問答無用で僕の口の中に入れてきた。

「むぐぐ!」

口の中に広がるのは鉄の味。

指先から垂れる血が喉奥まで流し込まれていく。

ある程度の血を飲むとアナスタシアは指を口から引き抜き、指を舐めた。

何か仕草がいちいちエロイです。

「次、ハルヒロ。口を大きく開け」

「は、はい」

ハルヒロが口を開くと今度はただ血を垂らし、飲ませていく。

続いてランタ、モグゾーと血を飲ませていった。

血を飲まされていい気分になどならず、全員が気分が悪そうな微妙な顔でアナスタシ

アの方を見る。

「あのこれって何の意味があったんですか？」

「ただ保険を掛けただけだ。気にするな」

改めて向き直ったアナスタシアは立て掛けていた剣を腰に差すと入口の方へ歩き出した。

「さて、行くぞ」

「え、行く？ どこに？」

「寝ぼけるな。鍛えてやるといっただろう。さっさとついて来い」

ソファーに立てかけていた剣を取るとアナスタシアは店の外に歩いていく。

雰囲気的に断るといふ選択肢はなく、黙って後についていった。

◇

たどり着いた場所は奇しくもユキトがいつも一人で訓練を行っている場所だった。

此処なら誰かに見られることもないし、深夜になっても消えることのない光で明るさも十分に確保されている。

「さて今日は一番初めだ。まずはお前達の実力を見せてもらう。全員でかかってこい」

スラリと鞘から抜き放った白刃が夜の暗闇の中でも映えるようにキラリと光る。全く隙の無い立ち振る舞いに思わず息を飲んだ。

「凄いね」

「うん」

見入るようにポツリと呟くモグゾーに同意する。

共に前に出て戦う戦士同士。

彼女の凄さは未熟であろうとも理解できる。

「どうした？ 来ないのか？」

彼女の戦意に当てられ、僕は自然と武器を構えていた。

元々勝ち目など皆無。

なら出し惜しみは無し。

最初から全力でいく。

隣に立ちバスタードソードを構えるモグゾーと頷き合うと、二人同時に前に出た。

「ハァー！」

「どうもー！」

左右から挟み込んだユキトとモグゾーが繰り出した憤怒レイジブの一撃ロによる同時攻撃。

しかしアナスタシアは僅かに体を逸らすだけで回避。

素早くモグゾーの内側に入り込み、服をつかんでユキトの方へと投げはなった。

「なっ!？」

いとも簡単に宙を舞う巨体に思わず驚愕してしまった。

あんな簡単にモグゾーを投げ飛ばすとか、どんな力をしてるのか？

ユキトは横っ飛びで飛んできたモグゾーから逃れるとアナスタシアの方へショートソードを横薙ぎに叩きつける。

しかしその刃は掠める事すらできずに空を切った。

だが、それでもユキトは動きを止めず、もう片方の手で抜いたショートソードを袈裟懸け振う。

「ほう、二刀か」

続けざまに振るう斬撃にも余裕でかわすアナスタシア。

でもそれでいい。

僕は彼女の注意さえ引き付けておけば――

「うおりやああ!」

後は我らが暗黒騎士の出番だからだ。

背後に回り込んでいたランタの憎悪斬ヘイトレゾドがアナスタシアの背中に襲い掛かる。

しかもそこに死角を突いたハルヒ口も参戦し、アナスタシアの動きを阻害しようとする。

ガーを振るつた。

完璧なタイムングだと思う。

だが、アナスタシアはそれすら見切っていたようにあつさり捌いて見せる。

そしてカウンター気味に構えていた左の拳でランタを頬を殴り、ハルヒロに蹴りを入れて吹き飛ばした。

「ぐああー！」

「ぐええー！」

碌に受け身も取れないまま、二人は地面に倒れ込んだ。

「分かつてはいたけど、ここまで」

あの流れるような動きや体捌きなど見るべき所はいくらでもある。

だがそれよりも注目すべきはユキトたちは彼女に剣すら使わせていないという事実だ。

それはつまり絶望したくなるほどの差があるという事を示している。

「どうした、もう終わりか？」

いや、何をへこむ必要があるというのか。

敵わないのは当たり前的事。

このくらいでへこんでいたらこれから先はやっていけない。

「まだまだ!」

両手に握る二刀の柄を強く握りしめ、アナスタシアへ向かっていく。それに続くようにハルヒロやモグゾー、ランタも立ち上がる。

その様子をアナスタシアはどこか楽し気に見つめていた。

「ぐああ」

「この!」

どのくらい斬り合っていたのか分からない。

だが結局、剣を使わせることもできないまま、全員が地面に寝転ぶ羽目になった。

「ハア、ハア」

「つ、強ええ」

「か、体中が痛い」

「もう動けない」

アナスタシアは息を切らして倒れ込む僕たちを無視して剣を腰に差し直す。

「こんなものか。……総評を伝えておくと、話にならない」

「す、すいません」

「経験不足というのものもあるんだろうが、戦い方が稚拙すぎる。連携もぎこちなさあつて、上手く機能してない」

今まではマナトの指示通りに戦っていただけだからというのもあるのだろう。もう少し自分でも戦い方を考えないといけないのかもしれない。

「まあ、今日はこの辺にしておこう。明日から毎日訓練を行うから覚悟しておけ。最低限自分の身を守るくらいにはなつてもらわないといけないからな。それから明日の朝、狩りに向かう前にここへ来い、事情を話してやる」

「「あ、ありがとう、ございました」」

情けない事に立ち上がれないままだったが、最低限の礼儀としてお礼を口にする。

それを聞いた彼女はやや驚いていたようにも見えたが、すぐに表情を変える。

立ち上がることができないままそれに見入ってしまった。

何故なら彼女は今までの印象を覆すほどに見たこともないほど穏やかな笑みを浮かべていたから。

◇

オルタナが夜を迎え人々が寝静まっている中、ハルヒロ達の訓練を終えたアナスタシアは周囲を警戒しながら足早に移動していた。

向かっているのはルミアリス神殿近くにある小屋だった。

誰にも見られていないのを確認すると、小屋の入り口で懐から取り出した紋章を掲げ

る。

扉の覗き穴からそれを確認した住人は素早くアナスタシアを招き入れた。

小屋は外からでは小さく見えるが、中に入れば一家族が住まうには十分な広さがあつた。

「今日の用向きは？」

無精ひげを生やした無骨な男は明らかに歓迎していない声色で問いかけてきた。

歓迎されていない事は来る前から分かっている。

アナスタシアは特に気にした様子もなく、淡々と要件を伝えた。

「依頼の報告と許可をもらいに来た」

「……分かった。ただ今はスクード様しかない」

「十分だ」

男が奥にある部屋の仕掛けを動かすと地下へ続く階段が姿を見せた。

アナスタシアは慣れた様子で階段を降り、長い暗がりの通路を歩いていく。しばらくすると広い空間が目の前に広がった。

中央に大きなテーブルが鎮座し、壁には様々な情報が乱雑に張られている。

そこでは仮面を被った人物スクードが待っていた。

「こんな時間に何の用だ？」

「色々あつてその報告に」

「ほう」

アナスタシアから話を聞かされている内にスクードの様子が明らかに剣呑さを帯びてくる。

全身から発せられる殺気を抑える事なく、スクードはアナスタシアに告げた。

「……見習い義勇兵を巻き込むとは！ しかも貴様の血族にしたいだど！」

「不服か？」

「当たり前だ！ 前にあつた事を忘れたのか!!」

スクードの拳がテーブルに叩きつけられる。

仮面の下からでも分かる怒気をアナスタシアは軽く受け流すと淡々と告げた。

「忘れてはいない。しかし彼らを放つておく事はできない。今回の件、監視されていたとすれば、目を付けられた可能性もある」

「それもお前の不手際の所為だろう！」

「だからその責任を取ると言っている」

睨み合う二人。

しばらく沈黙していたスクードは折れたようにため息をついた。

「……分かった。私から報告を上げておく。甚だ不本意ではあるがな」

「では彼らの事は私が預かる」

そう言つて去つていくアナスタシアの後ろ姿をスクードは見えなくなるまで睨みつけていた。

◇

翌朝、ユキト達はユメたちとの待ち合わせ場所に行く前に昨日の約束を果たす為に走っていた。

「くそ、体痛え！」

「我慢しろつて」

「狩りに行く前からこれだもんね」

「ハア、ハア、想像以上につらいな」

昨日の訓練の所為かガタガタの体を引きずりながら広場へ入る。そこにはすでにアナスタシアが待っていた。

「来たな」

「すいません。遅れましたか？」

「いや、時間通りで結構だ。それより昨日の話の続きをするぞ」

全員がこれから始まる話に緊張を隠せない様子で息を飲んだ。

「まずはお前たちは知らんだろうが、ここオルタナに無数に存在するギルドにはある問題を抱えている」

「問題？」

「反ギルドとでもいえばわかりやすいか。錠を破りあぶれた連中が作った犯罪組織のようなのが存在している」

「反ギルド!？」

やっばりという確信が強まった。

スクードがアナスタシアに近づくなと釘を刺してきたのも、スクードなりに危険から遠避ける為の気遣いだったのだろう。

「ああ、結構手広くやっついていてな、支援している奴らまでいる。アラバキア王国の貴族連中の利権も絡んでいるという噂もあって中々ギルドの方でも手を焼いているのさ。私が捕縛したあの男もその反ギルド団体に所属していた奴だよ」

「じゃあ、アナスタシアさんがやっている仕事というのは……」

「連中の調査と邪魔な奴らの排除と言ったところだな。他にも依頼を受けたりすることはあるが、概ねそんなところだ。お前たちにはその情報収集を手伝ってもらおう」

話を聞くだけでも気がめいってくるくらいにハードな事になりそうだった。

「基本的な事はこれくらいだな。私は大体夜は昨日の店に居る。用があれば来るといい。もしも居ないならマスターに伝言でも残しておけよ」

「分りました」

「今日も狩りに行くんだろ。早く行った方が良い」

「はい。ではまた夜に」

一通りの話を終え向かった先はオルタナ北門。

マナトを失い、落ち込む間もなく今後に関わる話を聞いた。

そしてこの場所に再び集まったユキト達はまぶしい朝日に恨めしい視線を送る。

結局、一矢報いる事すらできずに容赦なくボコボコにされてしまった彼らは夜通し筋肉痛に悩まされる羽目になった。

当然、碌に睡眠などとっている筈もない。

しかも今日は新しい仲間と初めて狩りに出かける記念すべき日。

だけど、パーティメンバーの雰囲気は実に重苦しいものだった。

「というわけでえ、皆さんに新しいおともだちを紹介したいと思いまあ〜す！ 神官

のメリイさんです!! はい、拍手!!」

パチパチとユキトとハルヒロ、モグゾーは軽く手を叩いた。

この雰囲気をもっともしないランタの胆力には敬服する。

少なくともユキトには真似できない。

恐る恐る肝心のユメやの方へ視線を送ると完全に呆気にとられた様子で立ちすくんでいる。

まあいきなり新しい神官紹介しますなんて言われたら当たり前だろう。

今度は肝心の新しい仲間であるメリイの方へ目を向ける。

メリイははつきり言うと思とれる程の美人だ。

バランスが実の取れている。

アナスタシアとはまた別の美しさというか、魅力を持っていると思う。

だけどいかんせん雰囲気は良くない。

明らかにトゲトゲしい雰囲気を出し、話しかけるなオーラが全開だった。

「メ、メリイさんです」

ランタがもう一度だけ、ユメやシホル達にメリイを紹介すると「ど、どうも」「は、初めまして」と腰が引けつつ挨拶を交わした。

しかし相変わらずメリイの方は何も言わず、ユメとシホルの二人をジロジロと観察している。

「……やっぱりこうなったか」

「うん」

実はこうなる事を事前に予期していた。

紹介され、スカウトされた時も同じような態度だったからだ。

「これで全員なの？」

髪をかき上げながら聞いてくるメリイのその姿も実に様になっていると思う。
視線は氷のように冷たいが。

「うん。メリイを入れて七人」

「そう。で、どこに行くの？ ダムロー？」

「かな？」

「はつきりして」

「ダムロー、旧市街でゴ布林狙いで」

「そう。さっさと行けば。私はついていくから」

かつてないほどパーティ内の空気が悪い。

ランタはキレかかり、モグゾーはオロオロとしている。

直接会話しているハルヒロの心境は他のメンバーが感じている居心地の悪さの非
じやないだろう。

ユメヤシホルとの間にも溝みたいなものを感じるし、このままで大丈夫なのか？

「い、行こうか、皆」

新たに仲間を加えた僕達は大きな不安を抱えながら、ダムローに向けて新たな一歩を踏み出した。

第八話 会話

テーブルに向けて怒りの籠ったジョッキが叩きつけられ、ビールの泡が僅かに飛び散る。

「ふざけんじゃねえってんだよ！」

怒りの主はランタだ。

顔を赤くしながら、苛立ちを隠そうともしていない。

「お、落ち着いて、ジョッキが壊れちゃうよ」

「手加減してるつつうの！ お前はどうかんだよ、モグゾー！」

「そりやまあね」

「だろ！ ハルヒロ、ユキト、お前らはどうなんだよ！」

「腹に据えかねてるものがあるっているのも無きにしも非ずだけど」

「ランタ、飲み過ぎだよ。この後の予定忘れてない？」

テーブルを囲む男子メンバーの話題の中心は新たにパーティーに加わった神官メリイの事だ。

彼女が新たなメンバーとして加わり、すでに数日が経過しているにも関わらずパーティーの状態は順調とは程遠いものだった。

メリイとの関係は出会った時と変わらない。

それどころかハツキリ言つて非常に険悪である。

理由はいくつもある。

例えば回復について。

メリイは致命傷になりえるような大きな怪我でなければ、回復魔法を使わない。

これがマナトであればたとえかすり傷であろうとも、回復魔法を使つて傷を癒してくれた。

その対応の違いが大きな溝の一つになっている。

メリイが何故そういう対応をするのかをきちんとみんなに話せば、そこまで揉めることもなかったかもしれない。

だが彼女は神官としての役目をこなす以外、誰とも話さない。

いや、話しかけるなオーラが出ている為、誰も迂闊に話しかけられないのだ。

一応ハルヒロやユキトは何度も声をかけているけど、もれなく冷たい視線が返ってきて

て、言葉に詰まってしまふ。

そしてもう一つ、現在パーティーの最大懸念事項。

それがユメとシホルだ。

メリイが加わって以降、全くと言っていいほど会話をしていない。

マナトの件やアナスタシアの事、そしてメリイ、彼女達に黙っている事が山ほどある。

その罪悪感もあつて中々二人と話す切っ掛けがないのだ。

「で、お前はどうかんだよ、ユキト!」

「僕は……どうなんだろ?」

「ハア!?　なんだそりゃ!」

「何か理由があるのかもしれないし。メリイは……なんかさ、怯えてるように見える時があるんだよね」

「怯えてる?　何に?」

「前にさ、僕がちよつと大きな怪我したときあつたよね?　あの時、怪我した僕を見て

メリイはこつちが驚くくらいに顔を蒼くしてた」

メリイが加わつて少し経つた頃、ダムローを探索していた時にホブゴブと遭遇してし

まった事があつた。

マナトの件もあり一旦退くことになつたのだが、殿をしたユキトが結構大きな怪我を

してしまった。

出血は酷かったが怪我自体はそこまで大した事は無い。

しかしその時メリイが普段の態度から想像できない程に慌てて治療してくれたのだ。あの時、何かに怯えているような印象を受けた。

「けっ、あの女がそんな繊細なもんかよ！ 気のせいだ、気のせい！ お前やハルヒロは女に甘いんだよ！」

「じゃあこんな所で陰口叩いてないでランタが直接メリイに文句を言えよ」

「できるかアア!! あの女、めちやくちや怖いんだよ」

当然、ランタは何度もメリイに噛み付いているのだが、悉くあの冷たい視線と毒舌で返り討ちに合っている。

「あれってわざとじゃなかったんだ。ランタっててつきりMなのかと」

「んなわけあるかアア！ 俺は至ってノーマルだ！ もしくは暗黒騎士らしくSだつっのー！ ユキト、お前時々ささらつと毒吐くよな」

「そっつー」

「まあまあ、落ち着いて」

「それに本当のSってさ、バルバラ先生とかアナスタシア師匠みたいな人達だろ」
ハルヒロが疲れ切った表情でポツリと呟いた。

その名前を聞いてモグゾーもランタもゲツソリしたようにため息をついた。

アナスタシアと協力関係となった男子メンバーは訓練という名の地獄を毎晩味わっている。

鍛えようとしてくれているというのは分かっているのだが、いかんせん彼女はSつけが強く、全員が毎晩死にかけなのだ。

「とにかくパーティ内はこのままじゃ不味いよ。ユメ達と話しをしないと。……だけどその他、特にアナスタシア師匠に出会う事ができたのは結果的には良かったかも」

「そうだね」

確かに問題を抱えてはいる。

でも、目標を見失ってはいない。

それはアナスタシアのおかげだ。

毎日の訓練は厳しいものだが、それでも充実感がある。

もしも彼女の出会いがなければ、目標を達成すべき道筋さえ見え、途中で挫折していたかもしれない。

テーブルのジョッキからビールを流し込み、未だに慣れない苦みに顔を顰めていると、見た事がある顔が見えた。

「レンジ?」

「あ、ホント、レンジ達だ」

視線の先でテーブルを囲って居たのは同期のレンジ達だった。

「すごいね」

「うん」

隅っこにいる僕達とは違いカウンター近くの明るい席でテーブルを囲っている。

食べている物や飲み物もそうだが、明らかに装備が違う。

傍に立て掛けてある大剣も身につけている鎧も、随分高そうだ。

レンジだけではない。

仲間であるロンやアダチ達も皆がユキト達とは比べるまでもない程、良い装備を身に

つけている。

「アイツら俺達と同じ新兵ルーキだよな？ 義勇兵歴、俺達と同じ筈なのに何で……こんな

に差がついてんだよ」

ランタが呆然と呟いた。

気持ちは分かる。

同じスタートラインから始めた筈の同期にこうまざまざと差を見せつけられると、焦りが生じるのも当然だと思う。

でも——

「レンジ達がどれだけ先に行こうと関係ない。僕達はやるべき事を一つずつこなして
いくだけだよ。団章買う前にやることもあるし」

「そうだな」

「ケツ、ま、気にしてもしょうがねえよな」

「うん。そろそろ行こう。アナスタシアさんが待つてるよ」

「ヤバ、遅刻でもしたら殺される！」

あの人はどこかルーズな印象を持ちながらも時間にはかなりうるさい。

もしも遅れようものなら、考えるだけでも恐ろしい目に合わされるだろう。

容易に想像できる悪夢の光景を身震いしながら振り払い慌てて身支度を整え、シエ

リーの酒場を飛び出した。

そのまま全力で走っているとランタが顔を蒼くして、遅れ始める。

「う、ちよつ、ま、きぼち悪くなってきた」

「お前、あれだけ飲み過ぎるなって言ってたのに！」

「しょうがないだ、うっ！ ううう」

「大丈夫!？」

モグゾーが道端に蹲ったランタの背中を優しくさする。

これでは走る事はできない。

「……これ遅刻確定じゃないかな」

「言うなよ。あんまり考えたくない」

ハルヒロトとユキトはお互いに憂鬱な気分のまま、ため息をついた。

◇

暗い夜の闇を照らす街の光。

その光に照らされた薄暗さが残る広場で金属音がぶつかる音が鳴り響く。

ユキトは何の躊躇いもなく、片手で握ったショートソードを振るう。

「ハアー！」

躊躇なく踏み込み、繰り出した袈裟懸けの一撃。

それを手で持った鞆付きの剣で難なく捌いたアナスタシアは剣を素早く、逆手に持ち

替えユキトの腹を突く。

剣を横に寝かせどうにか防御するが、衝撃が剣越しに腹まで伝わってきた。

「ぐうー！」

女性の細身から生じたとは思えない凄まじい衝撃に一瞬意識が飛びかける。

これで可能な限り手加減しているというのだから、背筋が凍るといふものだ。

歯を食いしばって横に流し、上段より憤怒レイジブローの一撃を叩きつける。

「甘い」

「えっ」

渾身の一太刀だった。

その一撃を苦も無く弾き飛ばしたアナスタシアは剣を思い切り横薙ぎに払ってくる。

防御しようとするが間に合わず、受け身も取れないまま吹き飛ばされてしまった。

「グア、ゲホ、ゲホ！」

地面を転がり、腹部の激痛に耐える為はその場に蹲る。

その様子を見て呆れながらアナスタシアがゆっくりと近づいてきた。

「全然ダメだな。一刀も碌に扱えない奴が、二刀を使いこなす事などできないぞ」

「す、すい、ません」

何とか意識を保ちながらも、片手で握ったショートソードを見つめる。

現在ユキトに対してアナスタシアから二刀禁止令が出されていた。

元々パーティの戦術の幅を広げるつもりで二刀を使い始めたのだが、アナスタシアに

「まだ早い」と言われてしまったのだ。

一応これまでの経緯と自分の考えは伝えた。

その時に「じゃあ、モグゾーが戦えない、もしくは二刀で戦えない状態になった時ど

うするつもりだ？」と真顔で聞かれて反論できなかった。

確かに狭い建物や洞窟の中でモグゾーが負傷した時や神官が居ない場合。

さらにパーティが不測の事態で分断されてしまった時など、最悪の状況などいくらでもある。

その時、きちんと戦えると胸を張って言えるだろうか？

答えは先の戦闘を見れば一目瞭然。

一刀では戦う事ができない。

より正確にいうならば、一刀で戦う経験に乏しく上手く扱う事ができない。

「前にも言ったが二刀を使うなど言っている訳じゃない。二刀を使うなら、まずは一刀でも十分に戦えるようになってからにしろ」

「は、はい」

「次、ランタ」

「おす！ おりやあああ!!」

アナスタシアに向かって攻撃を仕掛けるランタの掛け声を聞きながら、仰向けに寝転がる。

考えるのはユメヤシホル、メリイの事だ。

メリイはともかく近頃は二人とも全く話をしていない。

狩りから帰れば、そのままシエリーの酒場に向かい食事を済ませてアナスタシアとの訓練に向かう。

それが最近の行動パターンになっている。

狩りの途中でも話しかけるけど二人からは簡単な返答のみ。

たまに早い場合もあるけど訓練から帰ればほぼ深夜。

二人は寝静まつており、話をする暇がないのだ。

「やつぱり不味いよね、これってさ」

このままでとパーティ分裂つて事もありうる。

色々言えないことができた事もあるけど、こつちが遠慮していたというのもある。

「本当に駄目だ」

ユキト達は何だかんだ言い訳して二人と話し合う機会から逃げていたのではないだろうか？

ハルヒロは慣れない役をこなしてかなり疲れているみたいだし、モグゾーや特にランタはこういつた事には向かないだろう。

「……頑張つて話してみよ」

考えが纏まったところで丁度、ランタが吹き飛ばされてきた。

「ぐあああ！ 痛つて!!」

「ハア、進歩がないな、お前達は」

「「すいません」」

「戦いながらもつと敵の事を観察する癖をつける。どんな敵にも弱点のようなものがある。それが分かれば、戦闘も組み立てやすくなる。特にハルヒロ、リーダーであるお前は常に周りに気を配れ」

「う、はい」

現在、パーティを率いているのはハルヒロだ。

ハルヒロ的には遠慮したかったようだが、他に適任者が居なかったのだから仕方ない。

一応ユキトは何かあった時などにサブリーダーという形でハルヒロを支援する事にしたが、それも果たして上手くいくのか、不安である。

「基本、貴様らはまだまだ話にならん。もっと精進しろ」

「「はい」」

アナスタシアから相変わらずの酷評を頂くと、全員が項垂れた。

これでも少しは進歩しているものと思いたい。

「よし、休憩終わり、さあ続きだ。立て」

「え」

「い、いやいや。僕たちまだ立てないっていうか」

「それに俺今ボコられたばかり……」

「知らん、立て」

「ヒイ」

ニツコリ楽しそうな笑みを浮かべる、アナスタシア。

全員ただ震える事しかできず、結局、この日も碌に反撃も出来ないままボコボコにされ続ける事になった。

◇

「あく身体中が痛いよ」

今日も今日とてアナスタシアにボコボコにされ、メリイを含む女性陣とは碌に話もできず。

聞くだけならまるで進歩がないように聞こえる。

「ハルヒロ達ももう寝てるし、僕も寝たいんだけど」

体の痛みと心的疲労も重なってユキトは中々寝付けなかった。

まあこっちの心的疲労なんてリーダーのハルヒロに比べれば微々たるものだろうが、でも、やっぱり負けるというのは悔しいものだ。

最近気が付いたが、自分はどうかやらかなりの負けず嫌いらしい。前にレンジ達の姿を見た時もそうだ。

ランタにはああ言ったものの、本当はかなり悔しかった。

「まあ、今は負けてるけどいつか追いつけばいいし」

その悔しさ故か訓練にも身が入り、戦闘面ではようやく訓練の成果が出始めている。

というか、調子は悪くないと思う。

——連携以外はだが。

義勇兵宿舎の廊下でため息をつきながら月を見上げる。

相変わらず不気味な雰囲気の良い月だった。

見ていると憂鬱な気分が増してくる気さえする。

その時、部屋に戻ろうとしているユメと鉢合わせになった。

湯上りなのか、下ろした髪の毛が少し湿っている。

髪型が違うだけで随分雰囲気も変わるものだと思う見とれてしまった。

「あ、ユメ。えっとシホルは？」

「部屋」

「あ、そう。あの少し話があるんだけど」

髪を拭きながら、無言で立ち止まるユメに思わず息を飲んだ。

ユメといえぱパーティの中でも独特の空気を持ち、どんな時でも雰囲気をよくしてくれる明るい性格だ。

それが今は黙ってこつちを見ているだけ。

ユメとの間でこんな気まずい空気は初めてかもしれない。

「あの、ごめん」

黙っていても仕方ないと意を決して頭を下げた。

「なんでユキくんが謝るん？ それともユメに謝るような事したん？」

「……いや、その、メリイを何も言わずにパーティに加えたし」

あの状況ではどうあつても必要な事だった。

そこは譲れない。

でも、二人に何も言わずに決めてしまった事だけは、少し後悔していた。

「それやったら誰が悪いん？ ユキくんなん？」

「……うん。僕が悪いと思う」

勿論、一緒に決めたハルヒロ達も責任はある。

けど、少なくとも二人の事を考えながら話そうとも提案しなかつた時点で自分は間違
いなく悪いだろう。

「ちがうやろ……ちがうやんかあ」

ユメは泣いていた。

髪を拭いていた布で顔を覆い、声を殺して泣いている。

その姿に自分でも驚くぐらいに動揺してしまった。

「ユ、ユメ!?! あ、あの、な、なんで、ご、ごめん」

「何も分かつてないやんかあ。そんなんやから、そんなんやから、ユメ達こんな風になつてしまったんやろ」

何にも分かつていない——確かにそうかもしれない。

結局、ユメ達の事など何も分かつていない。

それじゃ駄目だと思つて話そうとしても、こうして泣かせるばかりで何もできない。

でも——

「……ごめん、ユメ。僕は確かに何も分かつてないかもしれない。でも、みんなの事を仲間だと思つてる。だから——」

「そのみんなやんか」

「えっ」

「こんな事になつたんはみんなのせいやろ。ユキくんやハルくん、モグゾーやランタのせいやなくて、ユメやシホルのせいでもあるやんか。皆で、マナトくん入れて、七人で仲間やったやんか。そうやなかつたん? ユメ、間違つてる?」

「……間違つてないよ」

ユメの言う事は正しい。

本当に何も分かつてなかった。

いや、見えていなかったというのが正しい。

あの日の悪夢。

何もできなかった自分。

死んでしまったマナト。

その衝撃が大きすぎて、自分でも気がつかない内に視野が狭くなっていたのかもしれない。

七人で仲間、それが一番大切な事なのに。

マナトが居なくなつて、アナスタシアとの出会いもあつて、訓練ばかりにかまけていた。

その間ユメやシホルは何を考えていたのだろうか？

酷い疎外感を覚えたのではないだろうか？

寂しかったのではないだろうか？

そんな事にも気がつかず、仲間の為と言いながら肝心の二人を放置して好き勝手にやっていたのだ。

本当、何も分かっていないと言われても反論の余地もない。

強い罪悪感に襲われながらも、思わず涙を流すユメを抱きしめた。

「ごめんね、ユメ。本当にユメの言う通りだ。僕は何も……分かってなかったよ」

「うう、うう」

ユメを抱きしめ、頭を撫でるとユメも僕の背中に手を回してきた。

どのくらいそうしていたの分からない。

気がつけばユメは泣きやんでおり、頭も冷静になっていた。

どうしよう。

思わず抱きしめてしまったけど、すぐに離れるべきか。

でも、ユメが離してくれないし、柔らかいし、いい匂いも――

「ユキくん」

「ひあい」

「ふえ？」

動揺して思わず変な声が出てしまった。

「い、いや、何でもないよ。それで？」

「うん、ユメな、メリイちゃんの事とか色々頑張ってみる」

「それは願ったりというか、助かるけど」

「うん。でも、少し不安なんよ。メリイちゃん、ユメの事嫌いやろうし。前にも目があつた時、すっごい冷たい目で見られてなあ」

それはユメだけじゃないと思う。

何度か話しかけたが、同じように冷たい視線を返されるだけだった。

「ユメが嫌われてるなんて事は絶対にないよ。みんなもそう思ってる」
それは絶対だ。

皆の顔を見ていれば良く分かる。

どんな時でもパーティーの雰囲気が暗くなりすぎないのは、間違いなくユメのお陰だ。

「でも、ランタとかいっつもユメの事、ちっぱいとか馬鹿にしてくるし」

「あれはランタの冗談というか、コミュニケーションみたいなもので……ユメは可愛いよ、胸もランタが言うほどというか、十分すぎるというか」

そう考えると今の状態と合わせておかしな気分になってくる。

気持ちを落ち着けようと、深呼吸しながらユメに悟られないように視線を逸らした。

「僕はいつもユメに助けられてる、今だってそうだよ。……それにさ、マナトも言つてたろ、いざという時、頼りになるのはユメだって」

「ユキくん、ありがとうな。もう少しこのままギョツとしてくれるかな？　なんかすっごい落ち着くんよ」

「えっ、う、うん」

笑顔のユメに思わず顔が赤くなってしまふ。

いかん、ますます変な気分になってくる。

どうにかしないと色々不味いと考えたその時、気配を感じた僕は横に向くとそこには顔を赤くしたシホルが立っていた。

「あ」

「えっと、あの、あの、ごめんなさい！」

パニックに陥ったシホルはそのまま部屋まで走り去ってしまった。

見かけによらず素早い、言い訳する暇もなかった。

「えっと、同じ部屋やし、後でシホルと話しとくな」

「うん。そうしてくれる？」

抱き合っていたユメとの抱擁を解き、照れ隠しを誤魔化すために頭を掻いた。

ある意味助かった。

あのままでは非常に不味い事になっていただろう。

とにかくユメと話せただけでも十分だ。

今夜は疲れたしシホルとの話はまた今度にしよう。

そのままユメと別れて部屋に戻ろうとするが、そこでもう一つの懸念事項がある事に

気が付いた。

アナスタシアの事を言うべきだろうか？

仲間である以上、できればもう隠し事はしたくない。

でも、ユメたちを危険な目に合わせる事もしたくない。

しかしこれからアナスタシアとの事をずっと隠し通せるとは思えなかった。

ならずすべてではないがアナスタシアの事だけでも話しておいた方がいいかもしれない。

反ギルドとかの物騒な話はハルヒロ達と話し合つて決めれば良い。

「あのさ、ユメ。実はもう一つユメ達に話したい事が——」

その時、頭に突然、痛みが走った。

「ぐっ」

「ユキくん？　だ、大丈夫？」

「う、うん。僕は平気で、ぐうう」

あまりの激痛に思わず頭を押さえ蹲ってしまった。

「ユキく——ッ!？」

気遣うようにしゃがみ込んだユメが驚いたようにユキトの顔を見つめている。

「……眼が紅い」

「え？　ぐっ!!」

結局、それ以上ユメと話しをすることができず、痛みが去るのを待つように廊下でジツと蹲っていた。

◇

そこは何の変哲もない酒場。寂れてもいないが、人もそう多くはない。

それでも喧噪が止まないその場所でフードを被った人物が一人テーブルで酒を飲んでいた。

印象としてだけで言うなら不気味の一言に尽きる。

しかもただ不気味なだけではない。

どこか不穏な気配がある。

他の皆もそれに気が付いているのか、そこだけポツカリと穴が開いたように誰も近づく事はない。

それはそうだろう。

素顔も見えず、どんな奴かも分からないのだから。

そこに一人の男が酒場に足を踏み入れてくる。

恰好からして商人の類だろう。

その商人風の男はフードの人物と背中合わせになるように座ると酒を注文した。

誰しもが避けていた場所の近くに座った商人をその場にいた全員が注目する。

しかし一向に変化がないことを知ると自然と各々の会話に集中し始め、最後には誰も見なくなつた。

その瞬間を見計らつたように、商人が誰にも聞こえないようポツリと呟く。

「……仕事だ」

商人は折り畳んだ紙を後ろ手で差し出すと、フードの人物が素早く受け取る。

二人はそれ以上、何も言わずただ目の前にある酒を煽つていく。

そして何時しか二人の姿は誰も気が付かない内に消えさり、空になつたジョッキだけがテーブルの上に残されていた。

第九話 過去

聞こえてくる小鳥の鳴き声にユキトはゆっくりと目を開ける。

体を起こしながら僅かに残る軽い痛み顔に顔を顰めた。

「……なんだこれ」

軽い頭痛とまるで二日酔いにもなったような気持ち悪さがあった。

何でこんなに気分が悪いのか分からない。

昨日の夜に何をしていたのか思い出そうと思考を巡らせていると、起きている事に気が付いたハルヒロが声を掛けてきた。

「ユキト、目が覚めたんだな！」

「え、目が覚めた？」

「覚えてないのか？ 昨日の夜、ユメがユキトが倒れたって部屋に駆け込んできたんだ」

そう言われて思い出した。

ユメと話をしていたら、急に激しい頭痛に襲われたのだ。

「で、何があったんだよ？」

「少し心配した」

ハルヒロの後ろに立っていたモグゾーとランタも昨夜の件でたたき起こされたらしい。

疲れているところ悪い事をしてしまった。

「えつと実はさ」

ユメと抱き合った事は伏せ、掻い摘んで昨夜の件を話すと全員が微妙な顔で考えこんだ。

「確かにずっと黙っているのは無理だよね」

「けどよ、ユメ達に全部話せないだろ」

「アナスタシア師匠の事を話すのは仕方ないと思うけど、先に許可をもらった方が良
いと思う。というかその頭痛ってさ」

「うん」

昨夜の頭痛に関しては全員に心当たりがある。

初めてアナスタシアと話した時、全員が保険と称して彼女の血を飲まされた事があつた。

これは想像だがアレはユキト達が他の人間に対して余計な事を言わないようにする為の細工だったのではないだろうか。

「で、頭痛は？」

「少し痛むけど、動けないほどじゃないよ。大丈夫」

「そつか。とにかくさ、話すかどうかは後で師匠に相談しよう」

もしも推測通りなら、アナスタシアの件を話そうとする度にこんな目に合う事になる。

そういう事態はできれば避けたい。

ダルさの残る体に鞭打って狩りに出かける準備を整えて部屋から出ると待っていたらしいユメが飛びついてきた。

「ユキくん、大丈夫!? どこも痛くないん!？」

ユメが無事を確かめるようにユキトの体をペタペタと触ってくる。

別に怪我をした訳ではないのだが、心配してくれたユメの気持ちは嬉しかった。

「僕は大丈夫、心配かけてごめんね」

「眼の色も元通り見たいやし、よかったあ」

「え、眼の色？」

「うん、昨日の夜、ユキくんが蹲った時な、眼がお月さまみたいに紅くなってたんよ」

眼が紅かった？

アナスタシアも血のように紅い瞳を持っている。

やはり何か関係があると考えて間違いなさそうだ。

「あ、あの！ ユキトくん、昨日はごめんなさい！ 私、てつきりその、そういう関係だと、事情はユメから聞いたから……」

「あん、関係とか何の話だ、ユキト？」

ランタ達にユメと抱き合っていた事を知られると死ぬほど面倒な事になりそうだ。

「ここは誤魔化すのがベストだろう。」

「別に大したことじゃないよ」

「大した事じゃないんだったら言えるだろうが！ 何があつたんだ？ 吐け！」

ランタが僕の首に腕を回して締め付けてくる。

「だ、だから……」

「ランタ、ユキくんいじめたら駄目やろ！ 病み上がりなんやし！ ただユキくんが

ユメをギユツとしてくれたとこ、シホルに見られてん」

「「ハア!!」」

シホルを除いた全員が驚いて僕とユメを交互に見てきた。

こういう反応になるから黙っていたのだが。

「どういう事だ、ユキトオオ!!」

「ち、違う、や、やましい事は何もしてない」

まあ、やましい気分にはなりかけたけど。

「うん。ユキくん、落ち込んでたユメの事励まそうとしてギョツとしてくれたんよ」

「それだけ?」

「うん、それだけ」

ユメがフオローしてくれたおかげか、ランタは渋々僕を解放してくれた。

「ハア、助かった。そんな事よりユメとシホル、メリイは……まあ無理かもだけど、とりあえず話があるんだ。ね、ハルヒロ」

「えっ!? あ、ああ、ちよつとね。今日狩りから帰ったら、皆で食事に行きたいんだけど」

ユメとシホルは戸惑ったように互いに顔を見合わせるとすぐに頷いてくれた。

心なしか嬉しそうに見えるのは前みたい皆で過ごす事が出来るからだろう。

「分かった。後、ユメからも一つ。メリイちゃんの事、仲良くなれるように頑張ってみる。シホルも協力してくれるって」

「……全然、自信ないけど」

「メリイと仲良くとか無理だろ。あいつにその気は全くないみたいだし、他の誰かが

神官になった方がいいんじゃないの？」

ランタの言い分にも一理ある。

確かにユキトか、もしくはハルヒロが神官になるという選択もありだ。

でもそれはあくまでも最終手段にすべき。

まずはメリイと打ち解ける努力をしてからだ。

「ランタの言いたい事は分かるけど、それじゃ駄目だと思う。昨日、ユメと話して改めて気が付いた。僕とハルヒロ、モグゾー、ランタ、シホル、ユメ、そしてマナト、七人で仲間だったって。僕等は今みんな仲間だろ？」

「当たり前だろ、そんなの」

「うん。でも今はメリイもその中に含まれてる。メリイも含めて仲間なんだよ。僕もそうだけど皆、マナトとは違うってどこかでメリイとマナトを比べてた。でもそれじゃ駄目だ。だから今度はきちんと一から始めたい」

「……だよな。メリイは魔法でみんなの怪我を治療するだけの道具じゃないもんな。いきなりパーティーに加わって、俺達の事情だけ押し付けて、気に入らないから追い出すとか虫のいい話だ」

「そやな。ユメたちもメリイちゃんに冷たかったかもしれないなあ」

「……うん。実は凄くいい人かも。ツンデレ、みたいな」

皆の話を黙って聞いていたランタはきまりが悪そうにそっぽを向いた。

「けつ、あの冷血女に関しては何よ！　けど、まあ、あんな女でも居ねーよりはマシだからな。ツンデレである事を祈るしか……でも、待てよ。あの女がツンデレだったら、当然俺にデレる訳だよな！　悪くねえな」

「……ランタくんにはデレないと思う」

「うっせーよ、モグゾー！」

相変わらずランタのポジティブさには頭が下がる。

でもモグゾーの言う通りメリイがランタにデレる事はまずない。

それくらいは分かる。

とにかくやる事が決まったならば後はいつも通りに進んでいくだけだ。

「じゃ、今日も行きますか」

「「おう！」」

「「うん！」」

ハルヒコの掛け声と共に全員が声を上げると、今日の狩りへ向かう為、義勇兵宿舎を後にする。

その表情は昨日までとは全く違う、晴々としたものだった。



雨降って地固まる。

仲違いに近い状態だったユメやシホルと和解し、パーティの結束は前より固まったと思う。

しかしだから全部上手くいくなんて都合のよい事は無く、メリイとの関係は依然何も変わらないまま。

ユメやシホル達が何度か話しかけても淡々と返事を返すのみで打ち解ける気配すらない。

それでも戦闘自体は実に順調だった。

いつも通りのダムローで遭遇したのは五匹のゴ布林。

今までなら苦戦する数だが、それほど驚異に感じていないのはアナスタシアとの訓練のおかげか。

「モグゾーは二匹、ランタ、ユキト、一匹ずつ頼む！俺とユメで一匹やるからシホル

とメリイは魔法で援護！」

「うん」

「やってやらあー！」

「了解」

ハルヒロの指示に従い三人が前に出た。

モグゾーが一人で二匹を相手にするのは無茶にも感じられる。

だがこの中で最も優れた盾役は間違いないモグゾーだ。

それでも二匹を同時に相手にするのは厳しい筈。

なら今やるべき事は一刻も早くゴブリンを片付けてモグゾーの援護に回る事だ。

「お前の相手は僕だ」

剣を持つゴブリンに片手で握ったショートソードを突きつけて対峙する。

もう何度も戦ってきた相手だから、油断さえしなければ十分いける。

ゴブリンが振り抜いてきた剣の軌跡を見極め、紙一重で回避。

そしてゴブリンの足に蹴りを入れバランスを崩す。

間を置かず今度はこちらから一步踏み込んで斬りつけた。

「ハァー！」

袈裟懸けの一太刀がゴブリンの肩を深く斬り裂き、大きなダメージを与えた。

それでもゴブリンは一瞬動きを止めただけで再び剣を叩きつけてくる。

決して傷は浅くない。

それでも攻撃してくるゴブリンのタフさは計算済みだ。

こちらに向けて振りぬかれた剣速も毎晩相對しているアナスタシアには到底及ばない。

「それは読んでた！」

敵の剣を見切っていたユキトは右足を軸にして体を半回転させ剣先を避ける。

そして下段に構えていた剣を振り上げた。

腹の肉を斬る感触が手に伝わりと同時に飛び退くとシホルの放った魔法の光弾がゴブリンの顎に直撃した。

「ありがとう、シホル！」

援護してくれたシホルに礼を言いながらも僕は動きを止めない。

魔法の光弾によって仰け反ったゴブリンの剣にショートソードを叩きつけて、弾き飛ばす。

その時、弾いた衝撃で欠けた剣の破片が眉間を掠めて傷を作るがユキトはそれに意を返さない。

そのままゴブリンの顎目掛けてショートソードを突き上げると、あっさり頭部まで貫通した。

警戒しながらショートソードを引き抜くとゴ布林はそのまま地面に倒れ込んだ。

「まず一匹！」

一匹仕留めたのを確認すると戦うモグゾーの方へ前傾姿勢で一気に駆け出した。

「ふもおお！」

どこか気の抜けるようなその掛け声からは想像も出来ない一突きが相対していたゴブリンの剣を弾き、その衝撃によって大きく隙が生じる。

そこを狙って駆け込んだユキトの剣がモグゾーに斬りかかろうとしていたもう一匹のゴブリンの背中を切り裂いた。

「モグゾー！」

「うん！」

モグゾーは突き出したバスタードソードを手元で捻り、突きから斬り上げに変化させるとゴブリンの顔に一太刀入れる。

深々と顔面を扶られ絶命したゴブリンが倒れた瞬間、ユキトが背中を切られたもう一匹のゴブリンをモグゾーの方へ押し出した。

押し出されたゴブリンの前には剣を構えたモグゾーが待ち構えている。

「どうもー!!」

上段から振り下ろされた渾身のどうも斬が綺麗に決まり、ゴブリンの頭部がぐしゃりと音を立てながら押しつぶされた。

皆からも言われていたがモグゾーは実に器用に剣を扱う。

あの巨漢から繰り出されるパワーと合わせれば、ゴブリン程度では捌く事も出来ないだろう。

敵からすれば空から岩が降ってくるようなもので食らう側からすればこれほど恐ろしいものはない。

「これで二匹ー！」

後、残りは二匹。

ユキトとモグゾーの方はこのままいけば確実に仕留められる。

残りはユメと切り結び、もう一匹はランタが抑えている。

「ういやー！」

ユメの剣鉞がゴブリンの剣を弾き、さらに返す刀で腕を浅く斬る。

さらに体をゴブリンの側面に潜り込ませ腹を斬った。

致命傷ではないが上手い。

あれでゴブリンの動きは鈍る。

やっぱりユメは弓よりも剣の方に才能があるのかもしれない。

その隙に忍び寄ったハルヒロのダガーがゴブリンの喉を裂き、すれ違いざまに首の後ろに刃を滑り込ませた。刃が突き刺さったゴブリンはすぐに動きを止め、絶命した。

「よし、これで！ ランタ！」

「分つてらあ！」

ランタはゴブリンに蹴りを入れながら暗黒騎士特有の動きで翻弄しつつ距離を取る。暗黒騎士の剣技、即ち暗黒闘法は敵の間合いの外から攻撃を加える一撃離脱ヒット&アウェイを旨とした戦術を基本にする。

その割にランタは無茶な行動も多いのだが、アナスタシアの訓練のお陰か最近は大分動きに無駄がなくなっているように見える。

「憤慨突!!」

ゴブリンの間合いの外から一足飛びで飛び込んだランタの突きがゴブリンの右肩を貫通する。

吹き出る鮮血を物ともせず、ランタは傷を扶るようにロングソードをグリグリと動かすとゴブリンは痛みでうめき声を上げた。

そして回り込んでいたハルヒロがゴブリンの喉元に深々とダガーを叩き込むとランタと同時に飛びのく。

痺撃していたゴブリンは二、三步後ずさると背中から倒れ込んだ。

「ヨツシャアア!! 流石俺だぜ！」

ランタは相変わらずだけど、確かに今のは良かったと思う。

連携にぎこちなさはあるけど、戦闘はスムーズに進められた。

ようやく訓練の成果が出始めてきたのかもしれない。

「ほええ、何かユキくん達強くなってるない？」

「うん、昨日より動きがいいような？」

流石にずつと一緒に戦ってきたユメとシホルはこっちの動きに違和感を覚えたようだ。

すぐにでも説明してあげたいが、この場所でまたあの頭痛に襲われるのは洒落にならない。

「そやなあ、つてユキくん血、額から血が出とるよ!!」

「ユキトくん、大丈夫!」

「ああ、僕は大丈夫。大したことないよ」

血が流れて目に入らないように拭いながら心配そうな二人に大したことないとアピールするが、そこにメリイが速足で僕の方へ近づいてきた。

「座って」

「えっ」

「治療するから早く座って」

有無も言わさず座らせられてしまった。

「光よ、ルミアリスの加護の下に——癒^{キュ}し手^ア」

メリイは僕の怪我の具合を確認すると祝詞を唱え、指先から発せられる光によつて額の傷を癒してくれた。

先ほどハルヒロも言っていた事だが、こういう時メリイは手を抜かずキツチリと癒してくれる。

ただその事から会話のきっかけを掴もうとしていたハルヒロは完璧に轟沈していたので、ユキトはその事について何も聞かない事にした。

「治ったわ」

傷を治すとメリイはそそくさと離れようとする。そんなメリイに僕は声を掛けた。

「メリイ」

「……何」

メリイは相変わらず身震いするくらいに冷たい視線を向けてくる。かなりおつかないけど、ここで怯んでいたら前と何も変わらない。

言うべき事はキツチリ言わないと。

覚悟を決めると口を開いた。

「ありがとう」

「ッ!? ……私は自分の仕事をしただけ」

「うん。でもちゃんと伝えておかないと、仲間だからね」

メリイは少し怯んだような表情を浮かべると、そのまま何も言わずに背を向けてしまった。

この日は何度か遭遇したゴブリンを何体か仕留める事ができ、それなりの稼ぎを得る事ができた。

でも肝心のメリイとは何の進展なし。

話どころかあれ以来、誰とも目を合わせる事すらしてくれなくなってしまった。



狩りを終えたユキトとハルヒロの二人は食事の前に昨日の頭痛の事を聞く為、アナスタシアの元へ足を運んでいた。

ランタとモグゾーは先に食事を済ませユメとシホルをシエリーの酒場まで案内してもらっている。

「師匠、居るかな?」

「この時間なら飲んでるんじゃない?」

アナスタシアは昼間ギルドからの依頼などをこなし、夕刻からは酒場『ルミナス』で

飲んでゐる事が多い。

たまに他の酒場から歌ってくれと頼まれる事もあり『ルミナス』にいない場合もあるようだが、その時は夜の訓練まで待つしかないだろう。

「何て言うかな」

「ユメ達には話すなつて言われてたしね。あんまりいい顔はしなないと思うけど……」
「ここで迷つていても仕方ない。」

どの道、頭痛に関しては聞かなくてはならないのだ。

二人は意を決して『ルミナス』の中に足を踏み入れると相変わらずの雰囲気思わず立ちすくんでしまった。

「何度来ても場違いだよね、僕達」

「うん。さつさと行こう」

客でもないのにすつかり顔馴染みになったマスターにアナスタシアの事を聞くと、いつもの奥にある席で飲んでゐると教えてくれた。

マスターにお礼を言うのと個室のようになつてゐる奥の席に向かう。

そこではグラスを片手に酒を飲んでゐるアナスタシアの姿が見えた。

「そろそろ来ると思つていたぞ。頭痛の件だろうか？」

「分るんですか？」

「当たり前だろう。それを仕掛けたのは私だぞ」

ニヤリと笑いながらグラスを傾けるアナスタシアにハルヒロと思わず顔を見合わせ
てしまう。

「じゃあアレってやつぱり……」

「ああ、私に関する事やあの時話した事を許可なく話せないように仕掛けを施してお
いた。無視して話そうとすれば昨夜体験した事と同じ現象が起きる」

やはり余計な事を言わなかつたのは正解だったらしい。

「仕掛けってあの時飲んだ血ですよね？」

「そうだ。お前達にも解りやすく言うアレは一種のエレメンタルみたいなものだ」

「エレメンタルって、あの血が？」

「そうだ。私の血は特殊なエレメンタルのようなもので——まあ要するにお前達四
人には私の糸がついていると思えばいい」

彼女の血については良く分からないが、もしかすると彼女の異常ともいえる力はそれ
が関係しているのかもしれない。

とにかくその糸から四人のうち誰かが話をしそうになったのを察したという事だろ
う。

昨晚の事をアナスタシアに説明すると納得したように頷いた。

「そういう事か。……まあ良い機会か。確かに私に関する説明は必要かもしれない。訓練の時にでも連れて来い、上手く言つてやる。仕事に関してもな」

「いいんですか?」

「私もずっと隠し通せるとは思っていない。危険から身を守る為にも知識くらいは必要だろう。もちろんお前達同様に余計な者たちに吹聴できないよう細工はさせてもらうが」

「分りました。えつとユメ達にも訓練を?」

「本人達が望めばな」

何というか拍子抜けな気がする。

正直、仕事に関しては話すなど釘を刺されると思っていた。

それがこうもあっさり認められるとは。何か他に理由でもあるのだろうか?

酒を飲むアナスタシアの様子からは何も読み取る事ができない。

でも心なしか若干いつもより緊張しているようにも見える。

「どうした?」

「あ、いや、その、師匠、また後で」

「ああ」

結局、深く聞く事も出来ず僕達はルミナスを後にした。

◇

アナスタシアとの話を終えると二人で軽く食事を済ませ、待ち合わせ場所であるシエリーの酒場に向かった。

入り口で合流し、皆揃って中へと入る。

「ふえ、賑やかやなあ。あ、ユメお酒は飲みたくないからジューズで」

「私もお酒は……でも凄い賑やか」

ユメとシホルはシエリーの酒場を珍しそうにしていた。

こういった酒場は初めて入るようでユメは周りをキョロキョロ見渡したり、シホルは少し怯えたようにユメの服を掴んでいる。

「二人とも珍しいのも分かるけど早く座ろう」

「うん」

二人といつも通り奥にある端っこの席に座り、それぞれ飲料を注文するとハルヒロがため息をついた。

「やっぱりメリイは簡単にはいかないか」

「ユメとシホルは話しかけてるんやけど、ほとんどなしのすべてやったしなあ」

「それを言うならなしのついでだよ、ユメ」

「もう『コレ』しかないんじゃないね」

ランタが指で首を切る仕草をした。

これがランタ最近のお気に入りに入りらしい。

「そんな訳にはいかないよ。それにやっぱりメリイは無理してる気がする」

今日、怪我を治してくれた時もやはり前見た時のように何か怯えているように見えたのだ。

「そういえば僕の時も痛がったら心配そうに『ごめんなさい』って謝ってた」

「あの女がそんな殊勝な事を言うかよ」

「本当に言ってたよ」

このメンバーの中で最もメリイのお世話になっっているのはユキトとモグゾーだ。

その分他のメンバーよりはメリイの事が見えているのかもしれない。

「モグゾー、ユキト、メリイの事じゃないんだけど、今日の戦闘見て思ったんだけど

今度安物でもいいから兜買おうよ。俺も少し出すし」

「えっ、でもハルヒロくんが出す事無いよ」

「良いんだよ、二人の装備が整ってないと皆、困るし。これは皆の為でもあるって事」
やっぱりハルヒロは周りをよく見てる思う。

「じゃあ、僕よりモグゾーの装備を優先した方がいいよ。金属製の防具は高いから安

物でも二人分はきついし。僕は盾役と言っても、正面から敵とぶつかる事は少ないしね」

ユキトは基本的に敵の攻撃をまともに受けず、捌く事に意識を向けている。

反面モグゾーは逆に正面から敵とぶつかる事も多く、怪我の頻度で言えばユキトよりもさらに上だ。

だからまずはモグゾーの装備を整える事を優先した方がいい。

「そういう事なら私も出す。そんなにたくさんは出せないけど」

「ユメも。皆でお買い物やな。可愛いの選ぼうな」

皆で買い物の事で話をしていると、モグゾーが何かに気がついたように店の奥の方を見た。

「あれってメリイさん？」

「本当だ。誰かと話してる」

メリイが店のカウンターのさらに奥で優しげな男性と話をしていた。

「アレってオリオンのシノハラさんだ」

「マジだ。オリオンって結構有名な『クラン』だろ。確かシノハラってそのクランのマスターだよな？ ハルヒロ、お前知り合いなのかよ」

「前に少しだけ話した事があるんだ」

そこで話についていけていないユメが僕の服を引っ張ってきた。

「なあ、ユキくん、『クラン』って何なん？」

「僕も詳しい訳じゃないけど、『クラン』っていうのは義勇兵達が何かの目的を達成する為に組むチームみたいなものかな」

基本的に義勇兵のパーティーは五人とか六人である。

これは神官の強化魔法である光プロテクションの護法の効果範囲が六人までという事が関係しているらしい。

もちろん僕達のような例外もあるし、あくまでも基本での事。

光プロテクションの護法については例外なりに方法もあるようだ。

とにかくパーティーだけでは対処できない強大な敵や探索できない危険な場所だって存在している。

そんな危険を複数のパーティーで連携を組み、対処、結束しようという事で作られた枠組みが『クラン』ということらしい。

「名前の売れてるクランも幾つかあつてさ、オリオンもその一つなんだ。周りにもオリオンのシンボル、えっとマントにXみたいな七つの星がついてる、あれを付けてる人達はみんなオリオンの所属らしい」

「ほえ。結構おるなあ」

「うん。じゃあここにも他のクランの人達もいるの?」

「たぶんね」

それにしてもメリイとはどういう関係なのだろうか?

メリイは俯いているだけで、話しているのは基本シノハラだ。

見ている限りそれほど親しいようには見えない。

結局メリイは申し訳なさそうに頭を下げ、シノハラは気を遣うように苦笑しながら二階へと上がっていった。

「あの二人、出来てるな」

ビール片手にランタが嫌らしい笑みを浮かべる。

「いや、そんな雰囲気欠片もなかったよね?」

「下世話な想像はよせよ」

「お前らは想像力つてのが欠けてんだよ、ユキト、ハルヒロ!」

ランタの言う事は無視し、メリイの方に視線を向けた。

やっぱり寂しそうに見えるのは気のせいなのだろうか。

でもこれは良い機会かもしれない。

シノハラならメリイの事を何か知っている可能性はある。

あまり人の過去を詮索したくはないが、このままではメリイとはいつまでも進展がな

いまだだ。

ハルヒロも同じように考えていたのか、「ちよつと、挨拶してくる」と席を立つた。

「僕も行ってくる」

「ちよ、待てよ」

残つていても仕方ないと思つたのか、それともやはりメリイの事が気になつたのか結局、全員が席を立ちハルヒロに着いて二階へと上がつていた。

「おや、久しぶりですね、ハルヒロくん。後ろの方々は君の仲間ですか？」

「ええ。お久しぶりです、シノハラさん」

二階に上がるとすぐにこちらに気が付いたシノハラが優し気な笑みを浮かべて出迎えてくれた。

ハヤシと呼ばれた仲間がすぐに席を作ってくれてシノハラと一緒に席に着く。

他のオリオンのメンバーはこちらには目もくれず、それぞれ楽しそうに談笑している。

何というか行儀が良いというか、雰囲気が良いというか。

荒くれものも多い義勇兵の中でもオリオンのメンバーは一線を画している。

「それでどうです？　ここでの生活には慣れましたか？」

「ええ、色々ありましたけど……何とかやれてます」

「そうですね……それから、お仲間の事は残念でした」

シノハラは佇まいを正し、僅かに俯く。

「あの、何で、その事を？」

「……新兵ルーキの事はそれなりに気になりますし、耳にも入ってきますから。……私にも経験があるので仲間を失う辛さは分かるつもりです。どうか今いる仲間を大切にしてください」

「はい。それでその、シノハラさん今日はお願ひがあるんです。……メリイが俺達のパーティに入る事はご存知ですよ？ もしも知っているなら俺達にメリイの事を教えてもらえませんか？」

「こういうのは本人から聞くのが筋だという事ぐらひは分かっています。でも、多分僕達が聞いても教えてくれたりはしないでしょうから」

下手に僕たちが踏み込めば、メリイはパーティから抜けるとか言いかねない。

それでは駄目だ。

「それは私よりハヤシの方が適任でしょうね。彼は以前、彼女と同じパーティだったんですから」

「えっ」

隣のテーブルについていたハヤシが立ち上がると僕達の方へ頭を下げた。



メリイの話を聞き終えた僕たちは元の席に戻り、沈黙のままテーブル上のジョッキを見つめている。

「くそ」

いつもうるさいくらいのランタでさえ声に力がない。

それだけメリイの過去はシヨックだったのだろう。

彼女の過去はあまりに自分達と似ている部分があった。

メリイは昔は今のような冷たい印象ではなかった。

明るく、自分の容姿や鼻にかけない、僅かな傷でもすばやく治療し、時には神官の護身法を持って前に出る。

そんな仲間思いの少女だったという。

実質彼女はパーティ内で三人分の働きをしていた。

でもハヤシ達はそれ気がついていなかった。

メリイの奮闘のお陰で進めていたのだと、自分達は驕っていたのだとハヤシは辛そうに語っていた。

何も気がつかないまま特に危機に陥ることもなく団章を手に入れた彼らが向かったのが、オルタナの北西八キロ地点にあるサイリン鉱山と呼ばれている場所だった。

どうやらその頃、他のパーティもサイリン鉱山の探索を行っていたらしく、ハヤシ達は負けたくないと躍起になって奥へ奥へ進んでいたという。

そのサイリン鉱山に生息しているコボルトと呼ばれる種族にも特に苦戦することはなかった。

しかし第五層まで降りるのにも慣れた頃にハヤシ達はそいつと出会ってしまった。

黒白斑の被毛を持ち、何人もの義勇兵を屠ってきたもの。

『死の斑』、通称デッドスポット。

少数とはいえ手下を連れ、鉱山中を巡っては遭遇した義勇兵を狩るそんな危険な存在。

出会えば逃げろと忠告されるくらいには義勇兵の間で噂になっていたし、無論、ハヤシたちも知っていた。

でも彼らは逃げなかった。

楽観し、遭遇したデッドスポットに立ち向かった。

手下を倒し、残るはデッドスポットのみ。

でも奴は怯むどころか怒り狂い、何度傷つけても倒せなかった。そうして追い込まれ、最後にメリイの魔法力が尽きた。

魔法とは無尽蔵に使用できるものではない。

使えば使う分だけ魔法力と呼ばれる精神の力を費やす。

回復させるには時間を置くか、瞑想するしかない。

メリイは手下と戦っている時点でも相当疲弊していたのだろう。

途中で二人の仲間が力尽き、最後の一人が命がけてハヤシとメリイを逃がしてくれたという。

その時のメリイの泣き顔は今でも忘れられないとハヤシは自嘲していた。

それからハヤシはオリオンに加わり、メリイは誘われるまま他のパーティーを転々としていった。

ハヤシもメリイの悪い噂を聞き、何度か話した事があったが「大丈夫」としか答えなかつたそうだ。

「……似てるよな、俺達に」

「うん」

メリイはマナトを同じだ。

仲間を守ろうと些細な傷さえ治癒してくれた。

でも結果として肝心な時に魔法が使えない事態に陥った。

そして大切な仲間を失ってしまったのだ。

だから彼女は大きな負傷以外、極力魔法は使わずに温存するというやり方をしているのだろう。

「チツ、明日からあの女とどんな顔して会えばいいのかわかんねえ」

「ランタらしくないな。いつも通りでいいと思うよ。セクハラはどうかと思うけど」

「うっせーよ！ 一言多いんだよ！」

「ハイハイ。とにかくユキトが言ってた通りだよ。皆で一から始めようって決めたんだ。メリイの過去を知ったからこそ、俺達だからこそ、できる事から始めよう」

「うん」

「ユメもメリイちゃんと仲良くできるように頑張る！」

もう飲む気分ではなかったの、そのまま全員でシェリーの酒場を出ると今日最後に行くべき場所に向かった。

「ふえ、綺麗な人やなあ」

「うん、肌とか髪とか」

広場にはすでにアナスタシアが待っており、それを見たユメとシホルが思わず呟いた。

二人が思わず見惚れるのも無理はない。

明かりに照らされた彼女の髪がキラキラ反射し、その姿は実に絵になっているからだ。

見慣れているユキト達でさえ、息を飲むほどなのだから。

「来たか。お前達二人がユメとシホルだな。私はアナスタシア、そいつらの、まあ、戦いの師匠のようなものだな」

「戦いの師匠？」

「皆が強くなってたんは、シアさんのおかげやったんか」

「シアさんって……まあそれは後で、他にも説明しなくてはならない事があるんだが、その前に全員に言っておく事がある」

「えっ、言っておく事、ですか？」

今までの経緯を説明するのではないのだろうか？

ランタやモグゾーが訝しげにこちらを見てくるが、何も知らないから首を横に振るしかない。

それはハルヒロも同じだ。

嫌な予感を覚えながらも、皆がアナスタシアの方へ視線を向けると彼女は淡々と告げた。

「お前達の最初の仕事が決まった」

第十話 結束

人を寄せ付けない森の中にその屋敷は立っていた。

深い森に佇むその屋敷は長年この場所に建っていた風格を持ちながらも、全くくたびれておらず手入れが行き届いている。

それはこの場所に人が住んでいるという証明だった。

その屋敷の中心にある大きなパーティールーム。

そこでは男女の何人かが楽しそうに談笑し、傍には控えている給仕の姿が見える。

さらに奥では一人の大男が酒を傾けていた。

見かけは屋敷に住んでいるような高貴な生まれとは程遠い。

鍛え抜かれた筋肉と身につけた屈強な鎧。

そしてテーブルに立てかけてある身の丈にも達する大剣。

彼は明らかに戦いに身を置く、戦士そのものだった。

飲み干して空になったグラスに酒を注ぎ、再び口を付けると入口の扉が音を立て一人

の女性が部屋へと入ってきた。

「あら、いい物飲んでるじゃない？」

容姿は美女と称して間違いなく、燃えるような紅い髪と瞳に引きつけられる。

さらに目の引くスタイルの良さに、整った顔立ちは多くの異性を引きつける魅力を持つていた。

胸当てなど身につけた戦士風の格好をしているが、それでも軽装の部類に入り、腰には獲物と思われる剣らしきものを携えている。

彼女もまた荒事に身を浸す、戦士である事は一目瞭然だった。

「おう、アラディナか。お前も飲むか？ 結構な上物だ」

「ご相伴に預かりたい所だけど、遠慮しておくわ。それよりもジュンヤに仕事を任せたいでしょう」

「ああ。できりや断りたかったんだがな。クソツタレな貴族共からの依頼なんで、断りきれなかったんだよ。ま、あの程度の仕事、アイツなら問題ないだろ。それとも気になる事でもあんのか？」

「ええ。……アナスタシアが動いてるっていう情報があるのよ」

アラディナと呼ばれた女性は怒りを込めてその手を握りしめるとその名を口にすると事も汚らわしいとばかりに吐き捨てた。

「ほう、歌姫さんも仕事熱心な事だな。で、お前が出るかと？」

「ええ。万が一に備えてね」

「ま、気負うなよ。予定数はすでに確保してあるんだ。無理して事を大きくする必要はないからな」

分かっているとばかりに手を振るとアラデيناはそのまま部屋を後にした。

◇

メリイの過去を聞いた翌日。

何時も通りにダムローで狩りを行なった。

しかしその雰囲気は何時も通りとはとても言えたものではなく、どこか緊張感が漂っていた。

極力普通にしていたつもりの僕達でさえそう感じたのだ。

漂う重苦しい雰囲気の原因を知らないメリイは特にそう感じていたに違いない。
「メリイ、少し話があるんだけど」

どうにか今日も無事に狩りを終えダムローからオルタナに戻ってきた所でハルヒロが声をかける。

案の定、メリイは身構えるように自分の体を抱きしめた。

メリイは自分がいつも通りに振舞っているつもりかもしれないが、明らかに緊張しているのがまるわかりだった。

「何？ 早く済ませて」

その表情を見て何となくだがメリイが考えている事を察した。

多分、ここでパーティを抜けて欲しいと告げられる。

そんな風に考えているんだろう。

見当違いもいいところだ。

そんな事を望んじやない。

本当の仲間になりたい、ただそれだけだ。

「……僕達にはさ、マナトって言う仲間が居たんだよ。神官で、いつも僕達を引っ張ってくれるリーダーだった。でも、死んでしまった。いや、僕たちが死なせてしまったんだ」

マナトの事を口に乗せるのはやっばりきつい。

受け入れたつもりでも自分達の不甲斐なさや未熟さ、迂闊さを再確認するからだ。

でも、ここできちんと言葉にしなくてはメリイは僕達に心を開いてはくれないだろう。

「完璧主義者みたいなどころもあつたよ。俺達が怪我するとすぐに癒してくれたし、

皆を引っ張ってくれたリーダーで、時にはモグゾー達と盾役になってくれた事もあった」

「そやなあ、ユメ達みんなを褒めてくれたりしてたし」

「……うん、優しかった」

「困つてた僕を……仲間に誘ってくれた」

「うん。俺達はさ、元々あぶれ者の集まりなんだよ。マナトが誘ってくれなきや、そこから野垂れ死にしたかもしれない」

皆がマナトの話をする中でランタだけは何も言わずソツポを向いている。

でも、その表情はいつもと比べても暗く、強張っているように見えた。

彼なりに思うところがあるのだろう。

「そんな僕達を纏めようと実質マナトはリーダーを含めて三役こなしてた。皆、凄い奴だと思つてた。頼りになる奴だったんだ……いや、頼りにしすぎたんだと思う。それが当たり前で、誰もその負担に気が付かなかったんだ」

きつとマナトは凄い苦労をしたはずだ。

皆からのプレッシャーも感じていたと思う。

でもそれをおくびにも出さず自分の役目をこなしていた。

メリイは黙つて話を聞いている。

でも気が付いたと思う。

置かれている境遇が自分と似てる事に。

「マナトが居なくなつて、僕達皆が駄目だと思つたよ。僕は何があつても続けるつもりだったけど、今のパーティのままで続けるのは無理かなつて思つてた。でも仲間の一人が気づかせてくれたんだ。僕達全員で仲間なんだつて。当たり前的事だけどね。その中にはさ、メリイも含まれてる」

「あ」

「何で仲間になつたかじゃない。今、仲間であるかつて事が大事なんだ。メリイは僕達の仲間だ。僕はそう思つてる」

「私も……仲間だと思つてる」

意外にも一番最初に手を上げたのはシホルだった。

マナトに代わる新しい神官であるメリイに対して一番複雑な感情を抱いているのはシホルだと思つていた。

でも皆が思つている以上に彼女は芯が強いのかも知れない。

そしてそれに続くようにハルヒロやユメ達も手を上げた。

「もちろん、俺も」

「そやなあ、メリイちゃん可愛いしなあ」

「僕は当然仲間だと思ってるし、メリイさんが居ると心強いよ」

「俺もちよつとした傷で騒ぐのはな、反省してなくもねーよ。ま、仲間なんじゃねーの」

「ランタが反省するなんて、明日は雪でも降るかもな」

「茶化してんじゃねーよ！ 俺だつて反省することくらいあるっつーの！」

ハルヒロとランタの漫才を聞きながら、何も言わずにいるこちらを見ているメリイの方へ視線を向けた。

正直、メリイの昔話を聞いて何を話せばいいのか分からなかった。

そこでみんなで話し合つて、マナトや自分達の事を話す事に決めた。

メリイの過去を本人の許可なく聞いてしまった罪悪感もあつたけど、それ以上に自分達の事を知ってもらう方が重要だと思つたのだ。

「とりあえず、俺達からの話はそれだけ。それから俺達、ギルドの関係者から仕事を頼まれる事になったんだけど、メリイにも紹介したいから、時間取れないかな？ その後みんなで食事とかも行きたいし」

「わ、私は……いい。……まだ」

「そっか」

メリイは迷っているように俯いている。

まあ、いきなりすべて受け入れるという事はできないと思う。
それでも――

「それじゃ……また、明日」

小声ではあったけど、去り際にメリイは確かにそう呟いていた。

「一歩前進かな」

「うん」

ようやくパーティイとして一歩が踏み出せた実感に僕は安堵のため息を漏らした。

◇

今日も今日とて僕達はいつものようにダムローへ出かけている。

朝が来て、狩りに出かけ、帰ってきてから、夜はみんなで食事に出かける。

そして毎晩行われている訓練をこなし、宿舎に戻って休む。

それが最近の行動パターンだった。

しかしそれも少し変わってきていた。

アナスタシアへの面通しが済んだメリイが訓練や夜の食事に加わり、各々が極力お金を節約して装備の充実や新たなスキルの習得に励んでいる。

ユキトの装備は初期から着込んでいる鎖帷子の上に中古の軽装の鎧を買って着込んでいる。

ランタの革鎧よりも丈夫で動きやすいこの鎧は結構お気に入りだったりする。特に手甲が軽い上に頑丈で盾代わりにもできる優れものなので重宝していた。

武器のショートソードはかなりくたびれてるけど、研げばまだ十分に使える。

買い替えても良かったのだが、余計なお金はスキルやモグゾーの装備に回した方がいいというハルヒロの案に賛同し、節約する事にしたのだ。

そのモグゾーは皆からの寄付もあって、板金鎧、正式名称『甲冑』を揃えつつある。この甲冑という奴が馬鹿みたいに高い。

一式揃ったものを買おうとすれば、何十ゴールドと掛かる。

中古でそれぞれの部分を別個に買い、鍛冶屋でモグゾーに合わせてもらうのすら数十シルバーは下らない。

義勇兵見習いの懐には厳しい話だが、命を守る為には必要な事だ。・
他のみんなも装備を整え、新たなスキルを身につけている。

準備は着々と整いつつあった。

準備というものは入念に行っておくに越したことは無い。

ましてや命がけで稼いでいる義勇兵見習いは尚の事だ。

「よう、ゴ布林ンスレイヤー！」

「調子はどうだ？ ゴ布林ンスレイヤー！」

シェリーの酒場に足を踏み入れたユキト達に待っていたのは相変わらずの洗礼だった。

ゴ布林ンスレイヤーというのは名の通り、ゴ布林ばかりを狙う義勇兵につけられる蔑称だ。

ゴ布林を相手にする義勇兵は精々新米だけ。

その新米すら、いずれはゴ布林など見向きもしなくなる。

それを執拗に狩り続けるのは義勇兵として恥ずかしいという事らしい。

「うっせーよー！」

「ほっとけ、ランタ」

それが正解だ。

最初はランタも何度も意地になって言い返していたが言うだけ無駄。

疲れるだけなのだ。

不満そうなランタを窘め、奥にあるいつものテーブルに座ると給仕のお姉さんにそれが注文する。

そして商品が来る前に各々話を始めた。

「ようやくダムローの詳細な地図も出来てきたし、何とか間に合ったかな？」

「そうやなあ、シアさんに頼まれた仕事の日は明日やったし」

「うん。装備やスキルも何とか整えられた」

「へ、これであん時の借り、少しは返せるな」

「油断しないで。何が起こるか分からないのが戦場だから」

実は最近ゴ布林狩り以外にもダムローで行っていた事があった。

それがダムローの詳細な地図の作製だ。

以前にも手作りで地図は作成していたのだが、アレは大雑把過ぎて使いにくかった。

昔、アラバキア王国が統治していた頃の地図もあるにはあるらしい。

しかし荒廃し尽くしゴ布林たちの根城となったダムローは様変わりしすぎており、全く当てにならないらしい。

「メリイの言う通りだ。皆、改めて説明するけど、明日の俺達が任された仕事は一つ。周辺に存在する敵の露払いだ」

アナスタシアから告げられた仕事は驚くほどの難しい物ではなく、ダムローにいる敵の排除だった。

曰く近々ダムローで反ギルドの連中が現れるという情報を掴んだらしく、彼女の仕事

はその排除らしい。

その時、邪魔になる敵の排除が必要との事。

しかしアナスタシアの力ならゴブリンなど相手にならない。

露払いなど必要ないと思うのだが、もしかするとユキト達に経験を積ませる為なのかもしれない。

何にしろ、任された以上はきっちり仕事をこなすだけだ。

「でもよ、反ギルドの連中、ダムローで何すんだ？」

「さあね。何であれまともな話じゃないのは間違いないと思う」

「俺達たちは自分の仕事の集中しよう。それにランタもさつき言ってたけど、借りを返す時だ」

「ま、今日の前哨戦は十分にやれたからな」

ランタがテーブルに運ばれてきたビールを呷りながら、ニヤリと笑う。

油断は禁物だけど、確かに今日の戦いは悪くなかった。

今日はダムローで遭遇した五匹のゴブリン達を苦も無く撃退できた。

装備やスキルが揃ってきた事もあるけど、それ以上に毎晩の訓練も身になってきているんだと思う。

「とにかく明日に備えて今日は英気を養うっていうか。乾杯しよう」

「たまには良い事言うじゃねーかよ、ハルヒロ。俺ほどじゃねーけどな」

「……何時、良い事言った？」

「あ、あははは、とにかく乾杯」

ポツリと毒を吐くシホルの独り言をあえて聞かなかったフリをすると皆とテーブルの中央でグラスをカチンと軽く合わせた。

◇

正直に言えば今日という日を待ち望んでいた。

その所為か早くから目が覚めるとすぐさま準備と整え、気が付けばマナトが使っていたベットの前に立っていた。

そこには主の代わりに杖と神官服が置いてある。

ベットの前に立っていたのはユキトだけではない。

同じく早くに目覚めていたハルヒロもモグゾーもランタも、そして少し遅れてユメ、シホル、そして昨日は義勇兵宿舎に泊まったメリイも集まってきた。

「……いよいよだ、マナト。行つてくるよ」

ハルヒロが全員の顔を見渡すと、力強く頷いた。

「よし、皆、行こう！」

手持ちの装備をチェックし、いつも通りにオルタナ北門へ向かうとそこには銀髪の女性立っていた。

「来たか」

「おはようございます、アナスタシア師匠」

「「おはようございます」」

門の前に居たのはアナスタシアだった。

いつも通りの軽装と長剣を携え、隙のない立ち振る舞いで自分達を待っていた。

しかしその雰囲気は普段とはまるで違う。

笑顔を浮かべてはいるが、研ぎ澄まされた刃のような雰囲気を醸し出している。

修行中の駆け出し義勇兵見習いでもそのくらいは分かる。

「さて、今日はいよいよお前達の初仕事になる。段取りは以前に説明した通りだ。連中の相手は基本的に私がする。お前達は雑魚の掃除だ。ハルヒロ、現場の指揮はお前に任せる」

「は、は、」

「そう緊張するな。周りにいるのはゴブリンかホブゴブリンばかりだ。連中が他の厄介な奴を連れている可能性もあるが、そっちは私がやるから安心しろ」

「え、反ギルドって他の異種族を連れてるんですか？」

「正確には少し違うが……時間もないし、ダムローに向かいながら少しだけ話そう」
険しい表情のままダムロー方面に歩き出したアナスタシアの後を追いつつ、話に耳を傾ける。

「前にも言ったが反ギルドの連中はギルドの掟に反したり、あぶれた連中が作った組織だ。当然、仕事も非合法、つまりは大っぴらにはできないものが多い。その中で連中が力を入れているものの一つが賭博だ」

「賭博、ですか？」

一応オルタナにもそういった類の場所があると聞いた事はある。

確か場所は娼館などが立ち並ぶ区画にあった筈だ。

もちろん、ユキト達が足を運んだことは一度としてない。

というかその日食べる事すら、どうにかでやっているユキト達に賭け事に勤しんでいる余裕など欠片もないのだ。

「ああ。オルタナにもあるにはあるが小規模で一応は合法だ。だがアラバキア王国の都市部に行けばそれなりの規模のカジノや闘技場がある。その中でも非合法の賭博に関係する場所はすべて奴らが取り仕切っている。特に地下の闘技場は何でもアリだ。人間同士の殺し合いから異種族を使った余興までな」

にわかには信じがたいというか、正直想像もつかない世界だった。

できれば一生縁がない方が良いでしょうな世界でもあるようだ。

ハッキリ言えば関わり合いにはなりたく無い。

「じゃあ、今回の件もその……」

「そうだ。連中が捕獲した異種族をその闘技場まで運ぶルートの一つがダムローを経由するらしい。それが本当かどうかを確かめるのも今回の目的の一つだ」

「……そんなの見て何が楽しいのか理解できない。誰が見るのかしら？」

メリイに同意見だ。

悪趣味の一言に尽きる。

「見たがるのは裏で幅を利かせている碌でもない連中と後は大体が腐った貴族連中だ。貴族の奴らは恵まれている分、普段から娯楽に飢えている。地下の闘技場にしても、反ギルドにしても出資者は貴族だからな」

「は、貴族が？」

「貴族からしてみれば、反ギルドの連中は非合法の仕事を頼める便利な駒だ。しかも娯楽まで提供してくれる得難い存在でもあるんだよ」

「……今、アラバキア王国は戦争中ですよね？」

「後方の安全な場所で偉そうにしているだけの連中にそんな事理解などできないさ。」

所詮は他人事で、本気にしていないんだよ」

吐き捨てるように呟くアナスタシアの表情が普段からは想像できないほどに険しい。もしかすると個人的に貴族に対して何か因縁でもあるのかもしれない。

「ま、概要としてはこんな所だ。後、これは仕事に直接関係ないが一応言っておく。お前達も上手い儲け話などには乗るな。そう言った話に限って何か裏があるのは当然だからな。特にランタ」

「な、なんで俺なんすか!?!」

「お前が一番引つかかりそうだからだよ」

「確かに」

「うん」

「お前から少しは俺を信用しろっての!」

ランタの怒鳴り声でパーティを覆っていた堅苦しい雰囲気は少し和らぐ。

そこで丁度ダムローの入り口が見えてきた。

「さて仕事を開始する。私はダムロー中央部に位置する広場まで駆け抜ける。お前達は後からついて来い」

アナスタシアは剣の柄に手を置き、僅かに腰を落とすと同時に一気に駆けだした。

走り出した余波で突風が巻き起こり、風が収まった頃にはアナスタシアの姿は何処に

もない。

「相変わらず凄いなあ、シアさん」

ユメの間延びした声を聞きながら、内心確かにと頷く。

とにかくあの人の戦闘能力の高さは尋常ではない。

一騎当千。

そんな言葉が相応しいと思う。

だからこそ気にもなる。

彼女が一体どうやってあれだけの力を得ているのかが。

「あつちは任せて大丈夫なんだし、俺達は自分の事に集中しよう。多分、今までで一番

大変な仕事になると思う。でも俺達全員ならやれる」

「その根拠は？」

メリイがジツとハルヒロの方を見つめる。

その目は非難している訳はない。

表情は変わらないが、どこか不安気にも見えた。

「毎晩の訓練のお陰で前よりも全員が強くなってる。モグゾーやユキトの防御力が上がったおかげで、攻撃に集中できるようになった。シホルの魔法で敵の無力化が可能になったし、ユメの弓も当たるようになった。俺も蠅叩^{スワット}で一体は相手にできる。何よりメ

リイがいる」

「何でそこで俺の名前が出てこねえんだよ!!」

「ランタはなあ」

「おい!」

「冗談だつて。ランタもスキルの扱いが大分上手くなったよな」

「は、初めからそう言やいいんだよ」

照れたようにランタがソツポを向くと、それを見ていたシホルが「気持ち悪い」と呟いた。

どうやらシホルはランタに対する遠慮が大分無くなってきたみたいだ。

「……私は……そんな当てにされても、困る。私は仲間を死なせた、神官だから」

辛そう唇を噛みながら俯くメリイの肩にユメとシホルが気遣うように手を置いた。

トラウマはそう簡単に払拭できない。

でも――

「メリイ、それは前にも言っただけどお互い様だ。僕達だつて神官を死なせた。パーティなんだ。それに僕も怖いよ。前に出て戦う時、後ろの皆が無事なのかつてさ。でも仲間だから、メリイを信じてるから、後ろを任せよ」

「言つとくけど俺は殺しても死なねー不死身の男だからな! 余計な心配してんじや

ねーよ!」

「フフ、ランタくんらしいね」

「笑ってんじゃねーぞ、モグゾー! この中じゃ前に出るお前とユキトが一番あぶないんだからな!」

「う、うん、大丈夫。僕も皆を守れるように頑張るから!」

そこでメリイはようやく顔を上げると、僅かに口元を緩ませた。

もしかして今、笑ったのだろうか?

最近、ようやく雰囲気も良くなってきて食事とか買い物とか一緒にするようになった。

でも笑った所を見たのは初めてかもしれない。

「どうしたの、ユキ?」

「へ? い、いや、何でも無いよ」

思わず見とれていたなんて恥ずかしくて言えない。

というかメリイにまでユメみたいな呼び方された。

「……私は、二度と仲間を死なせたりしない。ハル、ユキ、シホル、ユメ、ランタ、モグゾー、貴方達の命、私が絶対に守るから」

「よし。これ以上師匠を待たせる訳にはいかない。そろそろ行こう!」

ハルヒロが皆の前に手を差し出すとそこに全員が手を重ねる。

「フアイト！」

「いっばーっ!!」

いつも通りの掛け声をかけ、全員が決意と共にダムローの中に足を踏み入れた。

第十一話 炎雷

人が居なくなり、廃墟と化したダムローの街を銀色の風が駆け抜ける。

その風の正体は言うまでもなく長剣を携えたアナスシアである。

常人では捉えきれない程に速く走り、煌めくような一閃が通り過ぎた後では進路を塞ぐゴブリン達の死骸が転がっていく。

「……これで少しはやりやすくなる筈」

一瞬だけ僅かに口元を緩めアナスシアはポツリとつぶやいた。

元々今回の依頼はアナスシア一人で十分に達成できるものである。

それにハルヒロ達を巻き込んだ理由が二つあった。

一つは少しでも実戦経験を積ませ、現場の空気に慣れさせる事。

そもそもギルドから依頼される仕事は通常の狩りとはまるで違う。

特に人間が絡んでくると、相手もまたこちらを排除しようと戦略を練ってくる。

その際の難易度は通常の狩りの比ではない。

もう一つは自分達の技量向上を実感させたかった事だ。

毎晩訓練を行った結果、あの七人の技量は初期に比べても格段に向上している。

しかし常にアナスタシアとしか手合わせを行っていない為に技量向上が実感しにくい。

普段の狩りでもそれなりに腕が上がった事は感じているだろうが、それが仕事の中で実感できれば自信にもつながるだろう。

特にハルヒコは自分を卑下している傾向にある。

これを機にそれが少しでも改善できれば、さらに良くなる。

階段を駆け上がり、目的地である広場の前に差し掛かるとアナスタシアは瓦礫の陰に身を隠しながら広場を覗き込んだ。

そこにはいくつかの荷台が置いてあるのが見えた。

「荷台だけ？」

他には人影も見えない。

これから取引があるにしろ、終わったにしろそれは明らかにおかしい。

「罨……ッ!？」

それに気がついたアナスタシアは躊躇い無く広場に向けて飛び込んだ。

次の瞬間、今まで居た場所に爆炎が生じ、凄まじい熱風と衝撃波がアナスタシアに襲いかかった。

「ぐっ」

巻き上がる煙に巻かれながら、転がるようにして逃れると即座に長剣を構える。そこには炎を纏う一人の女性が立っていた。

「今のを避けるなんて流石ね、アナスタシア」

「……アラディナ」

纏う炎のように紅い髪に挑戦的な笑みを浮かべたアラディナをアナスタシアは憎悪の籠った視線で睨みつける。

それは相手方も同じ。

視線だけで人を殺せるのではと思える程に殺意が込められた視線を向けている。

彼女たちはお互いを憎んでいた。

すべてを掛けて殺したいと願うほどに。

胸中に渦巻く爆発しそうなほど激しい感情をどうにか押さえつけ、アナスタシアは問を投げた。

「……貴方が此処にいるという事は、畏だっただって事か」

「さあ、どうかしらね。アンタに答えてやる義理はないでしょ」

アラディナも腰から愛剣を引き抜くと切っ先をアナスタシアに突きつける。その剣はアナスタシアの持つ剣とは正反対であり、どこか無骨な印象を持った剣だった。

柄には特に装飾もなく、刀身は通常の剣と比べても厚い。

「新しい剣？」

「アンタを殺すために用意した剣よ」

どちらも隙のない構えで相手の様子を伺い、そして――

「ハアア!!」

「フーン！」

お互い一歩踏み込むと同時に瞬時に間合いを詰め、渾身の一太刀を叩きつけた。

裂ぱくの気合いと共に二つの剣が激突し、凄まじい衝撃波が発生する。

技も策も何もなく、すべてをかなぐり捨てた力任せの一撃。

それを制したのはアナスタシアであった。

「くっ」

長剣を止めたアラディナの腕にはしびれが走り、踏ん張りを利かせた足が僅かに沈む。

「相変わらずの馬鹿力ね！」

明らかに負け惜しみ染みた挑発だった。

その証拠か、アナスタシアが力を込めて押し込むとアラディナの表情には余裕がなくなってくる。

「貴方がひ弱なだけでしょ」

「言ってくれるわね。そんなだから、何時まで経っても男が寄り付かないのよ！」

アラディナは長剣を弾いて距離を取ると、剣を横薙ぎに振るう。

すると剣が分割され鞭のように複雑な軌道を取りながらアナスタシアに襲い掛かる。

それは所謂蛇腹剣とでもいふべき武器だった。

右側面から首を狙ったその一撃を紙一重で回避する。

だがアラディナがそれを見透かしたように手首を捻ると、うねる蛇の如く再び刃が喉元に喰らいついてくる。

「ッー」

長剣を振るい刃を再び逸らす、蛇腹剣は周辺のものをお容易く切り刻みながら襲い掛かってくる。

「しっしっしっしー」

アナスタシアは体を回転させ、刃を外に向けて剣の軌道を変える。

そしてガラ空きになったアラディナの懐へと飛び込んだ。

「甘い！」

だがそう来る事も想定していたアラディナは慌てることなく蛇腹剣を操り、今度はアナスタシアの背中に向けて刃を放つ。

「後ろ!？」

背後からの一撃に咄嗟にしゃがみ込むと数本の髪の毛を奪って、蛇腹剣が頭上を通過していく。

「まだまだこんなものじゃないわ！ イグ・アルヴ！」

左手を突き出しエレメンタル文字を素早く描く。

手首に掛けた腕輪の装飾品が光を発し、発生した火球がアナスタシアに向けて襲い掛かった。

それは^{ファイアボール}火炎弾と呼ばれる初歩中の初歩の^{アルヴマジック}炎熱魔法である。

しかしそれが普通の魔法使いが使う^{ファイアボール}火炎弾とは明らかに違う。

それを予め知っていたアナスタシアは迫る火球には触れず後ろに飛びのく事で回避する。

攻撃対象を失い、炸裂した^{ファイアボール}火炎弾が爆発と共に地面を大きく抉った。

その威力は明らかに異常なもの。

直撃を食らえばただでは済まない。

「くっ」

腕を掲げ顔を庇って衝撃波をやり過ぎ、爆煙の中から伸びてきた蛇腹剣を切り払う。

しかし息もつかせぬ間で次の火球が降り注いできた。

強力な火炎によつて所々服と皮膚が僅かに焼ける。

痛みを堪え火球を避けながらアナスタシアはアラディナの方を觀察する。

「……剣を掲げたまま魔法を使用しているという事は……あの剣は金属でできていない？」

通常魔法を使う場合、多くの金属を使用した武器や防具を持つ事はできないとされている。

これは魔法を使用するのに必要なエレメンタルが金属を嫌う性質を持っているからだ。

しかしあの蛇腹剣が炎熱魔法アルヴマジックを阻害している気配はない。

つまりあの剣は金属でできていないという事になるが――

「考え事とは余裕ね、アナスタシア！」

「しっ！いー！」

アラディナは愛剣を手足のように操り、アナスタシアへ向けて振るい続ける。

アラディナが剣を使いながら魔法を使用できるのには当然訳がある。

アナスタシアの推測通りこの剣は金属で作られたものではない。

この剣は前に仕留めた火竜の牙を加工して作った現状二つとない一品。

分割の仕掛け自体も出来る限り金属は使わせなかった為、エレメンタルへの影響も最小限に抑えられた武器となっているのだ。

「今日こそ、お前を仕留める、アナスタシア!!」

この蛇腹剣と炎熱魔法アルヴマジックを駆使した中距離戦こそアナスタシア攻略の要。

前から知ってはいたが真つ向勝負ではアナスタシアに敵わない。

剣技で劣るつもりはないが、臂力の差は大きい。

腕力、脚力、瞬発力、反応速度。

すべてアナスタシアが上回っている。

業腹ながら、身体能力で競うのは無謀という他ない。

だが幸いな事にアラディナがアナスタシアに勝っている部分はある。

それが魔法だ。

これに関してはこちら側に一日の長がある。

特にもつとも得意とする炎熱魔法アルヴマジックはこの世界の誰にも負けないという自信があった。

「別に剣で勝つ必要はない。貴方を倒せばそれで十分！」

ファイアボール
 火炎弾の衝撃波によってアナスタシアの動きが鈍った隙に唱えた炎熱魔法アルヴマジックが空中で槍のような形状に変化する。

そしてそのまま雨のように一斉に降り注いだ。

「この程度！」

邪魔な一射を剣で切り払い、残りは紙一重で回避したアナスタシア。

しかし地面に突き刺さった炎槍はそのまま大きな柱となって進路を塞がれてしまつた。

ファイアビラー
 「火炎柱?!」

火炎柱とは地面から火柱を発生させる炎熱魔法アルヴマジックである。

これもまた火炎弾と同じ通常ではあり得ない熱量を持ち、空に届くのではと錯覚させる程に高く柱が立ち上っている。

そこに柱の縫うようにして再び蛇腹剣が迫る。

しかも今度は火炎柱ファイアビラーによって逃げ場が限定されてしまった。

「これで逃げ切れるかしらね！」

周囲を囲む炎柱の結界。

そこに居る獲物を喰らわんと這いまわる刃の蛇。

もはや勝負は決したと確信する。

しかし——

そんな炎の結界を突き破った短剣が数本、アラディナの手元に向けて投げつけられた。

「武器狙いか、小賢しい！」

手首を捻り、刀身を波打たせて短剣を弾き飛ばす。

だが、短剣は次々と炎の中から飛び出してきた。

「無駄！」

苛立ちに任せ放った炎で飛んできた短剣をすべて蒸発させる。

しかし次の瞬間、立ち上がる煙の中から飛び出してきたのは——

「ジェス・イーン・サルク・フラム・ダルト、雷電！」

見ればアナスタシアはいつの間にか剣を鞘に納め、手首に掛けた腕飾りの装飾品を用

いて電磁魔法ファルツマジックを使用していた。

放った電磁魔法ファルツマジック、雷電ライトニングが煙幕を突き破り、アラディナの下へ押し寄せてくる。

「チツ、お得意の電磁魔法か！」

アラディナが炎熱魔法アルヴマジックを得意とするように、アナスタシアは電磁魔法ファルツマジックを得意とする。

その威力は普通の魔法使いが使用する電磁魔法ファルツマジックの比ではない。

無論、それでもアラディナに勝る程ではないが、当たればダメージを負う事は避けら

れない。

横つ飛びで雷光を回避するがアナスタシアはその隙に距離を詰めた。蛇腹剣諸共アラディナを両断しようとして上段から長剣を振り下ろす。

この手の仕掛けが施された剣はその分脆い。

そこを狙ってきたのだ。

「そんな事は想定済みなのよ！」

アラディナが指で仕掛けを動かすと、分割されていた刃が素早く収納され長剣の一撃を受け止めた。

「距離を詰めた事は流石と褒めましょうか。でもね——」

「ハア、いちいち五月蠅い」

「なっ!?!」

「黙って戦えないの?」

アナスタシアもまた苛立ちつつ力任せの鏢迫り合いに持ち込む。

「アラディナ。貴方の欠点を教えてあげる。おしゃべりな事と戦略の荒さ!」

「ツ、ふざけるなアア!!」

押し込まれた剣を裂帛の気合いをもって押し返し、弾き飛ばすタイミングを見計らう。

距離さえ取れば、再び自分が優位に立てる筈であると確信しているからだ。

しかしアナスタシアは自分から飛びのくと地面に長剣を突き刺し、再び右手をかざす。

「ジェス・イーン・サルク・カルト・フラム・ダルト！　サンダーストーム 暴威雷電!!!」

「そんな真正面からの——ッ!?!」

ライティング 雷電同様、回避しようとしたアラディナだったが、そこで異変に気が付く。

先ほど以上に強力な雷撃が複数に分かれ、アラディナの足元に突き刺さっていた短剣目がけて寄り集まっていく。

それが雷撃の結界となつてアラディナを追い込んだ。

もはや逃げ場はない。

「あの短剣は初めからこれが目的!?!」

「貴方が私との接近戦を避ける事もどんな形にしる魔法戦に持つていこうとする事も想定済み。ならそれなりに対策は練るのは当然。貴方がその剣を持ち出してきたのと同じくね」

「くつ、ジーン・メア——」

アラディアが電撃を防御しようと別の魔法を使おうとするが、僅かに早く炸裂した電撃の爆音と衝撃波が巻き起こった。

「……この程度では仕留められないか。流石、アラディナ。舞い上がる煙の中から現れたのは水の壁だった。

アラディナは四方を囲むように氷の壁を出現させ、電撃を防いでいた。

しかし完全に防御できた訳ではないようでアラディナは片膝を付き、体からは煙が上がつている。

「ぐつ、アナスタシアアア！」

アラディナ力を込めて立ち上がろうとするが、痛みと痺れで上手く体が動かない。

「終わりよ。ここでその首、斬り落とさせてもらいましょう」

「まだまだ……と言いたいけど結構キツイみたいね」

「逃げられるとは思わないで」

アナスタシアの言葉を鼻で笑いながら剣を杖に立ち上がり、左手を突き出すと魔法を使用しようとエレメンタル文字を刻み始める。

無論、それをアナスタシアが許す筈は無い。

一足とびで懐に飛び込み首を狙う。

ファルツマジック
電磁魔法の影響でアラディナは動きが鈍い。

この一撃は逃れられないと判断する。

しかしそれを覆す一言をアラディナが口にした。

「あの見習いの坊や達、放っておいてもいいのかしら？　今頃、殺されているかもしれないけど」

「ッ!?!」

アナスタシアの気が逸れた一瞬の間、そこを狙ってアラディナの魔法が炸裂した。

「ぐっ!」

目の前で爆発した炎熱魔法アルヴマジックにアナスタシアは剣を盾にどうにか後方へと飛び去った。発生した爆風に体勢を崩され、地面をゴロゴロと転がり、崩れかけの壁へと激突する。

「痛ッ、よく、も、やってくれた!」

痛みに堪えながら、どうにか立ち上がるとそこにはすでにアラディナの姿はない。

あの傷では遠くにはいけない筈。

しかし先ほどの言葉は無視できない。

すぐにでもハルヒロ達の下へ向かうべきだ。

それに先ほどの一撃、直撃こそ避けたがダメージも大きい。

迂闊な追撃は命取りになる可能性もあった。

「……痛み分けか」

逃がしてしまった事に激しい憤りを覚えながらも、アナスタシアは思考を切り替える。

そして全身の痛みを堪えながらすぐさまハルヒロ達が居るであろう場所へと走り出した。

◇

「俺達がやってきた事は無駄じゃないって、見せてやるんだ！」

ハルヒロの叫び声に答えるように前に出ていたユキトとモグゾーが目標に向かって攻撃を繰り返す。

眼前に居るのは、あの時の鎧ゴブとホブゴブリン達だ。

ダムローに侵入した僕達は何匹かのゴブリンを思った以上に簡単に始末し、アナスタシアの後を追って広場近くにまでたどり着いた。

しかしその先で見つけたのだ、あの時に苦戦したゴブリンたちを。

アナスタシアの後を追うにはここは避けて通れない。

別にこいつらがマナトの死を直接招いた訳ではない。

直接、殺したのはあの黒いオーク、『傷持ち』だ。

でも、それでも、こいつらに背を向けるという選択はできなかつた。

「あの時の借りは必ず返す！」

一度距離を取り、再び突っ込んだ僕の前に剣を振りかぶってくるのは鎧ゴブだ。しかしその剣には何の脅威も感じない。

その動きも明らかに遅かった。

流石に止まって見えるというほど達人めいた事を言うつもりはない。

それでも毎晩眼前に繰り返り出されるアナスタシアの一撃と比べれば、雲泥の差がある。

「遅い！」

体を捻り、剣の切っ先を余裕で避ける。

そしてすれ違い様にショートソードを鞘から抜くと、そのまま横薙ぎに叩きつけた。

抜刀と共に放たれた刃が鎧ゴブの右腕に深々と傷を作った。

「はあああ!!」

腕を切られ、怯んだ鎧ゴブにさらなる連撃。

返す刀で回り込んだ背中を斬りつける。

「さつき戦った時も思ったけど、前と全然違う。これなら……やれる！」

以前はそれこそ逃げる事しかできなかった。

しかし、今は違う。

全員が新たに覚えたスキルと夜の訓練の経験を活かしながら、それぞれの敵を押し込

めている。

実の所ユキト達は夜の訓練でそこまで劇的に強くなつた訳ではない。

悔しい話、他の冒険者と比べてもまだまだ実力に開きがある。

もつと強くなるには経験を積み、技を磨き上げていくしかない。

故にあの訓練で覚えたのは戦い方。

身体の動かし方、技を出すタイミング、連携の取り方。

アナスタシアが教えてくれたのはそんな戦場で生き残る術だった。

「止めー」

鎧ゴブが突き上げてきた剣を手甲で逸らし、その喉元にショートソードを叩き込んだ。

「ぐふう」

口から血を吐きながらも、こちらに手を伸ばす鎧ゴブ。

前なら怯んでいただろう凄惨な光景にも何ら動じる事はなく、剣を横薙ぎに斬り払った。

「よしー」

倒れた鎧ゴブの息の根が止まったのを確認して、ホブゴブリンの相手をしているモグゾーの援護に向かう。

モグゾーはバスターソードを振るい、ホブゴブと壮絶な打ち合いを行っていた。

訓練の成果なのか、押しているのはモグゾーだ。

買いきろえた鎧を巧みに使って攻撃を捌き、大剣を器用に扱いホブゴブリンに確実なダメージを与えてゆく。

それでも倒れないホブゴブリンの体力に感心しながら、ショートソード片手に突っ込んでいく。

「モグゾー!!」

「うん!!」

モグゾーが鎧迫り合いに持ち込んだ隙に駆け付けたユキトは側面から袈裟懸けに斬りつける。

斜めに入った一撃がホブゴブリンの腕を裂き、武器を振るう手管を鈍らせる。

「うおりやああ!!」

「ユキト、モグゾー!!」

「うちらも!!」

ユキトだけではない。

走り寄ってきたハルヒロが頭部に蹴りを入れ、傍にいたランタ、ユメもホブゴブリンに襲い掛かる。

それは所謂袋叩きだ。

傍から見ていれば気分の良いものではない。

でも、これは命のやり取り。かつてマナトが言った。

《これは命のやり取りなんだ！ 俺達も泥ゴブリンも真剣なんだ！ 簡単な訳ない、

誰だって死にたくないだろ!!》

本当にその通りだ。

相手には悪いけど、こっちだって真剣で、だからこそ手心は加えない。

「どうもー！」

モグゾーのどうも斬がホブゴブリンの頭部に直撃する。

大剣が頭部に深々と食い込み押しつぶすと、ホブゴブリンは崩れ落ちるようにして地

面に倒れ込んだ。

倒れた敵の姿を見ても誰も動かず、周囲を警戒する。

これもアナスタシアから叩きこまれた教訓だった。

終わったと気が緩んだ時こそが、最も危険な瞬間なのだ。

「……敵の姿は見えない」

「じゃあ、やったって事か」

「そっやなあ」

「倒した？」

「うおおおお!!」

「しゃあなあ!!」

モグゾーとランタが歓喜の雄たけびを上げた。最

後まで気を張っていたユキトとハルヒロも顔を見わせ同じように笑みを浮かべる。

そして掲げた片手で「パン!」とハイタッチをかわした。

「喜ぶのも良いけど、治癒が必要な人は? 仕事もまだ終わってない」

「そっか。誰か怪我した人いる?」

メリイの指摘に全員が気を引き締めると自分の状態を確認し始める。

確かに広場の方では異常な爆音等が響き渡っていた。

アナスタシアの戦闘は継続中と思うべきだろう。

この切り替えの早さも日頃の訓練の成果かもしれない。

「ユキ、怪我は?」

「うん、僕は大丈夫だと思うよ」

メリイに返事を返しながらユキトは皆の下へ歩み寄っていった。



ダムローの廃墟の陰にフードを被った人物がゴブリン相手に善戦した七人の様子を眺めていた。

「……雑魚だな」

フードの人物ジュンヤは侮蔑と共に吐き捨てた。

特質した能力や力が存在する訳でもなく、技量も明らかに未熟。

この程度の義勇兵ならそこらに幾らでも居る。

こいつらは放っておいても何の問題もないレベルだ。

正直、あのアナスタシアが気に掛ける理由が分からないくらいである。

それでも何故かジュンヤにはこいつら七人の事がやたら鼻についた。

「……チツ、ムカつく」

仲間を守ろうと気遣うその姿勢、反吐が出る。

静観しようとしていたジュンヤは苛立ちに任せ、懐から武器を取ろうとする。

だがその時、背後から迫る脅威に気がついた。

防御、反撃、すべてをかなぐり捨ててすべてを回避につき込み、その場から飛び退く。

次の瞬間、今まで自分のいた場所が壁ごと切り裂かれ、凄まじい威力の長剣が地面に

突き刺さった。

「ぐっ」

顔を両腕で庇い、できるだけ後ろへ飛び退いた。

「こんな所にいたのか、ネズミ」

そこには紅い目を持つ歌姫、アナスタシアが殺意を込めて立っていた。

「……最悪」

幾らなんでもアナスタシアの相手が出来ると思う程、ジュンヤは思い上がってはいない。
い。

こいつらは化け物だ。

まともに戦っても勝ち目などありはしない。

「アラディナの事といい、やはり罠だったか」

「……ここに居るといふ事はアラディナがやられたか。ならこれ以上、ここに留まる

意味はない」

「逃げられると思うのか？」

「ああ、こうなる事も想定済みだ。それにその手負いで追い掛ける事など出来ないだろう」

ジュンヤは足を僅かにずらすとスイッチのようなものを踏み、アナスタシアの足元に仕掛けていた仕掛けを作動させる。

するとボンという音と共に廃屋の壁がアナスタシアの方へ倒れ込んできた。

「こんな仕掛けを！」

「俺はこれで失礼させてもらう」

ジュンヤはアナスタシアが壁に気を取られた隙に腰にぶら下げている瓶を足元に叩きつける。

すると割れた瓶から発生した濃い煙幕が辺りを包みこんだ。

「ハア！」

壁を斬り倒し、煙幕が晴れた頃にはジュンヤの姿はどこにもなかった。

◇

「俺達、義勇兵になったよ」

ハルヒロが物言わぬ墓標へ声を掛けと、少し後ろへ下がっているメリイ以外全員が団章をかざした。

ユキト達はマナトの墓石が置いてある丘へと赴いていた。

義勇兵になった事への報告と、そして手にしたものでもマナトへ渡す為。

「団章買うお金がなかった訳じゃないんだぞ。一区切りついてからの方がいいって皆で決めたからさ」

「まだ黒いオークも残ってるし、全部借りを返した訳じゃないけどな、一応って奴だよ。ま、俺は正直どーでも良かったんだけどさ」

「こんな時まで、憎まれん口叩かんでもええやん」

「ユメ、憎まれ口だよ、憎まれ口」

一応、ユメに突っ込んでおくと「そつかあ」と笑っていた。

「シホル、そろそろさ」

「あ、うん」

ユキトの横に立っていたシホルが墓の前にしゃがむと取り出した団章を墓石に押しつけた。

多分、墓石に刻まれた三日月の部分に嵌めこもうとしているんだと思うのだが、それは無理があると思う。

「えっと、シホル、それは流石に入らないんじゃない……」

「あ、ごめんなさい。ど、どこに置けばいいか解らなくて。じゃ、ここに」

シホルは墓石の手前に団章を置くと、両手を組んで祈るように顔を伏せた。

「これ、マナトくんのです。マナトくんのお金と足りない分が皆で出しました。メリイさんとアナスタシアさんも出してくれました。受け取ってください」

多分、皆同じ事を考えていると思う。

きつとマナトはそんな無駄遣いしなくていいって言うだろうと。

でもこれは必要なことだったんだと思う。

前に進む為のけじめとして。

微かな嗚咽と共に震えるシホルの背中にユメが手を置き、頭を撫でる。

ランタは上を向き、モグゾーは大きく息を吐きだす。

メリイは髪を抑えながら遠くを見ていた。

失った仲間の事を思い出しているのかも知れない。

「俺達、いいパーティになってきたよ」

ハルヒロの言葉に同意する。

短い付き合いだったけど、マナトが居たからこそ僕達は生きていられる。

本当はマナトにだって言いたい事や文句もあったんだろうけど、結局何も言わずに別

れてしまったから、せめて感謝だけでも伝えたい。

「……ありがとう、マナト。君に会えてよかった」

全員が沈んでいく目を眺めながら、少しの間その丘で友の事を悼んでいた。

第十二話 襲撃

いつも通りの夕暮れ時。

ユキトたちは順調に今日の狩りを終え、オルタナへと帰還していた。
全員が無事。

これに勝る成果は無い。

本日の成果を売り払う為、市場へ向かう全員の足取りも軽いうものだった。

「今日も絶好調だったぜ！」

「技出す時、ミスってたような」

「うるさいよ！」

ランタとユキトの軽口を聞きながらハルヒロが疲れたようにため息をつく。

「この後、師匠の訓練か」

「そやったなあ」

「うん」

「ふう」

ポツリと呟いたハルヒロの声に女性陣が全員、疲れたような表情を見せた。

まあ狩りを終えた後であの訓練と考えると疲れたような気分になるのも仕方がない。確かにアナスタシアの訓練は厳しいから。

しかしその分、技量向上に役立っていると思う。

流石に一朝一夕で達人みたくなれる訳じゃないけど、無駄ではない筈だ。

「そろそろ三人とも訓練にも慣れた？」

「大変だけどね」

「ためにはなるし」

「シアさん、厳しいからなあ」

三人とも疲れながらも、やる気はあるようで安心した。

女の子にあの訓練は辛いと思うので気にはなっていたのだ。

「じゃ、今日の成果を分けようか」

ハルヒロの一声で全員が集まって今日の儲けを計算する。

結果は今日もそれなり。

怪我もなく、一日の食費を確保するには十分なものだ。

「結構、貯まってきたよな」

今までの貯蓄額と今日の成果を頭の中で計算する。

流石に豪遊できるほどではないが、手持ちの金を合わせると少し余裕ができていた。

それでも簡単に使う気にならないのは、今までお金で苦労したせいなのか。

自分の貧乏性のために息をつきながら、一応使い道を考えてみる。

まあ食費は問題無いし、装備はくたびれてきたものの、まだ買い換えるほどじゃない。

となると、

「貯金とこう」

「なんだよ、つまんねえなあ。もっとバァーって使えよ」

「嫌だよ。お金が貯まったら新しい剣とか買いたいしさ」

戦利品を売り払い今日の儲けを山分けにしていたランタのくだらない軽口を聞き流

していた時だった。

『カン、カン、カン!』

思わず眉を蹙める鐘の音が響き始めた。

「えっと、時間を知らせる奴じゃないよね?」

「うん。何か鳴らし方が滅茶苦茶だし」

「なんやろなあ?」

「非常事態、とか?」

全員が訳が分からないまま、首を捻る。

ただユキト達よりオルタナ在任歴の長いメリイだけは心当たりがあったのか、神妙な顔で俯いていた。

「まさか……敵襲?」

「え? 敵襲?」

あまり聞かない言葉に一瞬だけ固まってしまった。

確かにアラバキア王国は戦争中。

敵襲があるというのおかしな話ではない。

だが、ユキト達がオルタナに訪れて結構な日が経っているにも関わらず、そんな事態に遭遇した事は一度も無かった。

「メリイ、それって——」

ハルヒロの問いかけに応えようとメリイが振り返った瞬間、今いる場所の反対方向から悲鳴が聞こえてきた。

「きゃああああ!!」

「逃げろ!!」

「オークだ!」

「オークが来たぞ！」

その声に全員が身を固くした。

オーク。

人間の天敵。

そして自分達ともそれなりの因縁を持つ種族。

「オークラくん？」

「違うよ、ユメ。オークだよ」

ユメの天然ボケに突っ込みを入れてみると、悲鳴と共に市場を行きかっていた人達が一斉に逃げ出した。

夕暮れ時だった故に人の数も相当なもの。

それが一斉に逃げ出した為にユキト達全員逃げる暇もなく人の波に巻き込まれてしまった。

「おお！」

「うわあああ！」

「ユキ！」

「メリイ!?!」

最初にランタとモグゾーがはぐれ、メリイの姿もすぐに見えなくなっていました。

「あ、帽子!？」

「ハルくん、ユキくん!」

「シホル、ユメ!!」

「ハルヒロ!」

殺到してくる人に押しつぶされながら、仲間たちに居場所を確認しようとして首を伸ばした。

しかし、見えたのはハルヒロだけ。

正確に言えばシホルの帽子を掴んだハルヒロの腕だけだ。

「ハルヒロ!」

呼びかけてもは返事はない。

多分、押しつぶされそうな圧迫に返事をする余裕もないのだろう。

「って僕も余裕ないけど。ちよつと、押さないで!」

そんな事を言った所で皆、逃げる事に必死すぎてこちらの声など聞いちゃいない。

出来る事と言えば流れに逆らわず、落ち着くまで待つ事くらいか。

ハルヒロの腕を見失わないようにしながら、しばらく流れに身を任せていると、今度は進行方向から叫び声が上がった。

「うわあああああ!!」

「あつちも駄目だアア!!」

反対方向でも襲撃があつたのか、今度は逆方向へ逃げようと人の流れが変わった。しかし一度できた人の流れはそう簡単には変わらない。

今までの方向へ進む人と逆に逃げようとする人との流れがぶつかり合い完全に身動きが取れなくなつてしまった。

「やばいよ、これ。押しつぶされる!」

何とか逃れようと足掻いていると帽子を持ったハルヒロの腕が人の流れから抜け出そうとしているのが見えた。

ユキトもまた同じ方へ逃れようと人を掻き分け、ハルヒロの後を追う。

そこには暗い暗幕のようなものが垂れ下がった屋台があつた。

「あそこか」

ユキトはどうかそこへ飛び込むと深くため息をついた。

「ハア、助かった」

「大丈夫か、ユキト」

「うん、何とかね」

先に逃れていたハルヒロと無事を喜び合ったのも束の間、鼻をくすぐる臭いに顔を顰める。

「何の屋台？」

「さあ、なんか剥製みたいなのが置いてあるけど」
それだけではない。

屋台に並べてあったのは瓶に詰められた変な液体や魔物の歯や骨で作られたアクセサリーなどが置いてあった。

見る限りあまり良い気分にはならない。

こんな所に女性陣がきたら全員が嫌な顔する事請け合いだった。

「暗黒騎士専用の屋台か何かかな？」

この趣味の悪さ。

暗黒騎士に通じるものがある気がする。

「まさか、そんな事はないと思うけど」

そう言いつつハルヒロも屋台に陳列された商品を見てドン引きしていた。

「おや、こんな時にお客さんかい。こっちへおいで」

「ひっ」

突然声が掛かりハルヒロが怯えたように声を上げる。

出来れば遠慮したい所だが、黙って入ってきた手前無視も出来なかつた。

恐る恐る屋台の奥まで行くと黒い服を着た老婆が二人を出迎えてくれた。

「あの、ここ、おばあさんの店ですか？」

「いきなり失礼な若造だね！ レディーと言いな！」

「す、すいません」

愛想笑いで誤魔化しながら、屋台の外へ視線を向ける。

未だに騒ぎは収まっていないようで、所々から悲鳴が聞こえてきた。

「ふん、オークだね」

「あの、よくあるんですか？」

「ん？ アンタ達、義勇兵の癖に知らないって事は新兵ルーキーかい？」

何故義勇兵と分かったのかと疑問が涌くが、鎧を着込んだこの格好を見れば一目瞭然だった。

「ええ。僕達は義勇兵になってまだ日が浅いので」

「なるほど。その様子じゃ童貞だね」

「ぶっ！」

ハルヒロの露骨な反応に老婆が楽しそうに笑い出した。

「馬鹿だねえ。そつちじゃないよ。義勇兵はオークを殺して一人前って言われてるのさ。お前さん達はダブルのようだがね」

「ハ、ハハ」

笑おう。

笑って誤魔化すしかない。

「覇気がないねえ。男だろ、もつと欲出しな！ 女とやりたいとかオーク殺したいとかあるだろ！」

「……それはもちろん」

女云々は聞かなかった事にして、目的はある。

いつかあの黒いオークを自分達の手で倒す。
必ずだ。

「ほう、さつきまでとは目が違う。よっぽど落としたい女でもいるのかねえ」

「あ、いや、そつちじや」

「なら、ここで格好良い所を見せてみな」

「へ？」

老婆はニヤリと笑うと手に持った杖を入口の方へ向けた。

そこには潰れた鼻と緑の肌を持つ者が店を覗き込んでいた。

「オーク!？」

胸中にあの時の恐怖と怒りが混在した感情が湧き上がってくる。

それ故にユキト、そしてハルヒロも同様に動けない。

「何やってんだい！ 童貞卒業のチャンスだろ！」

「いや、だつて、俺達だけじゃ——」

「情けないこと言つてんじゃないよ！ だから童貞なんだ！」

勝手な事を言う老婆を無視し、オークの動きを注視する。

大きな身体を守るように着込まれた鎧と重そうな片刃の剣。

それを器用に振り上げるとこちらに向かつてくる。

「ハルヒロー！」

「うわー！」

屋台の商品を撒き散らしながら、突っ込んできたオークの突進をどうにか直前で回避する。

「ああ!? 商品が台無しだよ！ 暴れるなら外にしな！」

勝手なことばかり言う老婆は無視し、ユキトはショートソードの柄を握る。

こいつは多分、オークの中でも階級的には下だ。

あの時、見た連中と比べれば大した事ない奴だという事はわかる。

何を怯む。

こんな奴に向かつていけないようでは、あの黒いオークを倒すなんて夢のまた夢だ。

躊躇いを振り切り一步前にしようとした瞬間、突然オークは声を上げた。

「ウオオオオオ！」

咆哮と共に放たれた上段からの太刀。

それはユキトの頭を狙った一撃だ。

防がなければ、あっさりと頭を潰されて死ぬだろう。

いつも見ているじゃないか。

モグゾーがゴブリンの頭を潰す所を。

このままではあんな風になる。

そう認識した瞬間、動けなかった筈の体は自然と動いた。

鞘走りて抜いたショートソードが剣の横腹に直撃。

鈍い金属音と共に火花が散り、斬撃の軌道を変えた。

「ぐっ」

欠けた細かい金属片がユキトの頬に傷を生み、剣を弾いた腕に痺れが走る。

前もそうだったけど、オークというのは例え下級の個体だろうと馬鹿力らしい。

「弾いただけでこれか!？」

正面から受けたら、力で押し切られてしまう。

「フオオオオオ！」

さらなる横薙ぎの一撃を受け止めるも、そのまま外へ弾き飛ばされてしまった。

「うああああ！」

「ユキト!? おわあああ!!」

「ハル、ヒロ！」

地面に叩きつけた背中への痛みに耐えながら、どうにか起き上がる。

そこで気が付いた。

遠目に何体ものオークが闊歩している事に。

まずい。

いくら何でもあの数に囲まれたら、終わりだ。

「くそー！」

自分の無力さに苛立ちながら、屋台の中に飛び込むとハルヒロが老婆を庇っている場面が目に飛び込んできた。

店に置いていたものなのか、杖でオークの剣を受け止めている。

「い、良いよ、義勇兵！ 惚れちまいそうだよ！」

「マジで勘弁してよ！」

冗談を言っている余裕はあるようだが、危機的状况に変わりはない。

ハルヒロは盗賊であり正面切つての戦闘は不得手。

ましてや体格差のあるオーク相手ではなおさら不利だ。

オークに気づかれぬように走り寄ったユキトはショートソードを背中目掛けて斬りつけた。

しかし、

「え？」

刃はオークの鎧に阻まれ、浅く表面に傷をつけただけ。

ならばと隙間を狙うが、オークは邪魔な蠅を払うように腕を振るってきた。咄嗟にしゃがむと頭の上を「ブオン！」という嫌な音と共に風が舞った。

ただ腕を振るっただけでこんな音が鳴るなんて。

「なんて馬鹿力なんだよ！」

「ユキトー！」

自由になったハルヒロがダガー片手に背後を取る。

オークの背後に組み付き、得意の背面打突バックスタブをお見舞いする。

しかし、それも浅くオークの鎧を傷つけるだけだ。

「げー！」

通用しない。

正確に言うなら急所が鎧に守られている為に背面打突バックスタブが上手く効果を發揮できないのだ。

「やばー！」

暴れるオークに振り払われてハルヒロは屋台の暗幕を破壊しながら、外へと吹き飛ばされてしまった。

「ハルヒロ!!」

オークもハルヒロを追って外へ出て行く。

「くそー！」

外には他のオークだっている。

このままでは最悪——

ユキトの脳裏に再びあの日の悪夢が蘇った。

忘れはしない。

あの日、顔の付いた血の熱さ。

何も出来なかった無力さ。

軀になった仲間の冷たさ。

そして奴らがこちらを見下す醜さ。

ああ。

忘れるものか。

「二度とさせるかー！」

奪わせるものかと、強い激情のようなものがユキトの内から湧き上がってくる。

その時、

「ッ!?!」

何かが流れ込んだような錯覚に襲われた。

それは僅かな雫のようなもの。

体に溶け出し、熱となって全身に広がっていく。

「これって」

いや、余計な事は後でいい。

少し熱くなった指でショートソードの柄を握り直した。

「いくぞ」

前傾姿勢のままオークに向かって走り出す。

「やらせるか!」

一足飛びに距離を詰めたユキトはオークの足目掛けて剣を振るった。

横薙ぎの一閃。

ショートソードが深々とオークの肉を斬り裂き、鮮血が舞う。

「ッオオオオオ!」

痛みに呻くような声を上げるが、オークは未だに健在。

ギロリと視線を向け、剣を振りかぶる。

しかし先ほどもまでに比べて脅威には感じない。

上段からの一撃を横に受け流し、返す刀で腕を裂いた。

今までよりも攻撃が軽く感じる。

「これなら！」

我武者羅に振り回されるオークの剣を紙一重で躲し、剣撃を流しながら再び足に斬撃を繰り返す。

足を斬り裂かれバランスを崩した鎧の隙間を狙って刃を差し込んだ。

「グギィー！」

腹に刺さった刃の痛みで呻くオーク。

それでもまだまだユキトを殺そうと剣を振り上げてくるのだから、大したタフさだと思
う。

だが、それは予想していた。

「ハルヒロ！」

「バックスタブ
背面打突」

後ろから組み付いたハルヒロのダガーがオークの顔面を抉った。

「グオオオオ!!」

「うわ、こいつまだ!？」

ハルヒ口を振り払おうと暴れる、オーク。

そこにダガーでもう一刺し。

両目が潰され顔面から鮮血が噴出している。

それでも倒される気配がないのが恐ろしい。

「ハ、ハ、ハッ!」

「いい加減に倒れろ!!」

刺さった剣を斬り上げ、引き抜いたもう一本の剣でオークの喉元を突き刺した。

鬱陶しいくらい、オークの鮮血がユキト、ハルヒ口共に降りかかってくるが構ってい

られない。

ハルヒ口は今度こそ最後だと、ダガーを振りかぶった。

「止め!!」

脳天にダガーが深々と刺さった。

それで最後。

オークの体がグラリと揺らぎ、そのまま地面に倒れ込む。

動く気配のないオークに二人そろって大きなため息をついた。

「ハア」

直前に離れたハルヒロは返り血を浴びているものの無事。

ユキトも軽傷はあれど生きている。

「ハア、ハア、や、やった?」

「あ、ああ。やった」

実感が湧かないがようやくオークを一体倒す事ができた。

「ユキ——ッ!」

「ハルヒロ?」

「ユキト、その眼!? 眼が紅い?」

思わず血で汚れた剣の刀身を鏡代わりに自分の顔を覗き込む。

そこには、『彼女』と同じ紅い眼が映っていた。

「な、何で……え?」

急にグラリと視界が揺らぐ。

ユキトは何の抵抗もできないまま地面に倒れ込んだ。

「ユキト、おい!」

「あ、くつ、力が、入らない」

まるでアナスタシアの訓練を受けた後のような強烈な疲労感が全身を支配していた。

不味い。

身体が上手く動かない。

このままだと他のオークの標的にされてしまう。

「ハ、ハル、ヒロ、僕を置いて、いけ。他のオークが、くる前に」

「ふざけんな！」

ユキトを担いでその場を離れようとする、ハルヒロ。

しかし、それに目ざとく見つけたオークがこちらに向かってくる。

「二人なら、逃がられるから」

このままユキトを担いでいたら100%逃げられない。

両方とも殺されてしまう。

なのに、

「嫌だ」

ハルヒロはユキトを離さない。

迫るオークの影。

ユキトは無理やり腕を動かし、ハルヒロを突き飛ばした。

「ユキト!?!」

振りかぶられるオークの剣。

避ける力も、捌く余力もない。

それでも。

「お、お前ら、なんかに」

力が入らないがショートソードを握り、オークを睨みつける。負けてなるものか。

最後までその気概だけは失わぬように。

その時、

「しゃがめー！」

背後から聞こえてきた声にユキトは咄嗟に伏せる。

頭上を通り過ぎる何かの風切り音。

考えるまでもない。

通り過ぎたのは剣だ。

横薙ぎに振るわれた剣がオークへ直撃、首を盛大に刎ね飛ばした。

「大丈夫か？」

「うん……ありがとう、レンジ」

振り返った先にいたのは見知った男。

自分達と同じ日に義勇兵となったレンジだった。

その後ろにはロン、チビちゃん、サツサ、アダチといったメンバーが立っていた。

全員が自分達とは比べものにならないくらいに良い装備を持っている。雰囲気からしても歴戦の義勇兵たちと遜色ない。

「お前……眼の色変わったか？」

「え、いや、これは」

「レンジ、まだいやがるぞ」

ゴツイ剣を構えたロンが指さした先には数体のオークがこつちへ向かってきている。

「やるぞ」

「おう」

「うん」

「了解」

そこからのレンジパーティの戦闘は圧巻の一言だった。

アダチが魔法で足を止め。

サツサが盗賊スキルで攪乱。

ロンとレンジ、そして意外にもチビちゃんが出て敵と交戦。

噛み合った戦いぶり。

各々の力量だけでなく、連携も完べきだ。

少なくとも現在の自分達よりも数段上である事は間違いない。

ハルヒロもレンジ達の戦闘に見入っていた。

結局、駆け付けてきた数体のオーク達は瞬く間にレンジ達によって排除されてしまった。

「こんなものか」

剣を肩に担ぎ、ロンは不敵な笑みを浮かべる。

他のメンバーも明らかに余力を残している。

この程度の戦闘は余裕とばかりに涼しい顔だ。

何というか圧倒的な実力差をまざまざと見せつけられた気分だった。

そんな風にレンジ達に見入っていると隣にいたハルヒロが声を上げた。

「レンジ、上だー」

ハルヒロの声に反応したのか、すぐさま飛びのくレンジ。

建物の上から様子を伺っていたのか、そいつがレンジへと踊り掛かったのだ。

襲い掛かった相手はオーク。

だが、普通のオークではない。

銀色の髪に上等な装備。

羽織るのは虎柄の派手なマント。

顔に入った入れ墨。

片刃の剣も明らかに他のオーク達が持っているものとは別物。

鈍く光る紫色の刀身が不気味さを助長している。

「イシュ・ド克蘭。オマエハ？」

派手なオークの名乗りにレンジは「手を出すな」とだけ言つて前に出る。

「レンジだ。やるつもりか？」

挑発めいたレンジの声にイシュ・ド克蘭と名乗つたオークは口元を歪め手を上げた。

すると他のオーク達も一斉に剣を降ろす。

それに応えるようにレンジもまた笑みを浮かべ——二人は激突した。

第十三話 狩場

いつも通りの喧噪に包まれたシエリーの酒場。

変わらず端っこの席に座るユキト達は注文した飲み物片手にハルヒロの話に耳を傾けていた。

「つて感じだったんだ！」

ハルヒロが語っているのは先にあつたオークとの戦いの事だ。

興奮収まらずと言つた様子のハルヒロ。

気持ちは良く分かる。

それだけ凄い戦いだったのだ。

そして話を聞いているのはパーティメンバーだけではない。

後ろや横の席に座っている客もハルヒロの話に聞き入っていた。

「おかげで生きてる訳だけど……」

助けてもらった事ありがたいし、感謝している。

だけど――

ユキトは複雑な心境でハルヒロの話に耳を傾ける。

結末だけを語ってしまえば、レンジはイシュ・ドグランと呼ばれたオークに勝った。

他のオーク達もそれを見て退散し、騒ぎは終息した。

聞いただけなら大した事ないようにも思える。

だがイシュ・ドグランはかなり手強い相手だった。

剣技だけではなく、オークの巨体に似合わない小技も使ってくるような厄介な敵。

仮にあの場でハルヒロと二人で戦う事になっていたらなら、間違いなく殺されていただろう。

そんな相手からレンジは腕に深い傷を負いながらも勝利をもぎ取ったのだ。

まあ、彼は終始余裕を崩さなかったが。

「とにかくさ、レンジ達が凄かったんだよ。途中で腕をやられてさ。でもそれを利用してイシュ・ドグランの意表をついて。見ていただけの俺も騙されちゃったし」

「うおー！ ピンチを奥の手に変えるとか！ くそ！ 俺もやりてえ、ていうか俺もやるぞ、絶対やる！」

話を聞いて興奮したのかランタが席を立ちあがり、高らかに宣言する。

しかし他のメンバーからの視線は冷ややかだ。

「勝手にやって失敗したらいいのどちがう？」

「失敗なんかするかああ!!」

「……その根拠がない」

相変わらずユメとシホルはランタに対して遠慮がなかった。

というか明らかにシホルには毒がある。

よほどランタとは相性が悪いのだろう。

「自信を持つのは良い事だけど、過信はしないように。それが命取りになる事もある」

「うっ」

流石のランタもメリイに言われたのでは黙らざる得なかった。

メリイがかつて所属していたパーティは言わば自分達の力を過信していたが故に壊滅してしまったのだから。

「で、でもさ、レンジ君たちは凄いやね。同期なのにずいぶん離されちゃったな」

「うん、でもユメはユメたちのピースでやってけばいいやんと思うけどなあ。シアさんにも色々教えてもらってるし」

「ユメ、ペースだよ。まあ、俺もそう思うけどね。というかレンジ達とはものが違うというか、見てて参考にならなかった。まあ強さで言えば師匠とは比べるまでもないけど」

レンジは確かに凄かった。

しかしアナスタシア程ではない。

まあ彼女の場合は別格というか、明らかにレベルが違うので比べるのも違う気がする。

「そういえば、後で師匠には眼の事を聞いておかないと」

「眼？」

「オークとの戦闘中にユキトの眼がまた紅くなつたんだよ」

「ええ！ ユ、ユキくん大丈夫やった？」

隣に座っていたユメが驚いてユキトの顔——正確には眼を覗き込んでくる。

顔が近い。

いい匂いがするけど、これは良くない。

ランタも睨みつけてる事だし、少し離れて欲しい。

「い、今は大丈夫だよ。疲労感はまだ残ってるけど」

「そっかあ」

前に倒れてしまった事があつたから気にしているのだろう。

「とにかく自分じゃ分からなかつたけど眼が紅くなって、なんか体が軽くなつたというか。調子が良くなつたんだ。そのおかげでオークを倒す事ができたんだけど。でも

その後で凄い疲れちゃって一歩も動けなくなつた」

「なんだそれ？」

「分らない。だから師匠に聞かなくちゃって」

「けどそれ凄くね！ オークも倒せたんだろ！ ユキトが出来たって事は俺らだつて眼が紅くなれば出来るかもしれないねーし！」

「やめた方がいいと思うよ。さつきも言つたけど一歩も動けなくなつたし、ハルヒロやレンジ達がいなかったら僕は殺されてたと思う」

とにかくあの時の疲労感は半端なものではなかつた。

もしも戦闘の途中であんな風になつてしまえば確実に命を落とす事になるだろう。

当然、仲間の負担も増し、下手をすればそれがきっかけで全滅する可能性も高くなる。

「んだよ、何弱気になつてんだ？ 一段上に行くためだろ！ お前には向上心つてのはないのかよ」

「あるよ。今のままじゃ駄目だつて思つてる」

ユキトの言葉に他の皆も驚いていた。

だが、このままでは駄目なのだ。

「分かつてんじゃねーか！ 周り見てみるよ！」

ランタの言わんとしている事は分かる。

今、シエリーの酒場に集まっている義勇兵の中で自分達は一番貧相だった。装備も中古品。

オークの返り血を浴びたユキトやハルヒロなどは服すら薄汚れていた。かといって義勇兵としての貫禄があるかと言われればそれも無い。

未だにゴブリンスレイヤーなる不名誉な称号が付きまどっているくらいだ。

「良いか。状況つてのは動いてるんだよ。聞いた所ではさ、新入りが来たんだと。そいつらそろそろギルドでの初心者講習が終わった頃だ。てことはダムローにだって来るかもしれない」

つまり後輩が出来るという事。

ランタの危惧しているのは、このままじゃ後輩に追い抜かれてしまうぞって事だろう。

「焦らない方が良いんじゃない?」

メリイがこちらの内心を見透かしたように呟く。

確かにそうだ。

焦っている。

別に後輩が出来るとか。

レンジとの差を感じたとか。

そう言った事よりも——オーク相手にまともに戦えなかった事。それが焦りの原因だった。

成長したつもりでも、何も変わっていないかった。

何よりも恐ろしいのがソレだ。

そんな焦りを感じたのはユキトだけではなく、ハルヒロもだったようでポツリと呟いた。

「例えばだけど。俺達も別の場所に行って色々試してみるってのはどうかかな？ ゴ布林ばかり相手にするっていうのも何かルーチンワークみたいになってしまっただし」

「ハルヒロオオ!! たまには良い事言うじゃないかよ!! ソレだよ、ソレ!」
悪くない案かもしれない。

確かにゴ布林ばかり狩っていても成長は望めない。

別の場所で経験を積むという選択は間違っていない気がする。

「ならユメは反対かな」

「私も」

女性陣からの反対にモグゾーは腕を組んで悩み、メリイは何も言わずに飲み物を口にかけている。

「や、別に提案って訳じゃないからさ。でもこの先の事は考えないと。俺達の立場を考えるとね」

「むくん、ユメは別にこのままでもいいと思うけど、シアさんの事もあるしなあ」
そう。

それがあるのだ。

また何時アナスタシアの仕事を手伝う事になるかも分からない。
今よりも確実に強くなっておく事に越したことはないのだ。

「とにかくこれで何もしなかったら向上心のねえ豚と同じだろ」

「子豚さん可愛いやんかあ！」

「何でそこで子豚が出てくんだよ、バアーカ!!」

「ふ、二人共落ちついて」

良く分からない言い争いを始めたユメとランタをモグゾーが止めに入る。
けど声が小さい所為かあまり効果がないようだ。

「……ユキトくんも、同じ?」

「え?」

珍しい事にシホルがジツとこちらを見ながら問いかけてきた。

ユキトは一瞬だけ言い淀んでしまう。

確かに焦りはある。

でもそれが致命的な間違いに繋がる可能性も十分にあるのだ。

マナトの時のように。

それを最も恐れているのはきつとシホルだ。

しかしこのままでは――

そんな思考がグルグルと頭の中を過り続ける。

悩みながらもユキトが言葉を口にしようとした時、纏めるようにハルヒロが立ち上がった。

「とにかく一度師匠に相談してみよう」

「シアさんに相談するのはええかもなあ。ランタの意見より何百倍も説得力あるやろうし」

皆も反論はないようで各々に装備を持って立ち上がる。

「ユキ？」

「え、ああ。何でもない」

心配そうなメリイに返事をするユキトもまた剣を腰に差して席を立った。

危険を承知で進むべきか。

停滞を覚悟しての現状維持か。

どちらが正しい選択なのか。

自身の答えも出ないまま、ユキトはハルヒ口達を追って歩き出した。

◇

「なるほど」

訓練を終え、地面に伏したパーティメンバーを見下ろしながらアナスタシアは納得したように頷いた。

剣を片手に佇むその姿は実に絵になっている。

ただ立っているように見えても恐ろしい程、隙が見当たらない。

「い、痛ええ」

「ぐううう」

叩き伏せられた痛みに呻きながら、立ち上がる事もできない。

相変わらずの容赦の無さに、涙が出そうだ。

「やっぱりシアさんは凄いなあ」

「うん、全然歯が立たない」

「そうね」

流石に女性陣には手加減したのか、メリイ達は立ち上がる余裕があるらしい。

「差別だろ」なんてランタが呟いている。

「今の話だが。狩場を変えるところのは悪い話じゃない」

「で、ですよねえ！ どうだ、お前らあ！」

ランタがうつ伏せに寝転がりながら、こちらに勝ち誇った笑みを浮かべた。

何というか器用な奴だなあと思う。

「お前達に足りないものは非常に多いけど、その最たるものが戦闘経験だ。そういう意味でも狩場を変えるのは良い案だ」

「でも無理しても危険なんじゃないかって皆で話してたんですけど」

「自分達にあった狩場に行けばいいだろう。それに危険なのは今でも同じだ。例えば戦い方。お前達、ゴブリンばかり狩っている所為で、それに最適化された動きになつてきている」

「それって……」

「分かりやすく言うなら、ゴブリン狩りに慣れすぎた戦い方。それはゴブリンには有効でも他には通用しない。今、他の敵と戦えばただそれだけで死の確率も格段に上がる」

誰もが気が付かなかった事を指摘され、絶句してしまう。

そういえばオークと戦った時もかなりの戦いにくさを覚えた気がする。

戦う気はあるのに中々攻めに転じる事が出来なかった。

最初は自分で臆したのかとも思っていたのだが、そういった理由もあったのかもしれない。

「要は経験不足による対応能力が欠けているんだ。それに緊張感の欠如は油断を生む。同じ相手と同じ場所であれば戦うとそういった弊害も出てくるという事だ」

自分達が気が付かなかった危険性。

それを指摘され今度こそ誰も何も言えなくなってしまった。

「じゃあどこが良いと思いますか？」

「それは自分達で判断しろ。それも義勇兵としての力量だ」

「ぐつ、ブリちゃんと同じ事を！」

ランタが顔を引きつらせて、首を垂れる。

かつてブリトニーに言われた事だ。

『自分を生かすのは、才覚と独自の判断、己の技量のみ』だと。

そしてそれはきつと正しい。

結局の所、最後にものを言うのは自分達の持つ力と知恵だ。

「あの、もう一つ聞きたいことが。僕がオークと戦った時に起きたのは……」

もう一つ。

今日起きた最も重要な出来事に対する質問。

その問いにアナスタシアは僅かに顔を曇らせる。

「……思った以上に早い。私との相性の良さか」

「は？」

「いや。それは単に私の力の一部がお前の中で活性化したからだ。前にも教えた通りお前達に飲ませた血はある種のエレメンタルのようなものだ。それが何かがきっかけになって反応したのだろう」

「じゃあ身体能力が向上したのも？」

「その影響に間違いはない」

アナスタシアの回答にランタは嬉しそうに飛び上がる。

「おお！　じゃあ俺達も！」

「調子に乗るんじゃない。そんなものを当てにするな。力が増したと言っても微々たるもの。証拠に雑魚のオークにさえ手こずる有様だ」

「ぐっ」

「今まで通りお前達はキツチリ基礎を固めて経験を積んでいけばいい」

それ以上は何も言わず、アナスタシアは考えるよう月の方に視線を向けた。

その表情がっらそうに見えたのは気のせいなのだろうか。

「あの師匠。もう一つだけ聞きたいのですが、紅い眼になると副作用みたいなのはあるのですか？」

「身をもつて味わつただろう。確かに力は増す。しかしそれは無理やりな強化だ。反動は肉体に過度な負荷をもたらす。下手をすれば碌に動けなくなる」

やはり動けなくなるほどの全身疲労は紅い眼になった反動だったらしい。

「でもコントロールとか出来る訳じゃないし……」

「ふむ……ならそちの訓練しないとな」

「え？」

思わず伏せていた顔を上げる。

そこには紅い月を背に立ち、楽しそうに口元をつり上げたアナスタシアの姿が目飛び込んできた。

当然、全員が顔を青くしながら息を飲む。

「さあ、始めようか」

何処までも楽しそうな笑みを浮かべる彼女は間違いないくドSだ。

「ハ、ハハハ、俺死ぬかも」

「縁起でもない事言うな」

だからといって抗う術もなく、ユキト達はただ顔を引きつらせる事しか出来なかった。

◇

「あくきつい。つらい」

「いちいち口に出すなよ」

「うっせーよ。いいだろ別に。減るもんじゃあるまいし」

訓練を終え、全員が身体を引きずり義勇兵宿舎への道のりを歩く。

今日はメリイも一緒だ。

いつもは自分が借りている宿に戻るのだが、その気力も残っていないらしい。

「つか、普通の訓練の後でアレはきつ過ぎだろ」

「まあ、な」

ランタは辟易したようにため息をつくどハルヒロも同調したように頷いた。

あの後やらされたのは所謂精神修行とも言うべきものだった。

座禅を組み、体内に存在しているエレメンタルと同調させる。

こうして口に出して言うのは簡単だが、全身ヒリヒリ痛む上に、座禅なんてやったこ

ともないから余計に辛かった。

「平気だったけど」

「私も」

「ユメはちよつと大変やったかなあ」

普段から魔法を扱うメリイやシホルは慣れたもので軽々こなし、反面ユメは少し辛そうだ。

男性陣は言わずもがな。

全員が辟易していた。

「えつと、明日からの狩りの事だけど……行きたい場所とかある？」

気分を変えるつもりなのか、ハルヒロが口を開いた。

先ほど指摘された危険性。

リーダーとしてそれを見過ごせないという事か。

「やっぱり俺の実力が発揮される所がいいぜ！」

「どこだよ、それは」

狩場を変える。

言うのは簡単だが具体的な場所は思い浮かばない。

今までそういった情報収集に積極的では無かった所為でもあるが、こういった事はす

べてマナトが仕切っていた事も原因だ。

マナトを失ってからには仇を討つ為の訓練に注力していた。

このパーティーの最大の欠点はこういう情報に疎い所かもしれない。

「……じゃあ私から」

手を上げたのはメリイだった。

「メリイは何処か心当たりが？」

「ええ。……サイリン鉱山」

メリイが口にした名称に誰もが驚き、黙り込んでしまう。

そこは彼女にとって忘れられない忌むべき場所だったから。

それでもメリイがサイリン鉱山に行こうというのであれば反対する理由はない。

結局、反対意見も上がらぬまま、明日以降の狩りはサイリン鉱山で行う事に決まった。

◇

オルタナから離れた位置にある森の中。

そこは狩りの対象になる異種族も存在せず、重要な拠点でもない寂れた場所だった。

しかしだからこそ身を隠すには絶好の穴場でもある。

ましてやギルドと敵対している追われる立場の身ともなれば使わない手はない。

故にこの森は反ギルドが使用する拠点の一つとなっていた。

そんな森の奥に建てられた隠れ家では一人の女性が身を躡めていた。

先の戦闘で手傷を負ったアラディナであった。

あてがわれた部屋に常備されていたテーブルやイスは無残な姿に変わり果て、床には彼女の愛剣が突き刺さっていた。

そうなった理由は簡単だ。

アラディナが苛立ちに任せて、すべて破壊したのである。

「アナスタシアめ！」

すでに仲間の神官による治療で傷は癒えたものの、心に刻まれた屈辱までは消えはしない。

あの対戦に備え、新たな武器を手に入れ、万全の対策を練った筈。

それをあかも容易く打ち破られ、さらには返り討ちにされるなど。

「次こそ！ 次こそは！」

屈辱を糧に固く誓うアラディナ。

そんな彼女の耳に何かの音が聞こえてきた。

ある程度落ち着きを取り戻したアラディナが様子を見る為に外に出る。

隠れ家の外にある庭では少年が剣を振るっていた。

剣を逆手に持ち、もう片方の手ではナイフを器用に握っている。

「ハ！」

投げたナイフは用意された的へ正確に突き刺さり、振るった剣は確実に舞い落ちる木の葉を斬り裂いた。

見事な腕に笑みを浮かべながらアラディナは少年に声を掛けた。

「今日はずいぶん気合が入ってるね、ジュンヤ」

「アラディナか。別に、単に何時もの日課をこなしていただけだ」

「日課ね」

その割に鍛錬はいつも以上に熱が入っていたように見える。

表情まで猛々しいのだから何かあったのは一目瞭然だった。

「そんなにあの義勇兵達が気に入らないのかしら」

アラディナの指摘にジュンヤは僅かに視線を鋭くする。

「……別に、どうでもいい。それにあんな奴ら、この先生き延びる事すらできない。すぐにのたれ死ぬだけだ」

そう言いながらも明らかにあの義勇兵達を意識しているのが分かる。

余程彼らの存在がジュンヤの神経を逆なでしているらしい。

「そんなに邪魔なら始末すればいいでしょう？」

「……どうでもいいと言った筈。それに勝手に動くなど釘を刺されている事を忘れたのか？」

「そう。まあ、貴方が良いならこれ以上は言わないけどね」

アラダイナの見透かしたような視線を受けながら、ジュンヤは別方向へ顔を向ける。

視線の先にあるものは数多の義勇兵達が集う街『オルタナ』

ジュンヤの眼はオルタナに居るであろう義勇兵達の方へと向いていた。

第十四話 不和

森の中に存在する反ギルドの拠点。

その隠れ家に併設された庭から風切り音が響く。

それには出入りする者ならば馴染のある音だった。

「今日もやってんのか、ジュンヤの奴は」

大剣を背負った男はニヤリと笑い、庭に顔を出すと想像通りの光景が広がっていた。

そこではジュンヤは日課である訓練に勤しんでいる姿があつた。

変わっているところがあるとすれば、いつもより苛立っているように見える事だろうか。

「よう、随分イラついてるみたいじゃないか」

男に気が付いていたのか、ジュンヤは特に反応もせず黙々と訓練を続けていく。

「……何か用？」

「相変わらず愛想のない奴だな。まあいい、仕事だ」

手渡された紙を受け取ったジュンヤは書かれた内容に目を通していく。

「今回は情報収集だけ？」

「ああ。前に動いていた奴はアナスタシアに捕まっちゃったからな。その補填だよ」
ギルドが密かに動きを見せている。

大規模な作戦の準備を行っているのかもしれない。

それを調べて来いという事だ。

「分かった」

手紙を胸元に仕舞ったジュンヤは準備の為に自分に割り当てられた部屋へ向かう。

その背中に男が嫌らしい笑みを浮かべながら、声を掛けた。

「ところで何でそんなにイラついてる？ 例の義勇兵達がそんなに気に入らないのか？」

ジュンヤは何も答えない。

ただ一瞬だけ足を止め、再びすぐに歩き出す。

「わかりやすい奴」

あんな素直に反応していたら気にしていると云っているようなもの。

男はそれ以上は何も言わず、面白そうにジュンヤの後ろ姿を眺めていた。



オルタナで準備を整えたユキト達はダムローを離れ、新たな狩場に足を踏み入れようとしていた。

その場所はサイリン鉱山。

新しい狩場に少しだけ高揚しているユキトとは違い、歩いているパーティメンバーの表情は固い。

緊張しているのが傍からでも丸分かりだった。

「結構遠かったな」

「何時もより遠くだから、そう感じたのかもね」

緊張気味なハルヒロの声にユキトは出来るだけいつも通りに振舞いながら、そびえ立つ山を見上げる。

サイリン鉱山はダムローからさらに北西に移動した先にある山だ。

距離的には約4キロ。

初めての道のりを警戒しながら進んだ所為か、思った以上に時間が掛かったものの、無事に辿りつく事ができた。

「あれがサイリン鉱山か」

「見た目はただの山だけだな」

「あそこは昔、アラバキア王国がまだこの辺で活動していた頃に開発されてた鉱山で、諸王連合の侵攻を受けてからはずっとコボルド達が支配しているの」

一番詳しいメリイの説明を聞きながら、道なりに進んでいく。

生い茂る森を抜け、山の麓までたどり着くとそこから遠目で鉱山の入り口を発見する事ができた。

「あそこから中に入れるわ」

「よし、皆油断しないように行こう」

先導するハルヒロの後について全員が続く。

その時だった。

「えっ？」

道なりに進んでいたハルヒロ達の前に突如、見たことのない生物が現れたのだ。

数は3匹。

犬のような頭部と毛むくじやらの体。

さび付いた剣を持ちボロボロの鎖帷子を身につけている。

「コボルド!?!」

メリイの叫びに全員が固まった。
コボルド。

サイリン鉞山を根城にしている種族であり、これから戦う事になる敵。予期せぬ遭遇に双方、僅かの間動きを止めた。しかしすぐに我に返ると同時に武器を抜き放つ。

「行くぜ、モグゾー、ユキト！」

ランタの声に合わせ、モグゾーとユキトが前に出る。

「メリイとシホルは下がって！俺とユメで三人を掩護！」

ハルヒロの指示に耳を傾けつつ、ユキトはコボルドと対峙する。

「ふもー！」

「おらー！」

飛び出したランタとそれを掩護するモグゾー。

しかし攻撃は軽やかな動きで躲すコボルドを掠る事もできずに空を切る。そして逆にボロボロの剣の一撃が二人に襲い掛かった。

「思ったより速い!?!」

「ッ、この！」

ボロボロとはいえまがりなりにも剣だ。

鉄の塊の直撃を受ければ、鎧の上からだろうがその衝撃はかなりのものとなる。それを知っている二人は大きく飛びのき、コボルドから距離を取った。

ユキト、ハルヒロも戦闘を開始する。

しかし初見の相手故か、相手の思わぬ動きに翻弄され、上手く攻撃が通らない。

「あの尻尾が邪魔で背後が取れない」

ゆらゆら揺れるコボルドの尻尾にイラつきながら、ハルヒロが吐き捨てる。

確かにそうだ。

毎夜の訓練の成果かコボルドに脅威は感じない。

動きを見る限り、決して敵わない相手ではないと分かる。

にも関わらず苦戦しているという現実に動揺が隠せない。

「これってやっぱり師匠が言ってた——」

ゴ布林に対して最適化された戦い方になっている。

その所為で皆の動きが鈍いのだとしたら。

「不味い」

コボルドの一撃を弾き飛ばし、蹴りを入れて突き放した。

「邪魔なんだよ！ 皆は？」

敵を警戒しながらさりげなく仲間達の様子を伺うと、思った通り動きが鈍く見える。

いや、鈍いというか、コボルドの動きに戸惑っているというのが正しい。

「くそ」

具体的な考えが纏まらないまま、どうにか流れを変えようとコボルドに向けて剣を向ける。

しかし意外な所から状況打開の切っ掛けが飛び込んできた。

辺りに響いた強烈な打撃音。

そこには錫杖片手にコボルドを殴り倒したメリイが立っていた。

戦闘中である事も忘れてしまう程に凛々しい姿。

それに全員が目を奪われる中、メリイの声が木霊する。

「敵はレッサーコボルド！ 決して手強い相手じゃない！ 夜の訓練を思い出して！

皆なら絶対勝てる！」

「おー、メリイちゃんカツコイイなあ！」

「うん」

「二人共感心してる場合じゃないでしょ！」

女性陣の声を聞きながら、ユキトはハルヒロ、ランタ、モグゾーと目配せする。

変な気分ではあるが、全員と気持ちを通じ合ったような気がする。

伊達に毎晩一緒にポコポコにされている訳ではない。

こんな時の考えくらいなら顔みただけで分かる。

「いぐぞ」

シホルの魔法とユメの弓矢でコボルド達をかき乱している間にそれぞれが走り出した。

もうそこからは型に嵌まったように全員の動きが変わっていた。

いつも通りの自分達。

当然の事ながらレッサーコボルトに遅れなど取らない。

「ハア！」

コボルドの武器を弾き、さらに拳を振るって鼻先に打撃を加える。

大ダメージは期待できない目くらまし程度の威力しかないが、敵を怯ませるには十分すぎる。

鼻先の一撃にフラフラと体勢を崩したコボルド。

その背後から近づいたハルヒロの一撃が炸裂、碌に抵抗もできないまま絶命する。

一体を片づければ後はその勢いのまま、危うげなく敵を撃退する事ができた。

「オツシヤ!!」

「勝ったね」

「俺のおかげだな！」

劍を肩に担ぎ、自慢げに胸を張るランタに女性陣の冷たい視線が突き刺さる。

「何言うてんの。全部メリイちゃんのおかげやんか」

「うん。格好良かった」

「ご、ごめんなさい。でしゃばるような事して」

賛辞するシホルとユメに顔を赤くしながらも、メリイは頭を下げた。

「そんな事ない、と思う。謝る事はないんじゃないかと……」

シホルのフォローは珍しいと思いつつも、斬り殺されたコボルドの死体の前に膝をつく。

「武器とかは……ポロポロ」

「回収しても売れなさそうだな。でもこれなら」

隣に座ったハルヒロがコボルドの鼻先を指さす。

そこには鼻飾りのようなものが付けられていた。

「なんだろ、これ」

「それはタリスマンよ。どのコボルドも必ずタリスマンを持っているの」

死者を悼む為六芒星を切りつつ傍に座ったメリイがコボルド達の事を教えてくれた。

鉾山の外や一層に住むコボルド達はあぶれ者のような存在であり、身なりや所持して

いる物も大した事はない。

時に銀貨などを持つている場合もあるらしいが、大抵倒しても稼ぎにはならないらしい。

狙うならレッサー以外のコボルド。

特に鉱山の三層より下にいる支配階級であるエルダーコボルドはゴブリンよりも儲けになるらしい。

「なるほど。じゃ、レッサー相手の時は銀貨とか持つてればいい方か」

「ええ」

「ならよ、さっさと行こうぜ」

ランタがタリスマンを死体から強引に引きちぎると、ハルヒロはどこか辛そうに顔を逸らす。

ランタは相変わらずだが、ハルヒロは――

考えている事はおおよそ分かる。

ランタは特に考えていないのか死体を乱暴に扱う事にためらいがない。

これは暗黒騎士故か完全に割り切っているからなのかは分からないが、とにかく遠慮がないのだ。

反面ハルヒロは違う。

死体であろうとも、丁寧に扱うし、物を回収する際もできるだけ傷つけない。

良心の呵責のようなものを感じているのかもしれない。

人によっては偽善と言う者もいるだろうが、それがハルヒロらしいと言えばらしい話だ。

どちらも個人の主義だし口出しはしないが、だからこそ懸念している事がある。

それは二人の相性が良くない事。

日々のストレスと考えの擦れ違いは確実に二人に累積している。

リーダーとしてのプレッシャーを感じているハルヒロは特にそうだろう。

それが致命的な亀裂になる可能性もある。

「ハア、何とかフォローできればいいけど」

ユキトは消えない不安をどうにか飲み込みながら、鉱山へ入ろうとする仲間の背中を追っていった。



鉱山の中に足を踏み入れた瞬間、予想外の光景に足を止めてしまった。

思った以上に広い空間に所々に光を発する花のようなものが点在している。

夜空のようにとまではいれないが、どこか幻想的な雰囲気が出ているように感じられ

る。

あれはヒカリバナと呼ばれるもので、鉱山内部で自生しているらしい。

おかげで視界が奪われる事もなく、先に進む事ができる。

それに関しては良いのだが、パーティの雰囲気はお世辞にも良いとは言えなかった。

「……これ、不味いよね」

パーティから一步離れて後ろを歩いてきたユキトは先ほどの不安が的中していたのを痛感していた。

「そうね。今日は無理しないほうが良いかも」

いつの間にか隣に並んでいたメリイも同意してくる。

パーティはユキトとメリイを除き全員がピリピリした空気を纏っていた。

普段なら簡単に流せるランタの軽口に過剰に反応する程に余裕というものが見られない。

ゴブリン以外との戦闘。

初めて足を踏み入れた狩場。

そして神出鬼没なデットスポットと呼ばれる怪物の存在。

それらの緊張感が皆から普段の余裕を奪っているのだ。

「それ引き換えユキは冷静ね」

「そうかな？　もしかするとオークとの戦闘を経験したからかもね」
あの時、自分は死んでいてもおかしくなかった。

いや、レンジ達が来なかったら確実に死んでいただろう。

それはあの『傷持ち』と遭遇した時も同じ。

そんな極限状況を味わった為か、ユキトは他の皆よりも余裕があった。

「……でもハルヒロは逆だったのかもしれない」

リーダーとしてのプレッシャーに加え極限状況を味わったが故に、ハルヒロは皆の死を強く認識するようになった。

だから誰よりも余裕がない。

「いい加減にしろよ！　何かまずい事が起きたら誰か死ぬかもしれないんだからさ」

「わかってるっつーの！」

より險悪さを増すハルヒロとランタの言い合い。

流石にこれ以上は不味い。

ユキトはメリイに目配せすると素早く二人の間に割り込んだ。

「まあまあ、二人共落ち着いて。ここで喧嘩してもしようがないだろ。それよりメリイ、サイリン鉾山内部の事を教えてくれないかな？」

「分かった」

明らかな話題逸らしだが、ユキトの意図を読み取ってくれたメリイはそれに乗ってきてくれる。

サイリン鉱山は10層以上に亘る広さがあり、今いる一層の鉱脈はとづくに枯渇しているらしい。

一層からさらに下層に向かうには井戸と呼ばれる縦穴を使う必要がある。

三層から下にはゴンドラもあるらしいが、義勇兵は井戸を使うのが基本のようだ。

「さつきも言ったけどコボルトの中には支配階級のエルダーコボルトがいるんだけど、ゴンドラを使えるのは基本エルダーだけ。普通のコボルトはエルダーの許可なしでは乗れないみたい」

「エルダーってずいぶんえらそうやなあ」

「ふふ、そうね。二層からは普通のコボルト、ローワーカー達の居住区だからそこからが本番だと思って」

「分かった」

メリイの解説のお陰かピリピリした気配はあるものの、パーティの雰囲気は表向きいつも通りに戻っている。

今回の狩りはいつも以上に大変な事になりそうだ。

「何も無いに越したことはないんだけど」

仲間の不安と敵に対する警戒。

二つの心配事を抱えつつも、慎重に進んでいくとメリイが言っていた縦穴が姿を見せた。

これが井戸と呼ばれている穴だろう。

やや歪な形ではあるが縄梯子が備え付けられており、人が降りるには十分な大きさがある。

「結構高さがあるね」

「ああ。この下にもコボルド達が待ち構えているんだろうし——」

「びびってんじゃねーよ」

躊躇うハルヒロ達を尻目にランタは迷わず縄梯子を降りていった。

こういう時のランタの思い切りの良さは長所だと思う。

「僕達も行こう。迷ってたって仕方ないよ、何時かは降りないといけないだし」

「……そうだな」

迷うハルヒロの背中を押すように軽く肩を叩くとユキトは梯子を使って下へと降り始めた。

二層。

この層は一層とは様子が大分違う場所だった。

坑道のような縦長の通路と壁に無数の穴が開いている。

どうやらあの穴がコボルド達のねぐらになつてゐるらしい。

所々からいびきのような音が聞こえてくる。

「これ起きたら不味くないかな？」

「いつも騒がしいからコボルド達は滅多な事じゃ起きない」

メリイの言葉通り、いびき以外にも喧嘩の叫び声のような奇声が遠くから聞こえてくるがコボルド達が起きてくる気配はない。

「でも起きてきたりしたコボルドと遭遇する場合もあるけど」

「相手が気が付く前なら眠つてゐるコボルドのねぐらか岩陰に身を顰めれば大丈夫」

大抵の場合は寝起きか、作業の所為で疲労困憊らしく、身を隠すだけでコボルド達は気が付かないそうだ。

警戒していれば挟撃される可能性も大分低くなるだろう。

「ならよ、眠つてる今の内に仕留めた方が良くね？」

「さつきも言ったけどここに居るコボルド達はローワーカーだから、稼ぎの割に危険の方が大きくて割に合わないと思う」

眠つてゐるコボルド達を仕留めるには狭い穴の中を進む必要がある。

仕留める事が出来るなら良いが、そこで敵が目覚ましてしまえば逃げ場がない。

しかも数が多いうえに労力も掛かる。

その割に稼ぎも少ないとなると、無視した方が無難であろう。

「三層以降にいるエルダーは要注意。それからデッドスポットにも」
メリイの仲間の仇。

噂ではデッドスポットは一層にも出現するという話もあるようだが、具体的な目撃例はないからあまり考える必要はないとか。

しかし二層から下は別。

ここから先は遭遇する可能性がグッと高くなる。

「もしも遭遇したら……逃げるしかない」

「……注意して進もう」

盗賊であるハルヒロが周囲に気を配り、モグゾーが先頭。

そこから皆が続き一番後ろにユキトが付いた。

警戒しながら三層へと降りる為の井戸へ向かって歩いていると、ハルヒロが全員に止まれる合図を出した。

「……居るぞ」

咄嗟に岩陰に隠れながら、ゆっくりと顔を出すとそこには数匹のローワーカー達が佇んでいた。

合計4匹。

何か揉めているのか、激しい唸り声を上げており、丁度その先に井戸が見える。つまり先に進む為にはこいつらを倒す必要があった。

「ここは作戦を立てて慎重に」

「寝ぼけんな、さっさとやっちゃまえばいいんだよ」

「お前はまたそんな事を」

再び揉めるハルヒロとランタに頭を抱えそうになる。

しかしその前に二人の声に反応したのか、コボルド達がこちらに向かってきた。

「二人共、揉めるのは後だ！」

「うっ」

「くそ」

バツが悪そうに顔を逸らした二人は同時に岩陰から飛び出し、武器を構えた。

こういつた所は実に息があつていると思うのだが。

「それは後か。モグゾー！」

「うん！」

最初に飛び込んだのはモグゾー。

振りかぶられたローワーカーの攻撃を体捌きと鎧の小手を上手く使い外へ向かって

弾き飛ばすと、一步大きく踏み込む。

「どうもー!」

そして上段から一撃がローワーカーの持つシャベルを弾き飛ばし、さらに肩に深々傷を刻み込んだ。

「凄い、モグゾー!」

上手い。

ユメが称賛するのも納得だ。

その体格を駆使した防御のみならず、敵の攻撃を的確に捌く技術に磨きがかかっている。

こうまで技術が向上している理由は間違いなく毎晩の訓練のお陰だ。もしかすると訓練の成果が一番出ているのはモグゾーかもしれない。

「負けられない!」

力ではモグゾーに及ばないが、速度はユキトの方がある。

ユキトは前傾姿勢のまま、ローワーカーに向かって突進。

速度を落とさないうままショートソードを叩きつける。

狙いはいつも通り首だ。

力で劣るユキトは鎧の上からでは致命傷を与えづらい。

故に狙うなら急所だ。

ローワーカーは飛び込んできたユキトに対する反応が遅れ、守りを固めるので精一杯。

ガキツという金属音が鳴り、横薙ぎに払った一撃はシヤベルで受け止められてしま

う。
モグゾーのような力はないから押し切る事はできない。

鏢競り合いのような形になるが、それで十分だ。

「力が無くてもやりようはある！」

剣の角度を変え、下から掬い上げるようにシヤベルを弾く。

上にシヤベルを弾かれたローワーカーの懐はガラ空きだ。

すかさず引き抜いたもう一本の剣を喉元に突き立てた。

「グギヤア！」

悲鳴を上げて痙攣するローワーカー。

その背後から忍び寄ったハルヒロのダガーが頭蓋に突き刺し、止めを刺した。

残りのローワーカーはモグゾーとユメ達によつて倒され、残りは一匹。

ランタが動き回る最後のローワーカーに剣を振り続けている。

「こいつは俺が倒す！ お前ら手を出すんじゃねえ！ オラアア！」

愛剣であるロングソードを振り回し逃げる敵に攻撃を繰り返し続ける、ランタ。あそこまで攻撃が当たらないなら、一度仕切り直した方が良いと思うのだが。他の皆はと言えば呆れた様子でランタの戦いを見ている。

その雰囲気は過去最悪なものかもしれない。

「……ハア」

この先の狩りに不安が募る。

しかしすぐにはどうにか出来る訳もなく、ランタの怒声を聞きながらユキトはため息をついた。

第十五話 遭遇

いつもの如く紅き月に照らされたオルタナの街。

ユキトはいつも通りの訓練を終えた後、義勇兵宿舎の庭で鎧を着込んだままシヨートソードを振るっていた。

「ハー！」

剣を振るう度に風切り音が庭に響き渡る。

狩りに夜の訓練と続け様に動いた後だから体に疲労は溜まっている。

無理は禁物。

故にゆっくり確実に型をなぞるように剣を振る。

イメージするのは今日戦ったコボルトだ。

素早い動きをいかに止め、致命傷を与えるか。

それを考えつつ、イメージ通りに動けるようになるまで続けていく。

「もっと速く、もっと正確に」

少し剣速を上げ、柄を握る手に力を込めた。

訓練に熱が込められようとした瞬間、それを阻む足音が聞こえてきた。

「ユキト、また訓練してたのか？」

近づいてきたのはハルヒロだ。

いつも通りの眠そうな目をしながら、ゆっくりと歩いてきていた。

「ああ、ちよつとな。こんな夜遅くに呼び出してごめん、ハルヒロ」

「いや、いいけどさ」

どこか戸惑い気味に答える、ハルヒロ。

呼び出された理由が分かっているのか、どこか気まずそうだった。

「……それで話して？」

「ここじや何だし、少し飲みに行こうよ」

「え、おい」

戸惑うハルヒロを強引に連れ出し、シエリーの酒場に顔を出す。

もうすぐ閉店という時間からか店で飲んでいる客の数は少ない。

それでも騒がしい奴は騒がしいらしく、下品な笑い声が響いてくる。

「結構派手に騒いでるな」

「絡まれないように避けて——ん？」

いつも座っている席に視線を向けるとその途中で気になる人物を見つけた。全身にローブのようなものを纏い、顔も分からない。

いかにも胡散臭い人物だった。

「ユキト？」

「あ、いや、何でもない」

何となくこちらを見ているような気がする。

何故か嫌な予感が止まらない。

しかしフードの人物が振り返る様子はなかった。

夜だし、ああいう人も居るのだろう。

それに自分に戦い方を教えてくれた師匠だって、全身ローブに仮面をつけている有様だ。

世の中には色々な人がいると言う事。

無理やりそう言い聞かせたユキトはローブの人物から目を逸らし、隅の席に陣取るとビールを二つ注文する。

「話つていうのは今日の狩りの事、ていうかランタの事だよ」

主題は今日の狩りの件。

この話をする為にわざわざ訓練が終わった後でハルヒロを呼び出していたのだ。

それをハルヒロも分かっていたのか、動揺する事もなくため息をつく。

「……やっぱそれか」

「まあ。ランタは良くも悪くもいつも通りだったけど、ハルヒロは今日一段と余裕が無かった気がしたからね」

その理由もおおよそ検討はついてはいるが、ユキトからは何も言わない。

ハルヒロから直接理由を聞きたかったからだ。

悩んでいるなら出来る限り力になりたい。

ハルヒロはしばらく俯いているとポツリと呟いた。

「ユキトはランタの事どう思ってる？」

「どうって、まあ思う所は色々あるけど仲間だろ」

「……うん、俺もそれは分かっている。でも、こう何ていうかパーティの和とかさ、そういうのも考えて欲しいっていうか」

「……あ〜」

その気持ちはわかる。

何というかランタの空気の読めなさは確かに腹立たしい気持ちにはなる。率先してもめ事を起こしているのではと疑いたくなる事すらあるくらいだ。

「それはまあ分かるけど」

「俺だって頭ごなしにアイツだけが悪いとは言わないさ。でも……」

ハルヒロは何か苦い苦しい思いを飲み込むように運ばれてきたビールを煽る。

「だからランタは邪魔だと？」

「そんな事はない。……ただ直す所は直してほしいというか。それが原因でまた……マナトみたいに、誰かが死んだりしたら俺は」

やっぱりハルヒロの根底にあるものは、仲間を失うかもしれない恐怖とそして自分への自信のなさだ。

どうにか自信を持ってもらいたいけど、多分これは指摘してもきつと治らないと思う。

「……なるほど。でもあえて言うけどランタは僕達のパーティーには必要だと思う」
確かにランタには問題がある。

それでもランタは自分達には必要だと断言できる。

パーティーメンバーは結成当初から良くも悪くもリーダーに寄り過ぎている。

完全なイエスマンという訳ではないが、ほぼ全員が基本的にリーダーに意見するとい
う事がない。

マナトの時も。

そして今、ハルヒロの時もだ。

でもそれでは視野が狭くなり過ぎる。

そういう意味でリーダーに対して遠慮なく意見が言えるランタの存在は必要不可欠だと思うのだ。

まあ、もう少し空気を読んでもらいたい時が多々あるのは事実だが。

「……なあ、やっぱりさ、ユキトがリーダーになつてくれないか？俺がリーダーとか向いてないって」

「駄目だよ、それは。僕じゃみんなを引つ張つていく事は出来ない。パーティーの中で適任者はハルヒロだけだ」

「けどさ」

「ハルヒロ、前も言ったけどフォローはするし、今回みたいな事があつても相談に乗る。ただ一つ言っておきたいのはマナトの真似をする必要はないって事」

「え？」

「ハルヒロはハルヒロなりのやり方で良いって事だよ」

「簡単に言うなよな」

愚痴を漏らした事で少し気分が変わつたのか、いつも通りの雰囲気に戻つたハルヒロは苦笑しながらビールを飲む。

それに合わせユキトもまたビールが注がれたジョッキに口を付けた。



二人が話を終えシエリーの酒場を出たのは、随分遅い時間になってからだつた。

「結構、遅くなつたな」

「うん。明日も早いし、戻ろう」

ビールは一杯しか飲んでいないし、酔いは全然回っていないけど朝は早い。

寝不足は集中力を奪うし、致命的な隙になる場合もある。

さつさと戻って休むのが吉だ。

足早に義勇兵宿舎に向かつて路地裏を歩く。

相変わらずこの辺りは暗く、ゴミの散乱で道も汚い。

袋に入れられ纏められているゴミはまだマシな方だ。

設置された松明が無ければ、足元も見えず中身の入った酒瓶や捨てられた食べ物らし

きものに蹴躓いていただろう。

明りに照らされたゴミに顔を顰める。

「相変わらず汚い場所だなあ……ハルヒロ？」

横を歩くハルヒロの顔が険しい事に気が付いた。

明らかに様子がおかしい。

何かあったのか、聞こうとするとハルヒロが口を開いた。

「……つけられてる」

「ッ!？」

ユキトの中の緊張が一気に高まる。

「……一体誰が」

「さあ。面倒な事だけは確かだと思うけど」

警戒を強めた二人の様子につけてきていた相手も気が付いたのか、あっさりと姿を見せる。

物陰から姿を見せたのは、シエリーの酒場に居たローブを着込んだ人物だった。相変わらず性別すら分からない。

しかし滲み出る殺気はこちらに向けられている。

友好的な要件でない事だけは確かだった。

「……俺達に何か用？」

ローブの人物に問いかけるも、答えは返ってこない。

不穏な空気だけが漂い、緊迫感だけが高まっていく。

それに耐えきれず再びハルヒロが問いかけようとしたその時、事態は動いた。

ロープの人物が腰を落とすと細剣を構えて突っ込んできたのだ。

「ッ、速い!？」

目にも止まらぬ速度で駆けるロープの人物。

一足飛びで間合いに踏み込むと手に持った細剣でハルヒロに突きを放つ。

「やらせるか!」

反応できたのは普段からの弛まぬ訓練のお陰か。

剣を構えていたユキトはギリギリのタイミングで割って入る事に成功。

剣と剣が激突し、甲高い金属音が鳴り響いた。

「ッ、一体、何者だよ!」

殺意の籠った強烈な一撃に歯を食いしばって耐えながら、相手を問いただす。

しかしフードの人物は質問には答えず、即座に追撃を仕掛けてくる。

「くっ」

再び繰り出される突きの一撃。

反応も出来ないまま、刃が頬を掠めていく。

不味い。

止められない。

咄嗟の判断で盾代わりに構えたのは剣の腹。

眉間を捉えた鋭い一撃をどうにか受け流し、致命傷を避ける事に成功する。

「くう」

凄まじい速さだ。

正直、防げたのが驚きな程である。

しかし危機は終わらない。

敵は腕を引き、さらなる追撃を仕掛けてきたからだ。

「なうー」

剣で止められないと判断し、臆せず左拳を突き出し籠手に当てて刃を弾いた。

相手にとっては予想外の行動だったのか、僅かに相手の体勢も崩せた。

その隙に仕切り直そうとしたユキトは次の瞬間、驚愕する。

ロープの人物は剣の弾かれた勢いに逆らわず、流れに身を任せるように体を捻ると右

足を蹴り上げてきたのだ。

「なっ!?!」

強烈な蹴りがユキトの右肩に直撃し、今度はこちらの体勢が崩されてしまう。

「ぐあ!!」

「ユキトー!」

そんなユキトの隙を見逃す程、相手も甘くはない。

即座に目にも止まらぬ追撃がすぐさま迫ってきた。

蹴りを受けた右手は痺れて動かせない。

しかし迷っている暇もなかった。

故にユキトを突き動かしたのは単純な反射。

日頃の訓練の賜物。

飛んできた剣閃を咄嗟に左手に持ち替えたショートソードをぶつけて防ぐ。

「速、すぎ、だろー！」

目にも止まらぬとはこういう事か。

事前に剣を構えてなければ、抜刀する事すら難しかったかもしれない。

ユキトは我武者羅に剣を振るいどうにか剣戟を受け止め続ける。

だがそれすらも関係ないとばかりに再び剣閃が放たれた。

「ぐう」

繰り返される攻防。

しかしそれも防ぎきれない一撃が籠手や鎧に細かい傷を刻み、徐々に劣勢へとユキトを追い込んでいく。

それでもと必死に相手に食らいつくが、このままではズリ貧だ。

ユキトは防戦一方であり、反撃の糸口すら見つけられない。

「……………」

とんでもない使い手だった。

実力はユキトなどとは比べ物にならない程に格上。

力こそあまり変わらないものの速度は桁違いに速い。

さらに一撃一撃が正確に急所を狙ってくる。

その正確さと速度はあまりに脅威。

こうして持ちこたえられているのは動きが限定される狭い路地裏である事。

そして毎晩行っている訓練の成果が出ている事に加え、防戦に徹しているからだ。

だがそれも長くは持たない。

そもそも根本的な実力が違うのだから当然だろう。

「くっ、どうすれば！」

焦りが隙を生み細剣の一撃がユキトの肩を掠め、再び体勢を大きく崩してしまった。

「しま——」

確実に死をもたらす一撃。

避ける事は出来ない。

冷たい剣の切っ先がユキトの急所に突き刺さろうとした瞬間、今度はダガーを構えた

ハルヒロが割り込んできた。

細剣を得意の蠅叩スワットきで弾き飛ばすと手に持った石を投げつける。

「いー」

だが奇襲染みた一投にも拘わらずフードの人物は首を横に逸らすのみで回避して見せた。

「嘘!?!」

「あの位置から避けるのか!?!」

驚きの反応と言わざる得ない。

それとも初めから予測していたのか?

どちらにせよこれ以上の戦闘は得策じゃない。

実力的に万に一つの勝ち目もないのだ。

「……ユキト、俺が合図したら走れ」

「え?」

ハルヒ口は拾った酒瓶をローブを着た人物へ投げつける。

酒瓶から残っていた中身がばら撒かれた。

そしていつの間にか持つていた松明の火を掲げる。

思いつきリアルコールを浴びた敵は明らかに怯んだ。

あの状態で火を付けられたら一気にローブは燃え上がるだろう。

それを危惧したのか敵は徐々に距離を取り始める。

ハルヒロはその隙を見逃さず、傍にあつたゴミ袋を蹴り上げ叫んだ。

「走れ！」

蹴り上げられたゴミ袋が敵の視界を塞いだ隙に二人は脇目も振らずに走り出した。

狭い裏路地を全力疾走。

とにかく走る。

ここに来て僅か一杯のビールが効いてくるが、どうにか堪えつつ走り続けていく。

「何なんだ、アレ！」

「知らない！ 師匠が言つてた反ギルドの連中かもな！」

角を曲がり、目指すは少しでも人が居る方向だ。

いくら何でも人前で襲い掛かってくる事はないだろう。

「それにしてもやっぱり流石だよ」

「何が？」

「さっきの事だよ。咄嗟の判断力に観察力。やっぱりリーダーはハルヒロしかいな

い」

「煽てるなよ。偶然だつて」

「そんな事はない。僕は君を信じてる」

ハルヒロは大きいため息をつく、頭を掻いた。

そう簡単に自分の事を評価できれば苦労はないと言わんばかりだ。

しかしこれ以上言う事はない。

後はハルヒロが自分でどうにか答えを出す以外にないのだ。

だから何も言わずに黙って走る。

何故ならユキトはハルヒロを信じているのだから。

◇

結局、追撃される事もなく義勇兵宿舍までたどり着いた二人は部屋に駆け込み装備一式を装着してしばらく外で警戒していた。

しかしフードの人物が現れる事は無かった。

拍子抜けしたように顔を見合わせたが、正直助かった。

あいつとまともに戦っても勝ち目はないからだ。

まあ、意図せず夜中に叩き起こす羽目になった他の仲間達からはしつこく詰問される羽目になったのだが。

「たく、お前らの所為で変に寝不足だっつーの！」

「悪かったって何度も謝っただろ、ランタ」

「誠意って奴が感じられないんだよ」

「性格悪いなあ、ランタ」

「……いつもの事だけど」

「うっせーんだよ!」

女性陣からの冷たい視線もなんのその。

ブーブーと文句を垂れるランタの声を聞き流し、サイリン鉱山の坑道を警戒しながら歩いていく。

パーティ全体から滲み出ていた緊張も昨日に比べれば随分マシになっていた。

これならば今日はもう少し先に進む事もできるだろう。

そんな樂觀とも取れる考えだったユキトはすぐにそれが間違いだったと気が付いた。

「み、皆」

敵を見つけ偵察に行っていたハルヒロが何故か焦った表情で戻ってくる。

その青ざめた表情からも何かあった事は一目瞭然だった。

「どうしたの?」

「……いた」

「何が?」

「死の斑……デットスポットがこの先にいた」

ハルヒコの報告に全員の顔が強張った。

サイリン鉞山で最も危険な敵。

それがこの先にいた？

もしも何も気が付かずに進んでいたならば――

背中に冷や汗が流れる。

「……此処を離れた方が良い。下に行く為の井戸は他にも何か所があるから、そつちへ」

メリイの意見に皆からの反論はない。

ランタだけは何時もの如く空気の読めない軽口を叩いていたが、誰一人反応できない。
い。

先ほどまでの余裕のある空気は何処かへと消え失せてしまっていた。

◇

オルタナという街はそこに住まう住人が思う以上に広い街である。

住宅街。

様々な商店が立ち並ぶ商店街。

義勇兵宿舎や辺境軍の詰め所。

そしてオルタナ幾つか点在する治安の悪い区画。

最前線から近く日々変化するこの街を正確に把握している者など誰もいない。

そんなオルタナの一面に存在するボロボロになった一軒の家の地下室。

地下室はかなり広い空間を持ちその中央には小さなテーブルと僅かな光を発するランプが置かれている。

そこに数名の人が集まっていた。

暗がり故にお互いの顔も見えないが、集まった面々はそんな事は気にしない。

構わず口を開いた人物は野太い声を発した。

「なるほど。ま、ギルドの動きは良く分かった。だがなそれとこれとは話が別だぜ、ジュンヤ。勝手な行動を取るってのはどういう事だ？」

テーブルの中央に立つ男が丁度対面に立つフードの人物——ジュンヤを威圧する。

怒りはおろか殺気すら籠った声。

返答を間違えれば即殺されてしまうだろう。

だが並みの人間であれば卒倒しかねない威圧感を前にジュンヤは特に表情を崩す事

無く淡々と答えた。

「別に。偶々アナスタシアの血族を仕留める機会があつたから、仕掛けただけだ」
「理由になつてねーよ。仮にその言い分を認めたとしても、成果なしじゃ流石に見逃す事もできねえな」

確かに独断行動を取つて失敗しましたでは話にならない。

ただでさえ最近はギルド側もこちらを警戒しており、動きづらくなつてゐるのだ。

独断行動の挙句ギルド側にこちらの動きを掴まれましたなんて冗談にもなりはしない。

男の殺気はピークに達し、手元に置いていた自身の獲物を構えた。

そしてジュンヤもただ殺されるつもりはないと腰の細剣の柄に手を添える。

一触即発。

今にも狭い部屋の中で凄惨な殺し合いが始まろうとしたその時、殺伐としたこの場にそぐわない凜とした声が全員の動きを制止した。

「待ちなさい。こんな場所で殺し合うつもりかしら」

全員が入口を振り返ればいつの間にか美しい女性が立っている。

その女性は黒い長髪を靡かせ、黒いドレスに身を包んでいた。

確かに美しい。

しかし見つめる目は氷のように冷たく、身に纏う殺気はこの場にいる誰よりも濃厚な

もの。

さらに立ち振る舞いに一部の隙もなく、彼女もまた尋常な使い手ではない事は一目瞭然だった。

「落ち着きなさい、マジード。ここで暴ればそれこそギルドの連中に嗅ぎつけられかねない」

殺気を放っていた男——マジードは怒りを噛み殺すように拳を強く握りしめるとゆつくり獲物から手を引く。

しかしジュンヤは細剣の柄から手を離せずにした。

目の前の女の危険性を良く知っていたからだ。

「ジュンヤ、貴方もよ。いい加減に武器から手を放しなさい」

何気ない一言。

しかし心臓を鷲掴みにされたような恐怖感にジュンヤは指一本も動かせない。

「おめえの所為だろ。普段から脅かし過ぎで動けないんじゃないかねーのかよ、グローア」

「私は何もしてないけれど」

黒衣の女性グローアが視線を逸らすと感じていた恐怖感が薄らぎジュンヤは思わず膝をついてしまった。

そんなジュンヤを全員が見下し、同時に嘲笑したように口元をつり上げる。

「くっ、ハア、ハア」

「ハ、粋がろうが所詮は餓鬼か。これに懲りたら勝手な行動は慎めよ」

「そうね。今回は見逃しましょう。でもこれ以上勝手な事をし続けるようであれば制裁も覚悟しておきなさい」

思わず二人を睨みつけるがここは従う他に道はない。

膝をつき小さくココリと頷いたジュンヤの

はつきり言つて屈辱だった。

だが暴れ回つてどうにか出来ると思つて程ジュンヤも馬鹿ではない。

マジードはまだしも、グローアは別格。

あのアナスタシアやアラディナと同類の化け物だ。

今、戦うなど無謀もいいところ。

そんな浅慮に走ればたちまち自分は殺されてしまう。

「力がまだ足りない……そしてあいつら」

結局の所、自分自身の力不足、そして奴らを仕留めきれなかつた事こそが原因だ。

ああ、確かに過小評価しすぎていたきらいはある。

そして同時に奴らが思つた以上の実力を秘めていたのも事実。

「だが次はない。必ず殺してやる」

膝をつき首を垂れる自分に浴びせられる嘲笑。

その屈辱に耐えながらジュンヤは誰にも気づかれぬよう殺意という刃を研いでいった。

第十六話 分断

舞い上がる砂煙。

劍の一撃によって発生した衝撃波と共に浴びせられ掛けた砂埃に蹲ったユキトはもろに浴びてしまう。

防ぐ間もなく気管へと入った埃に堪らず咳き込んだ。

「ゴホ、ゴホ！」

煙が晴れ視界の先に見えたのは劍を構えた仮面を身につけフードで全身を覆う人物スクード。

下段に獲物を構えるその姿に隙はなく、発せられる殺気も肌を刺すように鋭い。

横に倒れたモグゾーを気に掛ける暇もなく、再び振るわれた一撃を受け止めるのが精一杯だ。

「どうした、そんなものか」

「ちよ、もう少し手加減を——」

「手加減ならしている。それに手を抜きすぎても稽古にならないだろう？」

鏢競り合いながらも有無も言わさぬスクードの言葉にユキトはグツと反論を堪えた。確かにその通り。

此処でグダグダ文句を言っても何にもならない。

「ふん」

「ッ!？」

スクードは力任せに剣を押し込んでくる。

一見細身な体のどこにこんな力があるというのか。

力負けしたユキトは拮抗状態を維持出来ず、横薙ぎの一撃に弾き飛ばされてしまった。

「ぐあああー！」

「イタタ、ユキトくん大丈夫？」

「うん、とりあえずは」

のっそり起き上がってきたモグゾーと並び、再びスクードと対峙する。

「僕達なんでこんな事になってるんだっけ？」

「……さあ」

そもそもはサイリン鉱山で『デットスポット』に遭遇した事が始まりだった。

アレを見た瞬間、その場に居た全員が現実を意識せざる得なかった。

戦えば死ぬという現実。

すなわちアレに遭遇した時点で逃げる以外の選択肢はあり得ないと。

下手に交戦を選べば過去のメリイ達と同じ轍を踏む事になるのは明白だった。

だから全員で話し合った結果、少しでも戦力を上げる為に新たなスキルを覚えようと決めたのである。

元々例の襲撃でユキトやハルヒロは危機感を覚えていたし、今までの狩りでお金も貯まっていた事もあり反対は無かった。

だからユキトやモグゾーもこうして戦士ギルドで新たな技を教えて貰っていた訳だが、その途中でスクードから提案があったのだ。

『私が今のお前達の実力を見てやろう。稽古にもなるし一石二鳥だろうか?』と。ただ実力差があり過ぎて、正直訓練になっていないというのが実情だが。

結局その後も碌に反撃も出来ず、ユキトとモグゾーは起き上がれない程にボコボコにされてしまった。

「ぐう」

「痛い」

立てない二人を尻目にスクードは自身の剣を鞘に戻すと、これ見よがしなため息をついた。

「まあこんなものか。少しはマシになったが、まだまだだ」
「そりやそうでしょうね」

誰だつて一朝一夕で強くなれたら苦労はない。

毎日の訓練の積み重ねこそが重要。

それが実戦で生きてくる事は身を持って経験済みだ。

そういう意味であの襲撃者はその体現者だった。

鍛え上げられた技量。

積み上げられた経験。

考えつくされた戦法。

すべてが戦い勝利する為、そして生き延びる為にあの襲撃者が積み重ねてきた力だ。それを考えればこの間の戦闘はよくも生き延びられたものだと思う。

「そういえばお前達を襲撃した奴は細剣を使っていたそうだな」

「あ、はい」

あの日の晩に得た相手に関する情報を掻い摘んで話す。

「……という事はジュンヤか」

「知ってるんですか？」

ユキトの質問にスクードは若干葛藤したかのように俯いた。

どうやら迷っているらしい。

しかしそれも僅かで、すぐに口を開いた。

「……奴は元はお前達と同じ義勇兵だ」

「義勇兵!？」

「ああ。最初は盗賊ギルドに所属していたが、後から別のギルドに移籍。その後も色々職を変えて……それからちよつとあつてな。奴はそのまま反ギルドの一員になつた」

その色々あつたというのは聞かない方が良いのだろう。

聞いても多分、気分が悪くなるだけのような気がする。

ユキトはあえてスクードのぼかした部分をスルーすると、例の襲撃者の事を思い浮かべた。

「なるほど、盗賊としてのスキルも持つてるなら尾行なんてお手の物つて事か」

あの時、同じ盗賊であるハルヒロがいなければ追跡に気づかずに奇襲を受けていた可能性もある。

「ああ。それだけでなく中々器用だな。複数の武器を巧みに使いこなす技量を持つている」

つまり細剣以外の武装を使ってくるという事。

益々敵に回したくない相手のようだ。

「でも何で僕らを狙ってくるのかな？」

「普通に考えれば師匠の仕事を手伝っているからだろうけど」

その辺は考えていても答えは出ないだろう。

今の所出来る事といえは奇襲を受けないよう警戒を怠らないようにするくらい。

まあ奇襲でなくとも、正面からの戦闘では実力に差があり過ぎて遭遇した時点で逃げるしか選択肢はないのだが。

「とにかく注意しておけ。ジュンヤはまた狙ってくる筈だ」

「うーん、弱点というか、苦手なものとかないんですか？」

「私が知っている技量は義勇兵だった頃のものだ、参考にはならないだろう。……だがどんな時でも、状況を打開する為の方法というのはある。大切なのはそれに気づけるかどうかだ。それはどんな敵と戦う場合でも同じだ」

「肝に銘じておけ」と忠告を口にしながラスクードはそのまま去っていった。

結局、詳しい事は分からず仕舞い。

しかし少しでも情報が手に入ったのは朗報と言えるだろう。

「僕達も戻ろう」

「そうだね」

劍を肩に担いで歩き出すモグゾーの後に続く。
スキルは覚えた。

劍の技量も前よりはマシになっているだろう。
にも関わらず胸中に渦巻く不安は消えない。

戻ればまた狩りに赴く事になる。

その先でまたジュンヤと出くわしたら――

もしくはあのデットスポットに遭遇したら――

危機はすぐ傍に。

しかし依然として解決の糸口すら見つけられないままだ。

「……まあ、暗くなっているかもしれない」

何にせよ生きる為には狩りに出るしかないのだから。

「よしー」

覚悟を決めパンと両頬を叩いて気合いを入れ直すと、先を歩くモグゾーを追って走り出した。

◇

ヒカリバナに照らされたサイリン鉱山の通路。

薄暗さの残るその道を六人の義勇兵が歩いていった。

周囲の警戒も慣れたもので、襲い掛かったレッサーコボルドをあつさり撃退する。

その様子を岩場の陰からフードを被ったジュンヤが覗き見ていた。

昨夜、マジード達から釘を刺されたばかりだが、あれで引き下がるつもりは毛頭なかった。

それに今回頼まれた仕事は済ませているし、前回の街中と違い今回はコボルド達が犇めく薄暗い鉱山の中。

未熟な義勇兵の一パーティが戻らなかつたとしても、騒ぎになる事はない。

仕留める絶好の好機だ。

以前の夜は連中の力量を図り間違え、尾行しているのを悟られてしまった。

しかし二度はない。

絶対に気が付かれないように一定の距離を保ちつつ、機会を伺う。

だが、なるほど。

改めて観察してみれば確かに実力を増しているようだ。

だがそれでもまだまだヒヨッコである事に変わりはない。

「……………今日こそ消してやるぞ」

ジュンヤの脳裏に浮かぶ過去の情景。

それが前を歩く義勇兵達と重なり、重く暗い憎悪の炎が燃え上がってくる。

殺意が漏れないよう静かに呼吸を整え慎重に尾行を続けながら、先を歩く義勇兵達の背中を睨み続けていた。



ユキト達の探索は思った以上に順調に進んでいた。

これは新たに覚えたスキルが有効に働いたというのものもある。

だがそれ以上にサイリン鉱山での戦闘に慣れてきた事が大きな要因としてあった。
ゴプリン以外の新たな敵。

狭い限定空間。

ある程度の明かりがあるとはいえ周囲は薄暗く、死角も多い。

それらのプレッシャーは自然とパーティから心理的な余裕を奪っていた。

それらの事柄によりやく全員が慣れてきたのである。

「ッー」

コボルドの剣がユキトの鼻先を掠め、器用に振るう尻尾が追撃を掛けてくる。

しかしその攻撃はもうとっくに見切っていた。

余裕で身を屈め、尻尾を躲すとすぐに距離を取った。

しかしここは狭い通路であり、飛びのくだけでもすぐに岩壁によって阻まれてしま
う。

それを見たコボルドは嫌らしい笑みを浮かべて突進してきた。

逃げ場を失った獲物を見て好機だとも思ったのだろう。

だが、そんな事は重々承知の上。

「わざわざ突っ込んできてくれるとはね」

そんな単純な動きに意味はない。

ユキトはあっさりコボルドの突進を回避すると、すれ違い様にショートソードを振り抜いた。

肉を切る感触が手に伝わり、鮮血が舞う。

さらに返す刀で背中からコボルドの背中に突きを放った。

「ハッ！」

ボロボロの鎧では防ぎきれなかった一撃。

鎧を貫通した刃はコボルドの心臓を確かに捉え、息の根を止めた。

突き刺さった剣を引き抜こうと力を込めるとそれを好機と捉えたのか一匹のコボル

ドが斬りかかってきた。

しかしユキトは慌てない。

何故ならば前線で戦う戦士はユキト一人ではないのだから。

「ふもー」

巨体に似合わず素早くユキトの前に立ちふさがったモグゾーが横薙ぎに剣を振るう。

持ち前の怪力から繰り出される一撃が発せられる凄まじい風切り音と共にコボルドを吹き飛ばした。

「近くで見ると改めて凄いな」

コボルドが盾代わりに使った剣は大きく歪み、直撃を受けた頭部はトマトのように潰されている。

相変わらず圧倒的な威力だ。

若干の悔しさとそれを上回る頼もしさを感じつつ、他のメンバーの方を見る。

そちらも大した苦戦もなくコボルド達を倒す事ができたようだ。

「おっし！ 今日絶好調！ このまま下の階層に行こうぜ！」

「ランタ、お前な」

相変わらずのランタの物言いにため息が出そうになるがユキト自身は五層に行くのは反対では無かった。

その理由は今いる階層の狭さにある。

パーティの現在地はサイリン鉱山第四層。

この階層は農場と呼ばれ、ヒカリバナ以外の奇怪な植物も無数に生えている。

これらはコボルド達の食料なのだろう。

だが問題はそこではなく無数に組まれた柵にあった。

多くの柵で囲いが生まれ、その中では豚のような鼠のような妙な生き物が跋扈している。

義勇兵では豚鼠と呼ばれている生き物らしい。

この柵の所為でただでさえ狭い鉱山内はさらに狭くなっており、慣れてきたとはいえ戦いづらいためである。

わざわざ戦いづらいためこの階層に拘る程、おいしい獲物がある訳でもない。

それならこの下の階層に降りた方が戦いやすい分、リスクも少しは減る。

さらに柵の中にいるのは豚鼠だけではない。

手も足もなく、尻尾もなく、胴体は長太い豚蚯蚓と呼ばれる生き物もいるのだ。

これが何というか生理的に受け付けない。

女性陣からの評判も悪く、「気持ち悪い」と顔を引きつらせていた程。

さらにこいつらは死体となったコボルド達を貪り喰らう。

こちらが倒した獲物の死体処理には便利なのだが、その光景は出来れば思い出したくない。

こんな生き物を視界に入れて探索するのは正直堪える。

「んで、どうすんだ？」

ランタが剣を肩に担ぎ、挑発するように告げる。

相変わらずの物言いにまたハルヒロと言い合いになるかと思つたが、何か堪えるように軽く頭を振つただけ。

どうやらハルヒロなりに前の夜に話した事を考えてくれたらしい。

まあ、頭にくるのも良く理解できるのだが。

「パルピロ？」

「誰がパルピロだ。……五層に降りよう。ただし慎重に」

ハルヒロの言葉に誰も反対意見を言わなかった。

井戸に設置された縄梯子を下り、五層に到達するとそこでは明らかに上層にはなかった熱気がパーティーを出迎えた。

暑い。

ジツとしているだけでも汗が滲んでくる。

「何でこんなに暑いんだよ」

「……多分、アレのせいだと思う」

シホルが指さした先にあつたのは熱を発する炉、それが大小、無数に並んでいた。それを見張る為かエルダーたちの監視所のような場所も見えた。

「どうやらこの階層は精錬所らしい。」

「いくつか穴場があるから、そこに行きましょう」

「穴場？」

「ええ。稼働してない炉とは別に閑散としているところがあると思うけど、そこにエルダー達が顔を出すスポットがあるわ」

メリイの先導で案内されたのは精錬所の端。

稼働した炉からは距離が離れ、監視所にはそこそこ近い。

「どうやらこの場所にエルダー達が時折散歩に来るらしい。」

「なるほど、確かに穴場だな」

この場所ならば敵からは見つかりにくく、同時に待ち伏せもしやすい。

「皆、ここに身を隠そう」

岩陰に身を隠し、エルダーが来るのを待ち受ける。

だが、どれだけ待ってもエルダー達は一向に現れなかった。

「んああああ!! 全然こねえじゃねえか!!」

初めに痺れを切らしたランタが立ち上がって騒ぎ出した。

「そんなに待つのがっらいんやったらその辺で寝てたらいんとちがう?」

「そんな事言つて、俺が寝たら置き去りにするつもりだろうが、このちつぱいが!」

「ちつぱいって言うな!」

ランタとユメの言い合いを聞きながら、ユキトは変な違和感のようなものを感じていた。

「どうしたの、ユキ?」

「……静かすぎる気がする」

炬から聞こえてくる製錬音は相変わらずだが、生き物の気配みたいなものが薄い気がする。

まるで向こうもこちらの様子を伺うように息をひそめているような。

それはハルヒロも同じだったようで、固い表情のまま周囲の様子を探っていた。

嫌な予感がする。

一旦四層に戻った方が良いかもしれないと提案しようとしたその時だった。

ユキト達が身を隠していた岩陰に何かが放り込まれたのは。

「なっ!?!」

突然の事に全員が武器をその手に掴み、構えを取った。

しかし放り込まれたものを見て絶句する。

投げ込まれたのは——死体となったレッサーコボルド。

何というかえげつない殺し方だった。

両目は潰され、体中も穴だらけ。

臓物が腹からこぼれ出て、体中に空いた穴からドクドクと血が流れている。

ある程度コボルド達の死体に慣れていても関わらず、思わず口を覆いたくなる残酷さである。

「なんだよ、これ」

何が起きているのか分からず、全員に得も知れぬ恐怖感が伝染する。

それをさらに強調するように、

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!!

そこら中から声高い遠吠えが木霊する。

「や、やばくね？」

「ああ、ハルヒロ！」

「逃げるぞー！」

即断即決。

もはや此処にいる事は危険だ。

原因なんて今はどうでもいい。

とにかく四層まで逃げる！

「走れー！」

横に座っていたシホルを立ち上がらせると同時に全員が一斉に走り出した。

「皆、こっちへー！」

この辺を知っているメリイの指示に従い、一目散に駆け抜ける。

だが途中でおかしなものが転がっている事に気が付いた。

コボルド達の死体だ。

無数のコボルド達の死骸が幾つも道端に置き去りにされていたのだ。

しかも数が尋常ではない。

一体どうして？

当然、ユキト達には身に覚えのないものだ。

他の冒険者達の仕業か？

「今は走れ！」

ハルヒロの怒声を聞きつつ足を止めず、走り続ける。

その先に待っていたのはコボルド達の群れ。

あの群れを突破しなければ四層には上がれない。

「モグゾー!!」

「うん！」

ユキトとモグゾーが揃って並び立つ。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!」

戦士のスキルである雄叫びウオークライ

独特な発声法による大声で敵を疎ませる技だ。

効果は抜群でコボルド達は皆、怯んだように動きを止める。

その機を逃さず群れの中に突撃する。

「止まるな！ 走れ！」

片手で抜いたショートソードで正面に立つコボルトの首をすれ違い様に断つ。

さらに足を止めず、もう片方の手で振るった剣を敵の頭部に突き刺した。

「ふも!!」

さらに隣に立つモグゾーの一撃が数匹のコボルト達を吹き飛ばす。

その威力に敵がたじろいだ所を見計らいランタやハルヒロ達が斬り込んでいく。

止まらない。

止まるわけにはいかない。

仲間の盾となる事。

仲間を守る事こそが戦士の役割だ。

皆を無事に逃がす為には此処を突破しなくてはならない。

「うおおおお!!」

「ふもおおお!!」

二人が剣を振るう度、敵の軀が積み上がっていく。

しかし多勢に無勢。

コボルト達の数は一向に減らず、少しづつユキトとモグゾーの動きは鈍っていった。

「くっ」

「二人共!!」

押され始めたのを見かねてハルヒロが突っ込んできた。蹴りがコボルドを倒し、振るったダガーが胸に刺さった。敵の動きは一瞬、間が空き体勢を立て直す時間が出来る。しかしハルヒロのそれは無謀だ。

敵の猛攻が止まった訳ではないのだから。

「ハルヒロ！」

体勢を立て直しハルヒロを庇うように前に出る。

「無茶するな！ 助かったけどさ！」

「^{アングァー}憤慨突アアア!!! そうだぜ、ハルヒロ！ お前は弱いんだから気をつけろ、馬鹿!!

……お前にまで死なれたら困るだろうが」

「分ってるよ！ メリィ、井戸までは？」

「もう少し！」

もはや全員がボロボロだ。

傷ついていない者は誰もいなかった。

それでもまだ持ちこたえていられるのはコボルド達の連携の拙さが理由だった。

はつきり言ってバラバラ。

まだゴブリン達の方がマシと感じる程には隙が多い。

しかも包围網もさほど厚くないのも救いだつた。

数は多いが囲いが甘く、突破が不可能ではなかつたのだ。

「よし、井戸が見えた！ シホル、メリイ、ユメが先に登れ！」

シホル、メリイ、ユメの女性陣が先に梯子を伝つて四層に上がっていく。

縄梯子は一見ボロそうに見えて、結構丈夫に作られている。

二、三人が同時に上つた所で切れたりはしない。

すでにモグゾーも上り始め、残るはユキトとランタだけだ。

「二人共早く！」

「ああ！ ランタ！」

「わあつたよ！」

ランタとユキトも梯子に飛びつき、一緒に上がってくるコボルドを蹴り落としつつ上り始める。

「このままなら——ッ!？」

先頭にいたシホルが四層に上がりかけたその時、風切り音と共に何か投げつけられる心配がする。

「ッの！」

ユキトは壁を蹴り、梯子を上がろうとしたコボルドを踏み台に飛び上がると飛来物を

籠手で叩き落とした。

「ッ、ナイフ!？」

地面に着地すると同時にナイフを投げつけてきた方向へ視線を向けた。

そこに居たのはある意味で最悪。

フードを被ったあの夜の襲撃者。

「……ジュンヤか」

よりによつてこのタイミングで。

それともアイツがこの状況を作ったのか。

どちらにせよ不味い事に変わりはない。

このままでは皆が狙い撃ちにされてしまう。

見ればシホル、メリイは上り切っているようだが、他はまだだ。

「時間を稼がないと」

コボルドを切り伏せ、持っていた剣を拾うとジュンヤに向けて投げつける。

しかし所詮は素人の投擲。

ジュンヤに当たる事無く、横を通り過ぎていく。

それでも注意を引き付ける事は出来たのか、今度はこちらにナイフを投げつけてくる。

「ユキト、早く上がって来い！」

「分ってるけどー！」

コボルドを上手く盾代わりに使い、ナイフを避ける。

この状況では梯子を上るのは無理だ。

狙い撃ちにされる。

「憤慨突！」

「ランタ!?!」

先に梯子を上がっていた筈のランタが飛び降り、得意の憤慨突でコボルドを突き殺した。

「何やってるんだよ！ 早く上に！」

「お前一人で格好つけてるんじゃないやねーよ！ こういうのは俺様の役割だつーの！」
相変わらずの憎まれ口だけど、今は頼もしい。

「ハア、ランタ、あつちに敵が居る」

「ツ、あのフード……お前らが言ってた奴か」

「ああ。最後のモグゾーが上り切るまでアイツを引き付けないと。それにコボルド達をこれ以上四層へ行かす訳にもいかない」

それでこちらの意図が分かったのかランタはニヤリと口元をつり上げる。

「さつきも言っただろうが、そういうのは俺の役目だっつーの！」

「……僕が敵を引き付ける。その間に！」

「おう、排出系！」

ランタが特異な身のこなしで瞬間的に後退するスキル排出系イタゾーストを使い、一気に梯子の間まで飛び上がるとロングソードで縄梯子を斬りつけた。

出来た切り傷は僅か。

だがそれで十分。

頑丈とはいえ縄で出来た梯子は無数に群がるコボルド達の体重を支えられず、途中で千切れてしまった。

「ヨッシャ！ 見たか!!」

「ランタ、ユキト、何やって!!」

「ハルヒロ、先に逃げる！ 僕とランタは別の場所から逃げる！ 行くぞ、ランタ！」

「仕切ってんじやねーよ！ お前こそ俺について来い、ユキト!!」

目の前の敵を斬り伏せると同時に駆けだした。

「ランタアア、ユキトオオオ!!」

ハルヒロの悲痛ともいえる叫び声を背中に受けながら、ユキト達は敵陣の中を突っ込んでいく。

二人の命を懸けの包囲網突破が始まろうとしていた。

第十七話 乱戦

息を切らしながら進んでいく通路。

進路上には無数のコボルド達が群がり、行く手を阻んでいる。

まるで毛の生えた壁が立ちふさがっているかのような光景。

それに怯む事無くユキトとランタは剣を片手に駆け抜けていく。

「ハアアアア!!」

「オラアアア!!」

剣を振るう度、肉を切る感触が手に伝わりコボルドの血を浴びる。

しかしそんな事に構ってられない。

コボルドの数は未だ減らず、武器を片手に斬りつけてくるのだ。

さらにこちらにも無傷とはいかず、すでに全身が切り傷だらけ。

致命傷を避けられているのは着込んだ鎧と普段の訓練のお陰だ。傷だらけの籠手で剣を弾き、コボルドの腹を横薙ぎに斬り払う。

「ランタ、突き技は使うなよ！」

「んな事は言われなくてもわかってら！」

「本当かよ」

この状況で突き技は命取りになる。

突き刺さった剣を抜くには一瞬の間が空く。

その間はこの乱戦では致命的な隙だ。

何時もならフォローする事も出来るが、今はそんな余裕は無い。

「何匹いやがるんだ！」

「知らないよ、そんな事……」

ランタがコボルドを一体切り倒し、その背後を狙う敵をユキトが切り伏せる。

走りながらの戦闘が此処までキツイとは思わなかった。

だが動きを止める事は出来ない。

止まれば一瞬で囲まれる。

動け！

動け！

動き続けろ！

「おおおお!!」

剣で顔を潰し、次の奴の腹を斬り裂き、さらに別の奴の腕を落とす。死屍累々。

ランタとユキトの通った後にはコボルド達の死体が無数に転がっている。それでも数は減らず。

包囲網は健在で、二人の行く手を阻み続ける。

「鬱陶しいんだよー」

「くそ、このままじゃいつか力尽きる」

数というのはそれだけで脅威だ。

斬っても、斬っても減らない敵。

痛み続ける武器と防具。

動き続け擦り減っていく体力と精神。

このままでは潰し殺されてしまう。

ならば――

「まともに戦うのは此処までだ！」

鼻先に拳を入れ、足を切り捨て、向かってくる他の敵の方へ突き飛ばす。

詰め寄ろうとしていた連中はぶつかつた衝撃でドミノ倒しのように、一斉に倒れ込んだ。

「今だ！」

包囲網の二画が大きく空いた。

ユキトとランタはそこを見逃さずに走り出す。

「今ので大分数が減つた！ このまま離脱するぞ！」

「だからお前が仕切るなつて！」

「別に仕切つてないだろ！」

壁となつていたコボルドは減り、包囲網を何とか抜ける事に成功した。

だが当然、コボルド達は大勢で追つてきていた。

「あんな数は相手にしてられない」

「びびつたのかよ」

「違う。僕達の体力も持たないし、何より武器が不味い」

走りながら手に持ったショートソードを見ると刀身は欠け、コボルド達の血と油で汚れているのが見て取れる。

乱戦の中では数えるのも馬鹿らしい程コボルドを斬つた。

その所為でショートソードの切れ味は格段に落ちている。

研ぎをしてもらったとしても、この剣はもう使えないだろう。

「ランタ、そつちは？」

「まだいける」

ロングソードを掲げてみせると、ユキトのショートソードよりはマシといった所だ。それでもこれ以上の連戦が続くなら、あれも使い物にならなくなる。

出来るだけ戦闘を避け、入り組んだ五層の通路を走っているとランタが声を掛けてきた。

「おい、ユキト、アレ」

ランタの指さした先。

そこにはユキト達が降りてきたものとは別の井戸があつた。

コボルド達もかなり引き離したし、あそこから四層に上がる事ができれば。

ただ問題もある。

ジュンヤだ。

多分、今もこちらを監視している筈。

アイツをどうにかしない限り、上には登れない。

先ほどランタとも話して一応作戦は用意してあるが、居場所が分からなければ実行可能かも判断できない。

「……………」

走りながら目立つフードを探していると、正面にジュンヤが立っていた。片手に細剣を持ち、殺気を放ってこちらを睨みつけている。

「ご丁寧待ち伏せしていたらしい。」

「苦勞な事で」

でもこの位置ならどうにかなるかもしれない。

「てめえ！　そこを退きやがれ!!」

排出系イグゾーストで加速したランタはその勢いのままジュンヤに斬りかかる。

ランタとしては会心の一撃であっただろう。

速度もタイミングも完璧だ。

しかしジュンヤはそんなランタの予測を軽く上回る。

構えていた細剣でランタの一撃をあっさり捌くと蹴りを入れて、岩壁に吹き飛ばした。

「ぐあああ！」

「ランタ!?!　この!!」

追撃させないつもりで、ジュンヤとランタの間に割って入る。

だがそれを後悔しそうになるほどの凄まじい一撃がユキトを襲った。

「ッ!？」

速い。

あの夜に繰り出された一撃よりも速く感じる。

「(っ)のー！」

それでも防ぐ事が出来たのは心構えが出来ていた事に加え以前にもジュンヤの斬撃を見ていたからだろう。

「シッー！」

「やら、せ、ない!!」

続け様の連撃をどうにか捌き、動きを止める為、斬撃を無理やり剣の腹で受け止める
とシヨートソードと細剣が火花を散らした。

そんなユキトの足掻きが気に入らなかったのだろう。

苛立ちを隠さず舌打ちしながら左手に持ったナイフを振り下ろしてくる。

もう一本の剣を引き抜く暇はない。

咄嗟の判断で突き出した籠手で無理やりナイフを止めると正面から睨みあう。

「チッ、鬱陶しい。無駄に足掻くな」

「何で俺達を狙う？ 何が狙いだ！」

「……………くだらない事を聞く」

初めて聞いたジュンヤの声に息を飲んだ。

思った以上に暗い声。

何か寒気のようなものを感じさせる、そんな声だ。

「……貴様らはアナスタシアの血族。始末しようとするのは当たり前だ」
血族。

初めて聞いた言葉だが、多分アナスタシアの部下的な意味合いがあるのだろう。

しかしだからこそ腑に落ちない。

「その血族とかいうのが何かは知らないけど僕達はお前達に何かした事なんてないだろ？　そこまで執拗に狙われる理由なんてない！」

ユキト達が反ギルドに関する仕事をしたのは一度だけ。

しかも直接関わった訳ではなく、単なる支援だ。

そこでもゴブリンを倒しただけ。

こんな奴に付け狙われる理由はない。

だがそんなユキトの回答が気に入らなかったのか、さらに殺気を膨れ上がらせてきた。

「……貴様ごときに答える義理はない！」

力任せに弾かれ、突きの一撃がユキトを岩壁まで押しやった。

「グハ!？」

「今日はこの前のようにはいかない。確実に殺してやる」
ジュンヤは逃がす気はないと再び剣を振り上げる。
でもそれはこつちだつて予測していた。

「ランター！」

「オラアア!!」

蹲っていたランターがイケソリスト排出系で飛び起きると、背後からジュンヤへと斬りかかった。

「ッ!？」

奇襲めいた一撃ではあったがジュンヤも警戒していたのだろう。

細剣を逆手に持ち替え、後ろに振り抜く事で防御した。

信じがたい反応速度だ。

アレも経験と訓練の賜物か。

でも今更そんな事では驚かない。

何故なら毎晩ジュンヤを上回る怪物と打ち合いを行っているのだから。

「相手はランターだけじゃない！」

ユキトは迷わず踏み込み、ショートソードを一閃する。

だがそれも左手のナイフで受け止められてしまう。

ランタに注意を引かれ、片手がふさがっているにも関わらず、全く遅れもなかった。これが地力の差。

積み重ねてきたすべてを束ねた決定的な実力の差だ。

「でも、そんな事は初めから分かってるさ!」

真つ向勝負ではジュンヤに勝つのは無理だ。

それはこの間の手合わせで十分に理解している。

だから――

「ハの!」

拾っていた足元の石を拾い、ジュンヤ目掛けて投げつける。

狙ったのは面積の大きい体。

この至近距離ならば、避ける事は難しい筈。

しかしそれすらも体をねじり、ランタを退けて石を避けて見せた。

「舐めるな、この程度!」

「ああ。初めから当たると思っていないさ!」

イクゾースト
「排出系!!」

「ツ!?!」

加速したランタが背中からジュンヤに突撃をかける。

要は体当たりだ。

投石により体勢を崩したジュンヤに避ける事はできずランタと激突する。

「痛つてえ！」

「ぐ!?!」

この戦いにおいてユキト達に有利な点があるとすれば一つ。

それは数だ。

二対一。

だが普通に戦えば実力差があり過ぎて二対一でも敵わない。

しかしそれもやりよう次第。

勝つ必要はない。

要はこの場を切り抜け、ジュンヤから逃れれば良い。

そして最終的にオルタナにたどり着けばいいのだ。

奇策に引っかけかり膝をついたジュンヤが怒りで顔を歪める。

「貴様ら——ッ!?!」

地面に転ぶユキトやランタは笑みを浮かべていた。

そしてジュンヤも気が付いたのだろう。

聞こえてきた足音に。

「コボルド共!？」

そう、近づいてきた足音はユキト達を追ってきたコボルドの群れだ。引き離れたコボルド達がすでに目と鼻の先まで近づいていた。

「あれに乗じて逃げる気か！　そうはさせるか！」

「もう遅い！」

もう一投、石を投げつけるとジユンヤは回避する為に後ろに飛びのいた。

その間。

短いその時間でコボルドの群れは三人がいる空間に到達し、あつと言う間に包囲してしまった。

「雑魚共が！」

それでもジユンヤにとっては脅威でも何でもない。

ただ獲物を狩るのに邪魔なゴミが増えただけだ。

振るう剣に迷いも躊躇いもなく、群がる獲物を突き殺していく。

突きの一撃にも関わらず、引き抜く際の間も恐ろしく短い。

だが——それでも間があるのは事実。

狙うならここしかない。

コボルドの頭部を刺し貫いた所を狙い、足を斬ったコボルドをジュンヤの方へ突き飛ばす。

当然だがジュンヤの反応は早い。

そうでなければ無数のコボルドの攻撃を捌きつつ、撃退など出来まい。予想通りすぐさまコボルドを押しつけようと蹴りを繰り出してきた。

そこでジュンヤの表情が凍り付く。

「ッ!?!」

蹴りで退かしたコボルドの陰からユキトが飛び出してきたからだ。

死角からの一撃。

ナイフで防ごうとするが、コボルドに邪魔されて間に合わない。

「ハアアアアア!!」

下段から斬り上げたショートソードがジュンヤの右腕を捉え浅く傷をつけた。

肉が抉られ、鮮血が舞う。

身を引いたお陰か傷自体は軽傷。

しかし、

「貴様アアアアア!!」

ジュンヤの思考が憤怒に染まる。

こんな未熟者共の策に嵌まり手傷を負うなど、百回殺しても飽き足らないほどの屈辱だった。

怒りに任せユキトの顔面に拳を叩き込み、さらに腹に蹴りを入れる。

「グハア!」

「雑魚が! お前らごとくときが!!」

さらに痛めつけるようにグリグリと頭を踏みつけた。

「手間を取らせるな!」

作戦通りとはいえその光景を見ていたランタは自分の中に言いしれぬ熱を感じていた。

それは訓練で言われたアナスタシアの血の活性化。

「上等だぜ」

リスクも覚悟の上。

ここでやらなきや男じゃない。

訓練を思い出し意識を集中させ、コボルドの群れに隠れて近づいていく。

「終わりだ」

「……俺……ち……だ」

止めを刺すべく細剣を振り上げると地面に倒れたユキトがボソボソと言っているのがジュンヤの耳に届いた。

何を言っているかは聞き取れない。

だがそんな事はどうでも良い。

「今度こそ死ね！」

細剣をユキトへ叩き込もうとしたその時、再びコボルドがジュンヤの方へ突き飛ばされてくる。

「同じ手が通用するとも思ってたか!!」

死角を警戒しながらコボルドを始末する、ジュンヤ。

その佇まいに隙はなく、もはや奇襲も無意味かと思われた。

しかしそこでジュンヤの足に激痛が走る。

「なッ!?!」

「言った、だろ。俺、達の、勝ちだって」

ユキトが拾ったコボルドの剣でジュンヤの足を突き刺していた。

「貴——」

「うおらあああああ!!」

注意を逸らした一瞬の隙に排出系で踏み込んだランタの一撃。しかもその眼は月のように紅く染まっていた。

「なっ!? チッ!」

ジュンヤも反応する。

だが、足の負傷。

コボルド達の死体が散乱しているが故に狭まった足場。

未熟者と見下していた者達の予想外の反撃による精神的動揺。

それらが彼の普段の力を奪い去っていた。

さらにこの土壇場でランタが紅い眼となり、いつも以上の力を発揮した事がジュンヤにとって災いとなる。

ランタの身のこなしと斬撃は先ほど以上に速く、回避のタイミングを逸してしまったのだ。

「ぐあああああ!!」

ロングソードの一太刀が深々と傷を刻み込み、左目を抉られたジュンヤは苦痛に呻く。

「ツ、く、ユキト、さっさと立て!」

「分ってる」

ズキズキする腹や顔の痛みをどうにか堪え、立ち上がるとジュンヤを振り切るようにして走り出す。

コボルドの数もジュンヤが大分減らしてくれたお陰で、包囲網は隙間だらけだ。邪魔する数匹を斬り殺し、梯子にたどり着くと脇目も振らず駆け上がったいく。

ジュンヤの妨害はない。

あの負傷ではそう簡単に動く事は出来ない筈だ。

四層に上がり二人そろって走り続け、気が付けば豚鼠達の柵の中に身を潜めていた。こいつらは人間に危害を加える事はないようでその辺は助かる。

「ハア、ハア」

「くっ、ハア」

今更ながらに体が震えてきた。

本当に命懸けだった。

即興とはいえ事前に考えた作戦が嵌った事が幸いした。

一歩間違えば死んでいたのだ。

ジュンヤが本来の実力を発揮していたら、真つ向勝負で戦っていたらユキトやランタなどすぐに殺されてしまっただろう。

だが、震えている理由はそれだけではない。

いや、むしろこちらが主な理由。

ユキトは――

ランタは――

人を斬ったのだ。

手には生々しい感触が今でも残っているし、刀身にはジュンヤの血がベツタリついたまま。

気分が悪い。

今まで散々ゴブリンやコボルドを殺しておきながらと思いはするが、やっぱり相手が人間となると精神的な負担が違う。

何をいまさらと言われても仕方ない。

それでもやっぱり現実には人を斬ったという事実はユキトやランタに想像以上のショックを与えていた。

しばらくは声も出せず、震えを止める為蹲るように膝を抱えていると隣に座っていたランタが高笑いと共に立ち上がった。

「ハハハハ、や、やったな！ 流石は俺、あんな奴全然大した事なかったぜ！」

「……その割に声とか膝とか震えてるけど？」

「なっ、ちげーよ、これは武者震いって奴だ！ 俺様は暗黒騎士だけ、こんな事くらい

でビビるかよ！」

相変わらずの物言いの少しホツとしてしまった。

「体の方は？」

紅い眼になった事でランタの体力はかなり減っている筈だ。

「一瞬だったしな。ま、かなりだるいけど、休めば動けなくもねーよ」

「……そうか。ランタ、ありがとう。君が居てくれて助かったよ」

「な!? な、なんだ、突然、気持ち悪い」

「礼を言ってるんだから素直に受けとればいいだろ。だから皆から色々言われるんだよ」

するとランタは突然口を閉ざして、地面に胡坐をかくとゾディアックんを呼び出す。

「……んな事は分かってんだよ。俺がお前から嫌われている事ぐらい、知ってるっての」

何時ものランタらしくもない。

神妙な顔で後ろに手をつき天井を見上げながらポツリと呟いた。

「別にいいけどな、無理してまで好かれようとか思わねーし。俺は俺だし。俺の実力がわかる奴に分かれればいいっーか、認めてもらえれば十分っーか」

(ククク、一人で語って、気持ち悪いな、ランタ)

「気持ち悪いとか言うな！」

ゾディアックくと漫才を繰り広げるランタを横目で見る。

空気読めないランタではあるが、彼なりに自分の事は考えていたのだろう。

「分かってないな」

「何がだよ」

「皆、認めてるさ、ランタが仲間だって」

余程驚いたのかランタが口を開けてこつちを見ている。

少し可笑しくなったユキトはからかうように笑みを浮かべた。

「ま、嫌われてるのも事実かもしれないけどね」

「お前は一言多いんだよ！」

いつの間にか深刻な雰囲気は消え、普段通りの空気の中ランタとバカ騒ぎを始める。

命の危機を乗り越え、安心したからかもしれない。

しかし本当の危機はこの先に待っていた事をユキト達はまだ知らなかった。



地面に転がる無数の死体。

それは先ほどもユキト達を包围していたコボルド達だ。

無残な屍を晒し、息をしている者は誰もいない。

皆殺しにされている。

そんなコボルド達の亡骸が散乱する中では、この惨状を生み出した張本人であるジュンヤが蹲っていた。

「くううう、雑、魚がアアア!!」

斬り裂かれた左目からは止めどなく血が流れ、激痛が走る。

しかもジュンヤを傷つけた剣にはコボルドの大量の血液や体液が付着していた筈。

下手をすれば傷口から菌が入り込む可能性もあった。

早めに帰還して治療を受けなければ、命の危険すら考えられる。

「ち、きしょう」

手元のバツクから綺麗な布で負傷した足と手を止血し、目を抑える。

そんな時、血の臭いに誘われてか、あるいはジュンヤの叫びに寄ってきたのか。

コボルド達が数匹こちらに向かってきていた。

それがどれほど無謀な事か。

自分達が今、口を開けた猛獣の元に向かっている事など気づかない。

「邪魔しかりしない屑どもめ」

怪我を感じさせない動きで一足飛びに距離を詰めるとコボルドに細剣を叩き込む。

頭蓋を貫通し抵抗すらできず即死したコボルドを蹴り倒し、さらに背後に回った敵の喉にナイフを振るう。

例え視界が狭まろうとも、負傷をしてもジュンヤの動きに乱れはない。

いや、普段の冷静な戦いぶりとはかけ離れ、まさに猛獣ともいうべき苛烈さでコボルド達を皆殺しにしていく。

「殺す、必ず殺してやるぞ！ ユキトオオ、ランタアア!!」

コボルドなど何匹殺そうが怒りは収まらない。

この怒りと憎しみは奴らに相応の苦しみを与えなければ到底つり合いの取れるものではなかった。

群がるコボルドを全員殺し、一度サイリン鉱山から出ようと歩き始めた時、一際大きな足音が聞こえてきた。

「……フ、フハハハ」

近づいてきたのは斑模様の巨体。

オルタナに居る冒険者の誰も、知るサイリン鉱山の死神。

「丁度良い。お前を使うか」

自分の手で殺せない事は口惜しいが、奴らにとつてはこいつに殺される方が一層の恐怖を味わえるだろう。

そうすれば少しは溜飲も下がるといふもの。

愉悦の笑みを浮かべながらジュンヤは細剣を構え、巨体の方へと歩いていった。